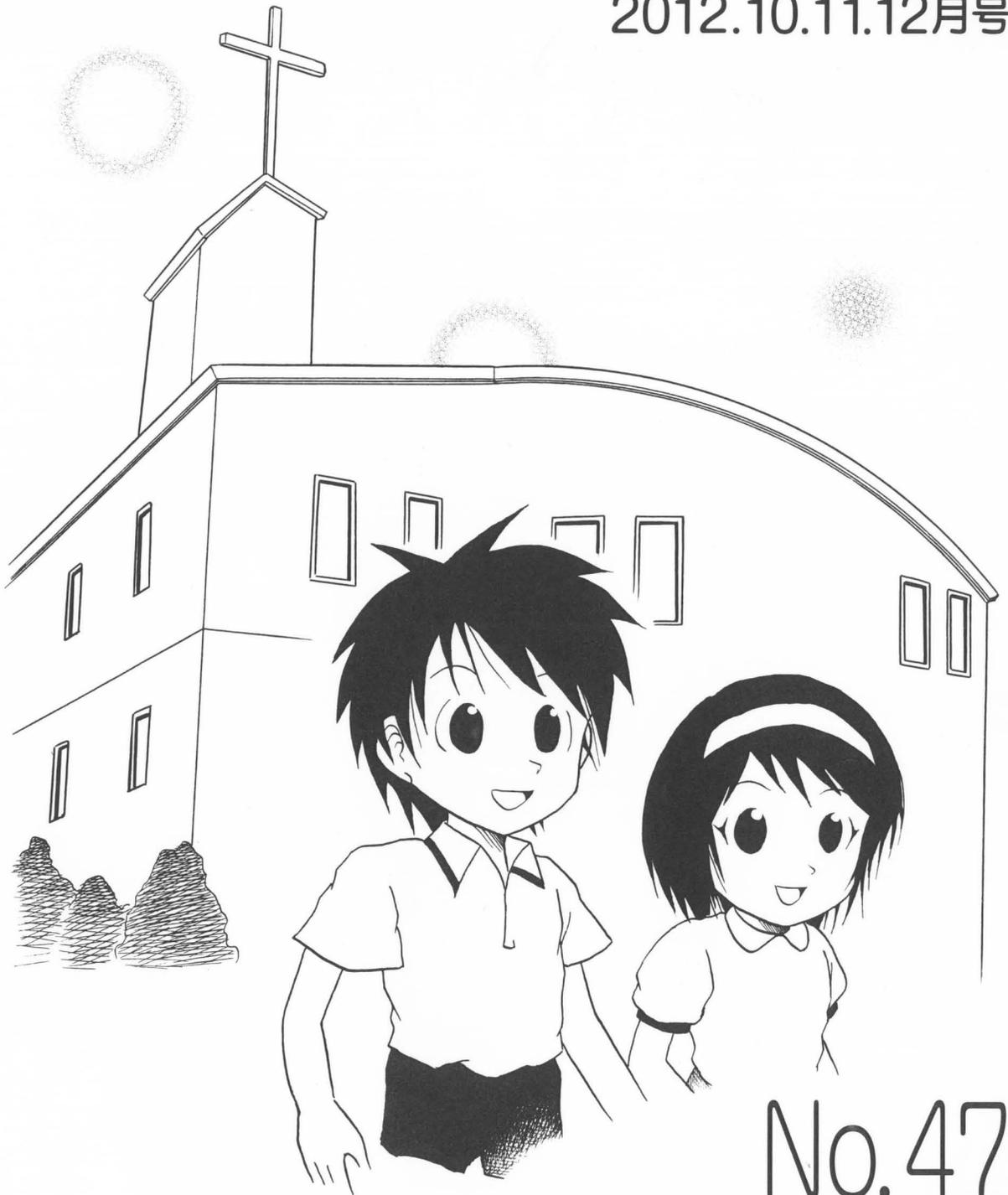


教会学校教案誌

2012.10.11.12月号



No.47

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2012年10～12月カリキュラム (第47号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月7日	二性一人格	問22	ウ小教理21, 22
		ルカ1:26-38	ルカ1:28b
神であり人であられる救い主が与えられた驚くべき神の御業を喜ぼう			
14日	罪からの救い主	問23	ウ大教理41, 42、ハイデ29, 31
		マタイ1:18-25	マタイ1:21b
罪からの救い主が私たちと共にいてくださる。この恵みを共に喜ぼう			
21日	謙卑のキリスト	問24	ウ小教理27、ウ大教理46-50
		ヘブライ12:1-3	ヘブライ12:1b, 2a
謙卑のキリストが共にいてくださる幸いを知ろう。私たちも忍耐強く歩もう			
28日 宗教改革記念	高挙のキリスト	問24	ウ小教理28、ウ大教理51-57
		ヘブライ5:7-10	ヘブライ5:8-10
高く上げられ、神の右に座しておられる救い主を仰ごう。そこに平安がある			
11月4日	預言者イエス	問25	ウ小教理24、ウ大教理43
		ヘブライ1:1-4	ヨハネ1:12
まことの預言者・神の御言葉の完成者である主イエスの御声に聞こう			
11日	大祭司イエス	問26	ウ小教理25、ウ大教理44
		ヘブライ4:14-16	ヘブライ4:16
罪を背負って贖いの御業を成し遂げてくださった大祭司イエスをほめたたえよう			
18日	真の王イエス	問27	ウ小26、ウ大45、ハイデ31
		ヘブライ3:1-6	詩編23:1-3a
主イエスはまことの羊飼いとして王であられる。このお方の羊として歩もう			
25日	恵みのみ	問28	ウ大教理58、ハイデ60, 61
		ルカ18:9-14	ローマ3:24
神の救いはただ恵みとして与えられる。この福音に生きることへと励まそう			
12月2日 アドベント	選びと有効召命	問29	ウ小教理29-32、ウ大教理59
		ルカ5:1-11	ローマ8:30
主なる神は罪人を愛して選び出される。神に召し出されている幸いを喜ぼう			
9日 アドベント	救い主を待ち望む (一)	—	子どもカテキズム22
		ルカ1:5-25	ルカ1:13
私たちの思いを超える大きな贈り物をしてくださる神の大きな御業を待ち望もう			
16日 アドベント	救い主を待ち望む (二)	—	—
		ルカ1:57-66	ルカ1:76, 77
救い主を迎えるための備えをしたヨハネ。私たちも備えて救い主を迎えよう			
23日 降誕祭	主イエスの降誕	—	—
		ルカ2:1-7	ヨハネ4:9a
主なる神の大きな愛のあふれる贈り物である主イエスの降誕を喜ぼう			
30日 年末	再臨を待ち望む	—	子どもカテキズム35, 36, 80
		黙示録21:1-4	ヨハネ16:33b
主イエスは再び来られるお方である。その平安の内に、一年を締めくくろう			

も く じ

2012年10・11・12月カリキュラム	
まえがき	袴田康裕 4
巻頭説教	宮武輝彦 5
日曜学校・教会学校訪問	
聖愛幼稚園の紹介	井原忠郷 8
副読本のご案内 13
自由募金のお願い 14
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例 15
10月 7日 16
10月14日 24
10月21日 31
10月28日 38
11月 4日 46
11月11日 53
11月18日 60
11月25日 67
12月 2日 74
12月 9日 82
12月16日 89
12月23日 96
12月30日 105
2013年1・2・3月カリキュラム 113
2012年度年間カリキュラム 114
執筆者よりひとこと・あとがき 116

まえがき

袴田康裕（園田教会牧師）

教育の問題が政治家たちによって盛んに論じられています。言うまでもなく、大阪維新の会が推進している「日の丸・君が世条例」や「教育基本条例」のこトです。これらについては様々角度から論じることができますが、キリスト者として見落としてはいけないのは、「教会と国家」の視点、とりわけ教育権の視点で問題を見つめるこトです。教育権とは、子どもを教育する権利のこトです。その権利を国家が持つか、それとも両親・保護者が持つかというこトです。日本では1890年の教育勅語の発布によって、国家が教育権を持っているこトを一方的に宣言しました。国家が教育権を持っているというこトは、教育は国家の欲する人間を作ることを目的とするというこトです。当時は、天皇のために生き、天皇のために死ぬ人間を作ることが教育だとされました。親から子どもを取り上げて、そういう人間を作って、戦争に送り、死んでもなお靖国神社に祭って、あくまで国家の価値体系の中に個人を隷属させました。それが戦前の教育理念でした。

戦後の教育基本法は、その反省から生まれたものであり、国家の教育権を明確に否定していました。しかし、2006年の教育基本法の改訂でその部分が曖昧にされ、さらに、今回の教育基本条例では、政治が教育に介入することを目指しています。つまりこれは、教育権を再び、国家・公権力が握ろうとするこトなのです。

聖書的に言えば、教育権は明確に両親・保護者にあると言えます。その根拠は十戒の第五戒「あなたの父母を敬え」です。聖書によれば、父母の権威は神による権威です。それゆえ、その子どもたちは、単に「敬う」つまり単に従順であることが求められているのではなく、神の立てられた神の約束の伝達者として、父母を尊

び、その教えに聴き従うことが求められるのです。親たちには、子どもたちに、御言葉と神の約束を教えることが命じられました。申命記6章6節7節には「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」と命じられています。子どもの側には、両親を敬い、彼らを通して神の言葉を聴くことが命じられ（箴言6:20、23:22）、両親の側には、子どもたちに御言葉を教えて、信仰を受け継がせることが命じられているのです。

このように教育権は両親にあるというのが聖書の教えです。そしてイスラエルがそうであったように、親たちはその家庭で教えるとともに、親たちの構成している信仰共同体の中で、次の世代の教育を行いました。同様にキリスト教会も、両親の教育権を基本としつつ、共同体としての教育の責任を担っているのです。

今日の公教育における教育委員会制度は、この教育権は両親にあるという理念に源を持っています。教育委員会制度は、ピューリタンのニューイングランドで生まれたものです。しかし橋下市長は、政治からの中立を前提としているこの教育委員会制度を敵視し、それを政治権力に屈服させようとしています。それは、キリスト者にとっては、教育権の問題に深く関わっているのです。

国家・公権力に教育権があるとされれば、どんな学校教育がなされても、すなわち仮に露骨に異教的な教育がなされても、正当に抗議することもできなくなります。今日の教育改革は、そのような危険性をはらんでいます。まさに、日本のキリスト者の未来にかかわる重大な問題が関わっているのです。

御言葉を「与える」という献身～大祭司イエスの祈りに学ぶ～

～ヨハネによる福音書17章1～10節による説教～

宮武輝彦（芸陽教会牧師）

イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命をお与えることができます。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、御前でわたしに栄光をお与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのもだからです。わたしのものはすべてあなたのもの、あなたのもはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。

（ヨハネによる福音書17章1～10節）

はじめに……「与える」ということ

わたしたちの生活には「与える」こと、むしろ、「与えられること」に大きな影響を受けています。大量消費社会とメディア・情報（化）社会の中で、わたしたちは、様々な情報や物資を含めて「与える」ことよりも、「与えられる」こと（受け身であること）に慣れており、その影響を強く受けていると思います。その意味で、教会教育（福音宣教）の現場においても、何を「与える」か、ということ、また、主の大いなる恵みを受けた者たちが何を人々に「与えて」（分かち合って）生きていくかに、その注意をよく払うことがとくに大切であろうと痛感するものです。

「与える」と訳された聖書の言葉

ヨハネによる福音書では、とくに「与える」という動詞がよく用いられていて、この17章の大祭司イエスの祈りにはとくに繰り返して用いられています。1節から10節までに、新共同訳聖書では、9箇所（1, 2, 4, 5, 6, 7, 9節）も見つけることができます。17章全体では、その他に5箇所（11, 12, 22, 24節）あります。（ちなみに、ギリシャ語の「与える」に相当する動詞が、8節では、「受けた」、14節では、「伝えた」と訳され、1節、5節の「栄光をお与えて」は、もとは他の動詞で、栄光を現す、とも訳される言葉です。）

三つの観点から

それでは、この「与える」という動詞に注目しながら、①イエス（御子）が御父に何を与えてください、と祈り求めておられるか、また、②御父は御子（主イエス）に何を与えられたか、そして、③御子は御父からゆだねられた人すべてに何を与えられるか、を学びましょう。

①イエス（御子）が御父に祈り求められたもの
それは、「あなたの栄光を現すようになるために、」（1節）「世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光」（5節）です。それでは、この「栄光」とは何でしょうか？
それは、「父の独り子としての栄光」（1章14節）であり、「恵みと真理とに満ちていた」（同）ものです。

本来、その本質において同等の栄光と権威をお持ちであったお方が、「栄光」を求めて祈られることそのものが、とりなしそのものです、実に、御子の祈りは、その栄光をお捨てになられた、御子ご自身が身代わりとなられたすべての人々のためであり、御子が栄光を与えられることとは、あがないの御業の完成そのものです。

②御父は御子（主イエス）に何を与えられたか
それは、「すべての人を支配する権能」（2節）、
「行うようにと、あなた（御父）が与えてくださった業」（4節）、
「世から選びだして……くださった人々」（6、9節）です。
「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。」（5章36節）とあるとおり、あがないの御業そのものを、御父は御子に与えてくださり、世から選び出して御子に与えられた人々をご自身のものとして買い戻してくださるのです。

そして、御父は御子に「御名」を与えてくださり（12節）、
「御名」によって、御子に与えられた人々を、御子は守ってくださるのです。

それは、「御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた」（3章35節）からです。ここに、私たちが知るべき、御子の権能の広がり、と豊かさがあります。

③御子は御父からゆだねられた人すべてに何を与えられたか

それは、「御名を現し」（6節）、御父から受けた（御父が与えられた）「（御）言葉を彼らに伝え」（8、14節）、
「彼らを聖なる者」（17節）とすることです。また、御父が御子に与えられた栄光を、御子は「彼らに与えました」（22節）。そして、御子（主イエス）は、「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。」（11節）、
「父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいるところに共におらせてください。」（24節）と、御業を成し遂げられた今も、御父にとりなしてくださっています（6章37節以下参照）。

そして、「子（御子）はあなた（御父）からゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができ」（2節）、
その「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなた（御父）と、あなたのお遣わしになったイエス・キリスト（御子）を知ることです」（3節）。

大祭司イエスの祈りの目的

このように、大祭司イエスの祈りは、私たちのためにとりなしてくださる祈りそのものであり、その祈りの目的は、ただ、御父（まことの神）の栄光を現すこと、そのものです。そして、その栄光こそ、御父が御子に「くださった栄光を、」御子に与えられた人々に「与えた」（22節）栄光です。

そして、その目的は、御父と御子が「一つであるように、彼らも一つになるため」（22節）であり、「天地創造の前から」御父が御子を「愛して、与えてくださった」御子の「栄光を、彼らに見せるためです」（24節）。

教会は一つ

教会は、このように、御父と御子が一つであるように、一つのものであります。一致は求めて得られるものというよりも、御子において一つであることを信じることに求められるものです。教会学校の役割と使命は、何といたっても、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3章16節）とこと、御子こそ、神の賜物そのものであり、このお方を通して現れた神の「恵みと真理」（1章17節）を、すべての人々に身をもってお伝えすることにあります。そして、この使命に応じて生きようとするとき、大祭司イエスのとりなしの祈りこそ、わたしたちを支える祈りであり、御言葉そのものであると信じるものです。

私たちの祈り

「恵み深い主よ。私は、この自分の使命を受け入れるようになりました。このために私はすべてを捨ててあなたに従います。信仰をもって、私のすべてを御手にささげます。目を覚まして、祈りにおいて戦うあなたの祈りの戦士として、また力をもって勝利を得たイスラエルとして、また神の子として私を整え、訓練し、奮い立たせてください。私の心をとりこにし、神が与えてくださった者たちが集められ、きよめられ、また一つにされることによって、主の栄光の現れることを願う者として、心を満たしてください。これを学び、自分の知恵とすることによって、どのような時に祈りが祝福をもたらすかを知ることができますように。私を完全にあなたのものとし、いつも神の御前に立ち、御名によって祝福を祈る祭司にふさわしい者とさせてください。」（『キリストと共に一祈りの学校』アンドリュー・マーレー著 中村寿夫訳 いのちのことば社 257頁：第27課 大祭司キリストより祈りの言葉の一部を引用）との祈りを新たにしたいと思います。

結び……御言葉を真実に与える、という献身を祈り求めつつ

そして、私たちの日々の霊的な訓練と献身の中で、教会学校のすべての活動が祝福され、「主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた」（使徒20章35節）、御言葉の真意を悟り、理解することができるように祈り求めたいと思います。「与える」とは、多くの人々が思いめぐらしがちな、単なる上から下への賦与よりもむしろ、御父の御心を成し遂げてくださり、その身代わりとして十字架の上にはさげられ、「死者の中から復活され、天において御父の右の座に着かれた」（エフェソ1章20節）ほどに、御父と御子が一つとなられたように、本当の謙遜と従順において、わたしたちを一つとしてくださった、本当の愛と献身と奉仕そのものであることを（マルコ10章45節、ガラテヤ1章4節、ルカ22章19節、ヘブライ5章7節）。

そして、教会学校の教案誌のために奉仕するすべての方々が、お互いに、御父が御子（主イエス）に与えられた者同志として認め合い、助け合って、これからも、忠実な良き僕（しもべ）として、「神を深く知ることができ」（エフェソ1章17節）、神の栄光を現すことができますように、祈りたいと思います。そして、愛する独り子をも惜しまずに与えてくださった神に、その大いなる賜物である「愛」（コリント一13章31節）を求め続けたいと願います。……「どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。」（ヘブル13章22節新改訳）。



聖愛幼稚園の紹介

～自然を仲間として、沢山の恵みを感謝できる素晴らしいさを～

井原忠郷ただくに（聖愛幼稚園四代目園長）

1. 聖愛幼稚園の創立と経緯

1907年10月1日（明治40年）瀬戸内海に面した町、竹原市忠海町の民家を借りてキリスト教の宣教が始まりました。そしてその三年後、1910年1月1日（明治43年）に忠海教会初代の牧師、井原郷祐・節子夫妻によってこの地の幼児教育の場として聖愛幼稚園が創立されました。

当時は幼児教育が重要だと考えられていない時代で、幼子を中心とした教育の必要性を感じ、キリスト教の伝道と共に幼児教育（特に初代園長はフレーベルの考えによる幼稚園教育を！という考えの元に）を始めました。

広島県忠海町は小さな町ではありませんでしたが、文化経済の地方中心地でもありました。また仏教の浄土真宗（安芸門徒）が大勢を占める地域で当時はかなりの人口がありましたが、現在は6500人位に対してお寺が八つもあるという仏教の勢力の強い地域でもありました。こうした中で、幼児教育の重要性が理解されることにより、キリスト教も少しづつではありますが、理解を得るようにはなりましたが、本当の意味で地域に根差すキリスト教会としての働きが進められるまでには長い時間が必要でした。

例えば、初めの頃には入園料だけ受け取って、月々の保育料の徴収をしないという方法で幼稚園経営を進めた記録があって、初代牧師・園長の家族の大きな犠牲のもとに、キリスト教保育が続けられたということで、牧師・園長の家族には栄養失調で亡くなった者や幼稚園経営を助けるためにラジオ屋を開業した者までいました。



井原郷祐（創設者）



大正15年頃の幼稚園・園庭風景



現在の幼稚園・園庭風景

クリスマスには、「耶蘇のまつり」ということで、園児を通わせている保護者がオイモやミカンを台所に山のように届けてくれて、日頃は収入が無かったので、とてもありがたいプレゼントだったと三代目の園長が回顧していました。その他にも、園児の健康管理をして下さった園医さんも、健診の代金を受け取らないで、協力をしていただいたようで県へ報告した書類

の控えに「無給」と記載されていました。このように多くの人達の理解と協力を得て、さらに神さまの大きな愛に守られ、導かれて、聖愛幼稚園は2010年に創立100周年を迎えることが出来ました。

その間に送りだした卒業生の数は3900名余りを数え、この地域のキリスト教保育「幼子をキリストへ」を守り続ける事が出来、心から感謝しております。

しかし、この100年は決してスムーズな100年ではありませんでした。前述のような経営管理だけの問題ではなく、保育者の確保や園長の死亡、さらには地震による被害や最近では、今や日本全体の課題にもなっています、少子高齢化、に加えて過疎化という大きな問題がいつも一緒に存在したように思うのです。

各地の幼稚園・保育園が法人化する中で、今もなお個人立（102条）幼稚園として、累計赤字も8,000万円を越えるという普通では考えられない幼稚園経営を続けていまして、現在は三歳児から五歳児まで、全員で12名の子どもたちと2名の教諭+四代目園長と妻の副園長（園長夫婦は実質無給）で103年目の保育を継続しております。まさに、奇跡に近い継続状態です。

しかし、102条園でありながら竹原市教育委員会は「聖愛幼稚園の継続を願いたい!」ということで、毎年230万円の補助金（私学助成法により補助金としては出せないの、委託費という名目で）で応援をしてくれています。さらに、改革波忠海教会も小さな組織でありながら、常に祈りに覚えていただき、「聖愛幼稚園の働きの為に!」と特別献金を続けて下さっています。

もう少し、聖愛幼稚園の働きを神さまは用意し、期待していて下さるのだろうか! と感謝し、この地の幼子たちのために頑張らなくては? と考えています。しかしながら、12名の保育料を中心とする会計は、毎月20万円の赤字を計上せざるを得ないのも現実ということです。

2. 聖愛幼稚園の環境

聖愛幼稚園は現在では人口が6500人ほどになった小さな町にある唯一の幼稚園です。お寺が経営する社会福祉法人で戦後に建てられた保育園が二園ある他には幼児教育施設はありません。

聖愛幼稚園から、子どもの足で約20分も南へ歩けば、美しい瀬戸内海の海岸まで行くことができ、約20分も北へ歩けば黒滝山の麓まで行くことができるという自然環境が子どもたちのすぐ近くにある素敵な位置にあります。忠海港から船に乗って12分で、戦前は毒ガスを生産していた島、大久野島に行くことができます。現在、この島は国民休暇村に変わって、春夏秋冬、スポーツ（テニス、ソフトボール、サイクリング）や磯釣りを楽しむ人たちがいっぱいになります。聖愛幼稚園の子どもたちは、毎年秋には大久野島へお弁当を持ってピクニックに出かけています。

園内を見てもみますと、ドングリを植えて45年の時を経過したクヌギ（椈）の大木が大きく手を広げたような緑の葉で子どもたちに素敵な木陰の作ってくれます。木の枝は子どもたちが木の上の方まで登れるように剪定をされていて、裸足で元気に登って行く姿が見られます。秋には大きなドングリを沢山子どもたちにプレゼントしてくれ、「ドングリコマ」を作ったり、「数あそび」の仲間に加わって遊びを広げてくれています。このクヌギのすぐ近くにある、小さなピオトープは小さな流れを作って、小さな流れの中で育った「ヤゴ（トンボの幼虫）」が、子どもたちの目の前で羽化する様子を見せてくれます。二時間以上も時間をかけて、羽を乾かし、やがて大空へ飛んでいく姿を保育者と子どもと一緒に見ることができる時に、自然界の不思議さと、小さな生命への神さまの守りを感じることができると思うのです。



ドングリを植えて40年・クヌギの大樹



木登り大好き

このビオトープに小さな赤い鉄橋（実は木製ですが）がかかっている、その鉄橋を年長組の子どもが押す「トロッコ電車（すみれ号）」が渡って行きます。レール幅25センチの電車？は定員四人の電車ですが、もう線路が敷設されて30年以上、何度もメンテナンスを繰り返しながら、子どもたちの大好きな乗り物になっています。

少し離れた位置にある「亀の池」には大小10匹余りの亀がいて、6月頃になると砂山に穴を掘って卵を産み、夏が過ぎた秋の初めに数匹の子亀が元気に砂山から出て来る姿を発見する

こともあって、子どもたちに、小さな生命の育ちを直接経験できるチャンスとして大切にしたいと思っています。

これ以外にも、多くの自然環境が子どもたちの身近な位置でいろんな動きや変化をしてくれています。保育者はそれを教えるのではなく、子どもたちの発見として認め、感激し共感できる援助者としての関わりを忘れないようにしたいと思っています。

3. 聖愛幼稚園の保育

三代目の園長の時代から、少しずつ教育内容の明確化と科学性を図りたいと考え、四代目の園長は保育経験32年で、西日本第一号の男性保育者ということで広島県私立幼稚園連盟副理事長・研究部長を受け、さらに前日本私立幼稚園連合会の常任理事として平成元年の新幼稚園教育要領検討委員会副委員長として、私立幼稚園の教育課程の指導をする一方で、聖愛幼稚園の教育課程の編成と指導計画のマニュアルの作成を完成させ、聖愛幼稚園の教育内容を第三者評価に耐え、保護者達も保育内容を知って、幼稚園の方針をしっかりと受け入れてもらえる体制作りをすることによって、母親だけでなく父親も一緒に子どもたちを健やかに育てて行く！という幼稚園と家庭とが常に子どもを中心にした教育をしていくことが出来るようになって来ました。

特に、改革派忠海教会の牧師を宗教主事として迎え、毎週、金曜日ではありますが幼児礼拝を持つことができるようになって、大変うれしく思っています。

子どもと共に守る礼拝についても小冊子「礼拝」～クラス礼拝と全体礼拝～を作成し、ノン・クリスチアンの保育者にも『礼拝』の意味やお祈りについての、聖愛幼稚園独自の資料の作成をすることによって、少しでもキリスト教保育の理解者に育って欲しいと思っています。

聖愛幼稚園独自のオリジナル資料は、保育者

達の長い間の積み重ねと努力によって、他園にはないほど内容の濃い資料を作成しており、現在もなお、その積み重ねを続けています。

現園長は広島市内にある保育者養成校（比治山大学短期大学部幼児教育科）の教授として保育者の養成に当たると共に、保育現場の保育者たちに保育資料の作成や追加資料（ファイル）の検討をさせており、これらの資料はさらに幅広く、深くなって子どもたちに合った保育の計画立案や実施に大いに役立っているところでもあります。

4. 聖愛幼稚園のクリスマス

聖愛幼稚園には、現園長が約40年前に作成した『オペレッタ・クリスマスのお話』（AVACO視聴覚センター発行：クリスマスの劇と歌に掲載）があって、子どもたちとオペレッタ作りを毎年楽しんで来ています。特に衣装については長い時間をかけて、保護者が作ってくれたものを大切に利用しています。また、クリスマス礼拝と祝会は、毎年夜に行っており、改革派忠海教会のチャペルに親子で集って、礼拝を守り、オペレッタを観劇して、子どもたちが家族の為に時間を掛けて作成したプレゼントを持って家路に着くことになっています。このオペレッタを演じた子どもがやがて成長して保育者養成学校を卒業し、やがて母園である聖愛幼稚園の保育者となって、自分が幼い時に演じたオペレッタを自分が指導する幸せを経験し、感動している姿もあって、歴史の中にあるキリスト教保育の素晴らしさも感じられます。本当に嬉しく



オペレッタ・クリスマスのおはなし

思うのです。

クリスマス礼拝と祝会の次の夜には、子どもたちによる『クリスマス・キャロル』を毎年実施しています。

キリスト改革派忠海教会を中心とする枝である、社会福祉法人・聖恵会や老人ホームをまわること約一時間半ですが、[子どもたちで出来る事で、クリスマスの喜びをみんなにあげましょう！]という趣旨で行っています。老人ホームの反響は毎年大変なもので「可愛いね！」「上手に唄うね～！」と最大限の喜びを表してもらえるので、子どもたちも素敵な経験をさせてもらっています。

クリスマス・プレゼントは毎年、9月の末の運動会（実際は運動会ごっこですが）が終わるとすぐに、保育者たちは「今年はどんなプレゼントを作るかな？」と話し合い、いろいろな材料やアイデアを寄せ集めて、オリジナルのプレゼントを作るための準備をして、子どもたちと一緒に時間をたっぷりかけて作成をしていきます。毎年、親も子どもたちも楽しみにしているクリスマス行事のひとつと言えるでしょう。

ちなみに、この「クリスマス・プレゼント」の製作資料は、聖愛幼稚園のオリジナル資料として歴代の保育者たちが、材料、作成方法、指導のポイント等を細かに記載して積み重ねをしてくれています。大変役に立つ資料として後進の保育者の指導教材としての価値も高い物になっていて、聖愛幼稚園の自慢のひとつになっています。

5. 聖愛幼稚園の子育て支援

最近になって、いろんな方面で『子育て支援』ということが言われるようになりましたが、『子育て支援』という言葉をもどのように受けとめるかによって、その対応も大きく変わってくると思うのです。聖愛幼稚園では「お母さんたちの子育てを楽にしてあげる！」という「支援」ではなく、「子どもを育てることが楽しくなる

ように、いろんなサポートをしていきたい！」
「大変な子育てなんだけど、ちょっとこんな工夫をすると意外といいもんですよ！」と言った、子育てに対してのアドバイスやヒントを学ぶ会を、今年で31年継続しています。名前も「いはら先生の子育て講座・聖愛幼稚園マザークラス」として、子どもが在籍しているお母さんだけでなく、地域や一般にも開放して、子育て最前線のお母さん、お父さんたちへ幼稚園の活動に参加してもらっています。未就園児のお母さんたちも沢山参加されて、みなさんと一緒に学ぶ時を持っています。ちょっとした『子育てのヒント』がお母さん達の[心の重さ]から解放されたり、紹介された絵本や資料を十分に活用して下さって、とても嬉しく思っています。マザークラスは一年に五回（一、二学期は各二回、三学期は一回）開催しており、参加を楽しみにしておられるお母さんも多いようです。いつまで継続することができるか？ 分かりませんが、必要とされる間は続けたいと思っています。



園長先生のアコーディオン

6. 聖愛幼稚園のこれから

今年で創立103年を走り続けている、聖愛幼稚園ですが、先にも述べましたように、超少子、超高齢、超過疎の地域にある幼児教育施設の役割りが何であるか？ キリスト教保育のこの地での役割とは何なのか？ 毎年膨らんでいく累計赤字をどこまで続けられるのか？ 多くの課題を抱えている聖愛幼稚園です。しかし元々、キリスト教会の伝道と「幼子をキリストへ」という目的をしっかりと持っている施設として、神さまからのご用がある間は、神さまは存続されると信じています。出来るならば、形が大きく変わったとしても、キリスト教の施設として、地域に役立ち、地域に必要とされる施設として、これからの歩みを続けたいと思っています。今日までの103年間、聖愛幼稚園が継続したということは、本当に「神さまによる奇跡」としか言いようがありません。キリスト教改革派忠海教会の働きの一つとして、これからどのように状況が変わって行こうとも、私たち（忠海教会の関係者、聖愛幼稚園の関係者）は神さまのご計画と御導きを堅く信じて、可能な限りこの小さな営みを続けていきたいと思っています。どうぞ、この小さな幼稚園の小さな歩みをお覚えいただきまして、みなさんの祈りの中にお加えいただけますようお願いしております。

（日本キリスト改革派忠海教会長老）



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていただくことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちですべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなのです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなく、いと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに12年目に入り、第47号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ルカによる福音 書1章26～38節
子どもカテキズム 問22

問22 私たち、神の民のあがないの主はどなたですか。

答 私たちの唯一の主、イエス・キリストです。

イエスさまは、永遠の初めから御父より生まれた真の神さまです。

私たちの救いのために

聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、真の人となってくださいました。

イエスさまは、真の神であり真の人であり続けてくださる二性一人格の神さまです。

(1) 信仰の教えは、神がどのようにして私たちがもて来られたかを語る。同時にまた、人がどのようにして神のものどされるかを語る。神と人の間で確かに起きた恵みの真理。救いの出来事とその輪郭。それを教会は「教理」と呼ぶ。

教理は、聖書を読み解く際に、私たちが必ず身につけるべき文法である。文法を弁えることによって、聖書を読む手立てを得、聖書に記された救いの恵みを正しく読み取ることもできる。その意味で、児童説教の中にも、この教理という文法が組み込まれていることは当然のことと言える。

しかし、文法はあくまで文法である。聖書を説き明かす説教は、大人への言葉であれ、児童説教であれ、単なる文法に留まることはありえない。聖書は、それが歴史であれ知恵であれ、預言、黙示、福音書、書簡のいずれであれ、救いの道筋を描き出す物語としてのみ、語られうる。物語としての、言葉の力と勢いを備えつつ、そこに太い骨格をもつ教理的な文脈を埋め込んだ、そのような語りを目ざしたい。

(2) マリアへの告知の場面は、救いの文法を包んで、しかも実に暖かく、堅固に、救いの道を告げている。こうして、マリアが、イエスの母（「神の母」）として選ばれる経緯、そこにこめられた神の決意を、驚きと喜びをこめて語る説教を目ざしたい。

おとめのままで身ごもることを告げられたマリアは、「どうして？」と天使に問い迫る。この「どうして」は、聖書の読者の心に深く響きわたる。

おとめが子供を産む不思議、しかも生まれる子がすでに神によって命名されている不思議、誕生する子がマリアの子であると同時に「聖なる者、神の子」でもある不思議。これら全ての不思議が指し示しているのは、神が、救いを携えて私たちがもて来られる狭く困難な遠い旅路である。独り子を与えるほどに世を愛してくださる神の、深い痛みを伴う決断である。

(3) イエスは、母マリアから全き人間性をとられた。こうして神は、その独り子において、私たち自身との完全な連帯を遂げてくださった。肉体も精神も、まったく罪によって汚れている人間性。マリアも例外ではない。

救い主イエスが、人間としての性質を余すところなく身に負われたことは、聖書の福音にとって大きな「躓き」である。マリアの胎内に御子を宿らせた聖霊は、御子を全ての罪と汚れから完全に守られた。しかし、それによって、神の子が人となるという出来事から、「躓き」を除去することは依然としてできないままである。「どうして」という問いは残るのである。

神としての性質を保ったまま、イエスが人間性を取られた。「二性一人格」とよばれるこの教理は、神と人間が、罪にもかかわらず出会い、そして和解し、罪の赦しを受けて神の子らとして回復されるために、どうしても経なければならぬ狭い道である。御子イエスの冒険に感謝しよう。

(小野静雄)

テキスト ルカによる福音書 1章26～38節
子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

救い主が、神としての性質と人としての性質を、どちらも完全に備えておられるとの真理。それは、聖書の福音（救いの恵み）が、立ちもすれば倒れもする、キリスト教信仰の急所である。古来、この教理を巡って、多くの論争が繰り返されたが、それは、決してどちらでもよい些事^{さじ}ではない。キリストは、人間の罪の現実に正面から向き合ってくださいる神であり、同時に、神の裁きの前で選びの民の執り成しに命をかけてくださる人間であられる。神性と人性が、混在せず、分離せず、一人のまことの方として、私たちと共におられる。それは、単なる理論や教えではなく、驚くべき愛にほかならない。児童説教は、「どうして」「どうして」というマリアの驚き、戸惑いを、語り手と聞き手の間で共有されるべき喜びへと繋ぐ。

この救い主を「イエス」とよぶ

まだクリスマスには少し遠い今日。少し早めに、イエス様の誕生のことを考えてみよう。イエスさまの母となったマリアの名は、日曜学校で学ぶ私たちにはとても親しみ深い名前です。イエスさまの母となったマリア。イエスさまを大切に育てたマリア。けれど自分の子どもとして育てたイエスさまのことが、ときどき分からなくなり、悲しみを味わうこともあったマリア。そして、最後にはイエスさまの十字架を見上げて、深い嘆きをいただいたマリア。私たちは、もうマリアのことは、繰り返し学んでよく知っている。確かにそうです。

けれど、イエスさまを身ごもって、イエスさまの母親になろうとした、あの最初の日のマリアを、私たちは本当によく知っていると言えるでしょうか。天使ガブリエルが、「おめでとう、恵まれた方」と呼びかけたとき、マリアがどれほど心にショックを受けたか。何よりも、自分から生まれる子が、神さまの御子であり、そして「ダビデの王座」を受け継ぐ方になると聞いたときの、驚きはどんなだったでしょう。ナザレという小さな町の、目立たない娘である自分が、神さまの子どもの母となる。世界のどんな女性も、決して味わったことのない不思議な体験をすることになるとは！ 驚いたマリアが「どうして?」「どうして?」と天使

に尋ねたことは、決して不思議ではありません。

マリアから生まれる子供には、生まれる前から名前がありました。聖書の中では、生まれてくる子供に、母親が名前をつけることがよくあります。お母さんこそ、子どもの誕生のときのことを、誰よりもよく知っているからでしょうか。どんな子どもになってほしいか、祈るような気持ちで、赤ちゃんを世に送り出すのも、お母さんの大切な役目です。

でもイエス様の場合は違います。マリアが、どんな気持ちで男の子を産むか、ということよりも、神さまが生まれてくる子に、どんなことをしてほしいかを、もう決めておられたのです。「その子をイエスと名付けなさい」。イエスとは、神さまが救いをくださる、という意味です。救いは神さまから来るのです。

神さまがくださる救い。それは、私たちの心に深くひそんでいる罪からの救いです。罪という病は、そのままでは死に向かう、もっとも恐ろしい病です。身体の病気も、とてもつらく、とても恐ろしいものです。でも、罪という病ほど恐ろしいものはありません。この病は、医者も薬も利かないからです。罪の病は、私たちの心に深く住みつ

いて、私たちの生活を底知れない闇に引きずりこむ力をもっています。神さまへの信頼を奪い、私たちの命と生活を破壊し、人と人を引き裂き、愛の代わりに憎しみを植えつけます。罪は、すべての人の中に生まれながら潜み、そして私たちの歩みを、滅びへと連れ去るのです。

イエスという救い主は、そのような罪から私たちを救い出す方です。イエスさまは、永遠に神の独り子である方です。けれども、神の独り子に備わった栄光の位を離れて、一人の人間として、世に来られました。神の子であるまま、しかし人としてのすべての性質をもって、来てくださった。それがクリスマスの喜びです。

神の子であるイエスさまが、人間の体と心を持ち、私たちと同じ「人」として、生まれてくださいました。不思議な事件ではないでしょうか。不思議というだけではなく、神さまにとってこれは本当に危険なことではないでしょうか。天にいて、神の子として備えられたところにおられたなら、決して味わうはずのない、数々の危険が、これからイエスさまを待ち受けていたのです。その危険な冒険の旅路が、最後には十字架への道につながっていることを、皆さんもよく知っていますね。

イエスさまの道は、罪との戦いの道です。罪との戦いに勝つことのできる人間は、イエスさま以外にはおられません。罪との戦いに勝つ。そのために、イエスさまは、聖霊のお力によってマリアの胎内に宿りました。普通の子どもたち、私たちは、お父さんとお母さんの愛によって生まれるのですね。でも、イエスさまは、聖霊のお力、神さまのお力による不思議な方法で、マリアから誕生

しました。

それは、イエスさまが、罪も汚れもない清い救い主として生まれるためです。私たちと少しも違わない身体と魂をもって、でもイエスさまは罪をおかさない方として、誕生から十字架まで歩まれました。私たちに代わって神さまの御心に、完全で、十分に、従うためです。

神の子イエスさま。そしてマリアの子どもとして生まれたイエスさま。この方が、私たちの救い主です。この方が、私たちの本当の王様です。このイエスさまを打ち負かす力は、世界のどこにも決してありません。なぜなら、イエスさまこそ、誰も勝つことのできない罪に勝ったからです。イエスさまだけが、誰もが負けてしまう死の力さえ、滅ぼしてくださったからです。

イエスさまが復活されたあと、エルサレムでは、弟子たちが集まってお祈りしました。これから教会が誕生する、そういう大切なときに、弟子たちは心を一つにして、祈っていました。その祈りの輪の中に、マリアがいた、と聖書は教えてくれます。自分が生んだイエスさま。でもその方は、人々の罪の身代わりに十字架にかかり、死んで三日目に、復活されました。復活されたイエスさまを礼拝する人々の中に、マリアもいるのです！

イエスさまという方を、この私がみごもったこと。驚きと不安の中で、「どうして」と尋ねたこと。それをマリアは、思い出しているのでしょうか。けれども今こそ、「どうして」という不安、驚きに、ついに答えが見つかったのですね。十字架と復活の道を通して、すべて信じる人々の主となられたイエスさまに、マリアも心からの祈りと賛美をささげる人にされているのです。 (小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 1章28節後半

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」



〈ねらい〉

神の御子がどうして人の姿をとって生まれる必要があったのか。この「なぜ」を共に考えたい。

〈展開例〉**1. アリに知らせる方法は？**

アリが並んで列になって歩いているのを見たことがありますか。アリは行儀よく一列になって、えさのあるところに向かって進んでいきます。

でも、進んでいく先にあるのがえさではなく、アリを食べてしまう大きなクモだったらどうでしょう。誰かが教えてあげないと、クモにみんな食べられてしまいます。どうしたらいいでしょう。

人間が大きな声で、「おーい、アリさんたち、そっちは危ないよ」と言ってあげればわかるかな？でも、アリには人間の言葉がわからないよね。いい方法があります。それは、アリの言葉で「危ないよ～」と知らせることです。

アリは、何か危ないものを見つけたら、口から臭いを出して「そっちは危ないよ」と仲間のアリに知らせるそうです。でもそうするためにはアリの姿になって、アリがわかる言葉で教えてあげなければなりません。

2. 私たちと同じ人間になられたイエス様

「そうか、アリになればいいんだ」と思っても、

人間はアリになることはできません。

でも、神様は、人になることがおできになります。イエス様は神様でありながら、人となられてこの世界に来てくださいました。それは、私たちに大切なことを伝えるためでした。

神様は、危ないよと教えるだけでなく、何とかして私たちを救い出したいと思われました。

そのためには身代わりとなって神様の罰を受けてくれる人が必要です。悪いことをしたのは人間なので、身代わりも人間でなければなりません。また、身代わりとなる人は、一度も悪いことをしたことがない人でなければなりません。

そのために、神様はご自分の独り子であるイエス様を、私たちと同じ人間として生まれさせてくださったのです。

この世界を造られた神様であるイエス様が、私たちと同じ、小さな弱い赤ちゃんとしてお生まれになったのです。それは、神様から離れた私たちと同じ人間となって、身代わりに十字架にかかって、私たちを罪から救うためでした。なんという神様の愛でしょう。

3. アリさんの迷路

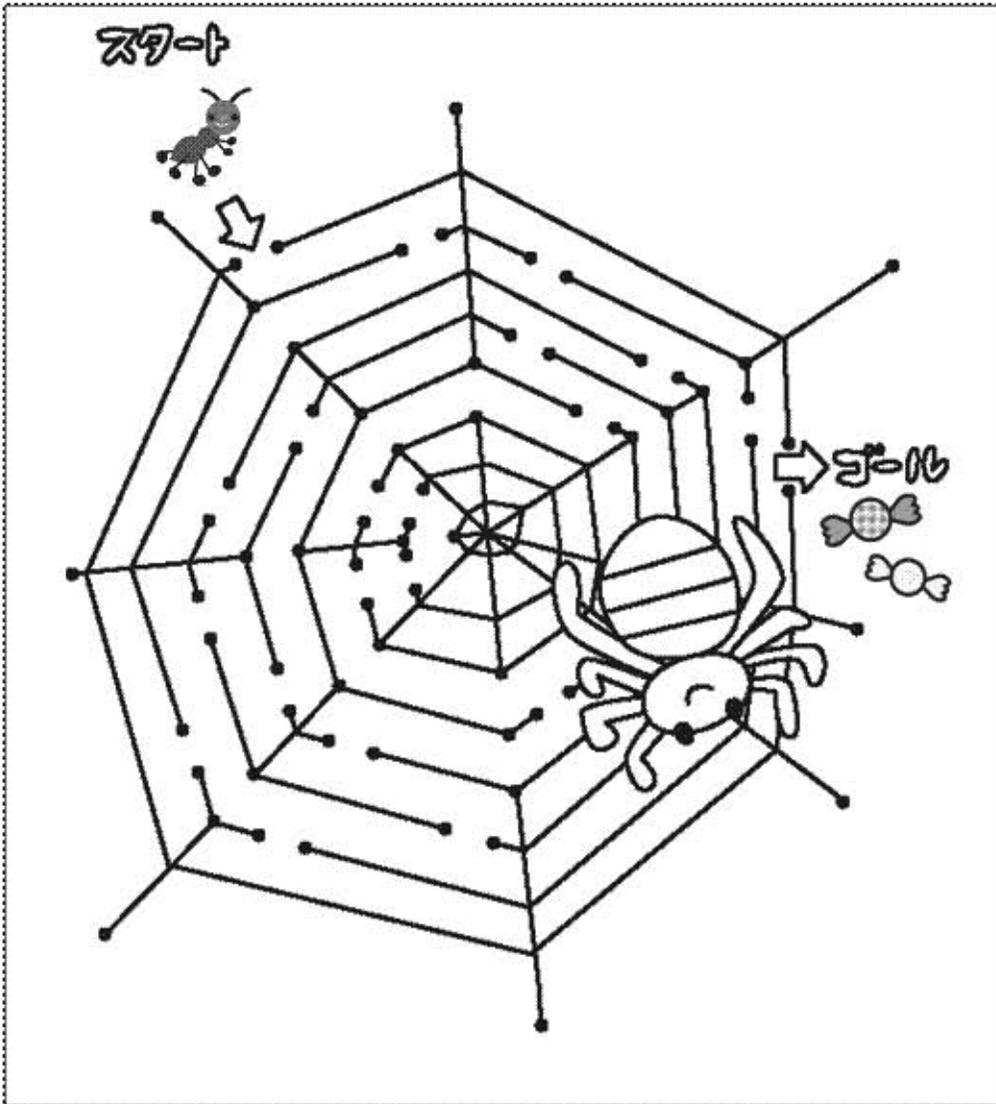
次ページを参照。

さて、アリさんは迷路を抜け出て、無事にゴールに着けるかな。



迷路

スタートからゴールまで、進もう！
クモに近づいても、さわらなければだいじょうぶだよ。
無事にゴールに着いたら、ぬりえをしよう。



〈ねらい〉

主イエスが神であり、人であると私たちは教えられている。神であるとはどういうことか、人であるとはどういうことか、そのことを確認する作業をしたい。今日、イエス様の神性について教えられるが、イエス様の人性についてもしっかり教える必要がある。人性があるということは、私達同じ部分があるということだから、理解の助けになるだけでなく、大きな慰めにつながる。

〈展開例〉

1. 今日の「子どもカテキズム」問22をみんなで読んでみましょう。

2. イエス様がみんなと違うところはどんなところですか。同じところはどんなところですか。

聖書を思い出してイエス様はどんな方だったか。カードに書いて見ましょう。

聖書やまんが聖書物語を見ても良いですよ。

【例】

罪を赦した 弱い者の味方 聖書を教えた
 裁判を受けた 誘惑を受けた
 十字架にかかった 死んだ
 復活した 人の体を持っていた
 子どもの時があった マリアから生まれた
 永遠に存在している 洗礼を受けた
 病人を直した 息をしていた
 心臓があった ご飯をたべた
 パンと魚を増やした 嵐をしずめた
 痛がった 言ったとおりにになった
 血を流した 罪を背負った
 天に昇った 再臨する
 ※子どもが挙げる例が少なければ付け足す

どれが、神様の部分で、どれが人の部分でしようか。どちらともわからないものは真ん中に起きましょう。全部をはっきり二つにわけると必要はありません。イエス様は100%人ですし、100%神様です。体だけ人間で、心は神様だったというわけではありません。心も体も全く人間。それでいて、全く神様なのです。

3. イエス様は不思議な方ですね。でも、私たちを救うために不思議な方である必要がありました。神様だから私たちを救えるし、罪を赦せます。同時に、人として律法を果たして生きる責任も果たさないとはいけません。この両方を同時にクリアするためには、100%人、100%神である必要があるわけです。

もし、100%の人ではなかったとしたら、例えば何となく半分くらい人間で律法を守っても、それは律法をちゃんと果たしたとは言えません。もしそれで神様は赦す、と決めてしまったら気まぐれです。100%人として律法を果たしてくださいました。

イエス様は神様であり、同時に罪はなかったのですが、私達と同じ人間です。ここに希望があります。

〈祈り〉

イエス様が100%神であり、100%人であることを学びました。私たちを救う為に完全なお仕事をしてくださったことを感謝します。イエス様による救いが完全ですから、安心して過ごすことができますように。



1. 「子どもカテキズム」問22

問 私たち、神の民のあがないの主はどなたですか。

答 私たちの唯一の主、イエス・キリストです。

イエス様は、永遠の初めから御父より生まれ、真の神様です。私たちの救いのために聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、真の人となってくださいました。イエス様は、真の神であり真の人であり続けてくださる二性一人格の神様です。

○子どもと一緒に考えるポイント

- ① 私たちの救い主（信じる）イエス様は神様の子であり、私たち同様に人でもあった。
- ② イエス様は私（あなた）を罪から救うために人として生れてきた。

2. 神様と人間

二性一人格について考える前に、根本的な神様とは何か、人とは何かということについて一緒に考えてみたい。

Q1 あなたにとって神様とはどのような存在（どのような方）ですか？

Q2 あなたにとって人とはどのような存在ですか？（自分がどんな人か性格か等、を子どもたちに考えてもらう。）

○聖書の教える神様と人間

神様…完璧、完全、perfect!

人間……不完全、不足、to bad!

人は神様によって、神様に似せた存在として神様ご自身が造られた。（創世記1章参照）だから、造られた人が、造り手である神様に並ぶということはあり得ないし、不可能。神様と人間にはどうしても越えることのできない壁がある。

逆に神様からすれば、自分の作品の一つでしかない人に特別肩入れする必要もない。人が自分の言うことを聞かないのであれば主人として、新たに人を造り直すこともできた。でも、神様はそうはしなかった。むしろ、人の悔い改めを待ち続け、そしてイエス様を私たちに与えてくださった。

3. なぜ人として

真の神であるイエス様が、なぜ人として世界に生まれてきたのかを一緒に考えてみたい。

Q3 あなたはイエス様がなぜ人として生れてきたと思いますか？

Q4 今のあなたはそれが事実だと信じて言えますか？

○聖書の語る人間イエス・キリスト

四福音書には、人として生まれ、人として福音宣教に励まれたイエス様の生涯が豊かに語られている。

ひょっとしたら、イエス様が本当に神の子であるならば、わざわざ私たち同様の人生（生涯）を送るなんて面倒なことはせずに神様の力を使って一瞬で全てを善きモノにすれば良いのにと思うかもしれない。でもイエス様の人生は、私たち人間同様、いやそれ以上の戦いや葛藤、悲しみを正面から受け入れることに意味があった。人としてイエス様が戦ってくれたから、苦しんでくれたから、泣いてくれたから、語ってくれたからイエス様の言葉は二千年の時を超えて今もリアルに私たちに語りかけてくださる。

こんなにも私たちを愛してくださり、本気になってくださった神様は他にはいない。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」（ルカ1章26節後半）私たちは罪から救われ、愛されている。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。」(フィリピ2:6,7)

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という小説はご存知ですか。極楽で優雅に過ごすお釈迦様が、地獄でうごめく罪人を眺めている。その中のカンダタは、蜘蛛を助けるという善行を一つ行っていた。だから助けてやろうと、極楽から蜘蛛の糸をたらして、それをよじ登ってくるカンダタを眺めている。ひどい話だなあと思いました。お釈迦様だか神様だか知らないが、こんなのが極楽なら地獄のほうがよっぽどマシだと子ども心に思いました。

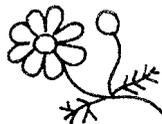
自分で降りて行って助けてやるならともかく、哀れだなあと糸を垂らして見てるだけ。そしてその糸が、途中で重量オーバーで切れてしまうのです。お釈迦様はカンダタを助けてやろうかと糸をたらしただけですが、罪人たちは、こんなチャンスは黙って見ていません。おれも、私もと群がってくる。カンダタは自分だけ助かろうとして、降りろ降りろと叫ぶと、無念糸は切れてしまう。そういう浅ましい人間を見て、哀れだなあと御釈迦さんはどっかに行っちゃう。……やっぱりひどい話です。

そりゃあ確かに、人間はみんなこのとおりの浅ましい生き物でしょう。でもだからと言って、上から見下ろして、惨めな地獄に落ちたくなければ、神様・仏様を信じて救われなさいなんて、なんて馬鹿にしているのだろうと。キリスト教なんてのも、それと変わりはあるまいと、私は聖書を読む前は思っていました。

でも違ったのです。イエス様という神は、地獄で苦しむ罪人を哀れに思って眺めているだけじゃありませんでした。その罪人と苦しみを分かち合うために、人間となって降りてきてくださいました。その罪人を助けるために、身代わりに苦しみを受けてくださった、死んでくださったと言うのです。地獄を上から見下ろしているのではなくて、地獄のさらに下まで降りてきてくださって、私たちが天国に上っていくことができるように、私たちの踏み台になってくださったのです。

もしもイエス様が、人間として生まれてきてくださらなかったなら……。ありえない仮定ですが、もし人間として生まれてきてくださらなかったなら、私たちの代わりに十字架で死ぬことはできなかつたし、死なないならば、私たちのための復活もありえなかつたことだけは、覚えておきたいと思えます。

イエス様が死んでよみがえってくださらなければ、私たちには永遠に救いはありませんでした。神と和解することができず、蜘蛛の糸一本さえも垂らしてもらうことなどできなかったのです……。まったく罪のない方が、わたしたち罪人の身代わりに死ぬために、生まれて来てくださいました。そして、正真正銘人間のままで、罪と死に打ち勝ち、復活の栄光の体によみがえってくださって、救いの道を開いてくださいました。だから私たちも、普通の人間にすぎないものですが、イエス様を信じるならば、罪と死に打ち勝ち、栄光の体によみがえることができます。イエス様が開いてくださった道は、神様しか行けない道じゃないのです。神でありながら、私たちとまったく同じ人間でもいてくださるイエス様が、「さあ、君たちもついてきなさい」と招いて導いてくださる道なのです。



テキスト マタイによる福音書 1章18～25節
子どもカテキズム 問23

【単元のねらい】

子どもカテキズム問23は、イエス・キリストという名前について教えています。聖書箇所として指定されたマタイ1章18～25節には、「イエス」という名前が「罪からの救い主」であられることを伝える言葉があります。この箇所には「キリスト」という呼び名に関することは触れられていませんので、「罪からの救い主」のほうを中心に語ることにします。

罪や救いについては、これまでのカテキズムでも教えられてきました。今回の聖書箇所には「インマヌエル」(神は我々と共におられる)ということに触れられていますので、説教展開例では「罪からの救い」が神と共にいることの回復であることを軸にしながら語ってみました。

救い主イエスさま

【イエス・キリストの名】

みんなは、自分の名前がどんな意味だか知っていますか？ 日本人の名前には、意味があることが多いですね。お父さん・お母さんが、思いを込めて、みんなの名前をつけてくれたことと思います。

実は、イスラエルの人たちの名前にも、意味があることが多いんです。聖書の中に出てくる人の名前には、意味があるんです。全部の人について名前の意味がわかるわけではありませんが、旧約聖書の中には、こういう意味でこの人の名前をつけましたということが、たくさん出てきます。

実は、イエス・キリストというお名前にも、意味があります。どんな意味だか知っていますか？

イエスというお名前は、「主は救い」という意味です。さっき読みました聖書の個所で、天使がヨセフに「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」と言っていました。イエス様は、私たちを罪から救ってくださるお方だから、「主は救い」イエスという名前が付けられたのですね。

「キリスト」というお名前は、イエス様のお父さん、お母さんが付けた名前ではありません。「油を注がれた者」という意味で、イエス様のお働きのことを表しています。

【罪からの救い】

神様は、世界を造られ、そして人間のことも造られました。神様は、人間が神様と一緒に生きていくことを願っていらっしゃいました。けれども、人間のほうは、神様に背いて、神様を裏切り、神様から離れて行きました。そのために、かえって、不安になったり、思い悩んだり、争ったりして、余計な苦しみを味わっています。神様から離れて、罪に捕らわれてしまっているのです。神様のところに、自分の力で帰ってくることはできません。

神様は、人間が御自分のところに、もう一度戻ってきて、一緒に生きていくことを願っていらっしゃいます。そのために、イスラエルの民を選んで、ご自身の民とされ、その民と一緒に歩いて来られました。そして、その中から、イスラエルの民ばかりでなく、全世界の人々を救うお方を与えてくださると約束してくださいました。

天使がヨセフのところに来て知らせてくれたのは、「今まさに、その約束を神様が実行されるんだよ！」ということでした。「マリアのお腹の中にいる赤ちゃんこそ、全世界にいる御自分の民を罪から救うお方なんだよ」という知らせでした。神様から離れて、罪に捕らわれている人間たちを、神様のもとに連れ戻して、もう一度、神様と一緒に生きることができるようになってくださるお方が

お生まれになる。だから、「その子にイエス〈主は救い〉と名付けなさい」と言われているんだね。

その天使の言葉を聞いた時、ヨセフはどんなふうに感じたかな？ そのころ、イスラエルの人たちは、ローマ帝国に支配されていて、とってもたいへんな生活をしていただろうと思います。ヨセフも神様を信じていたけれど、本当に、神様が自分たちと一緒にいてくださっているのか、実感はなかったかもしれない。

でも、天使が現れて、ヨセフはビックリしたでしょうね。神様は確かに生きていらっしゃる！ そのことがよく分かったはずです。そして、約束してくださっていた「救い主」を、今こそお与えになるのだと教えてもらいました。神様は確かに、自分たちを見捨てることなく、共にいてくださるお方なのだ、よく分かったことでしょう。イエス様こそ、神様が私たちと一緒にいてくださるこ

とを、実際に示してくださったお方です。

学校に行くと、イエス様を信じているお友だちは、そんなに多くないだろうと思います。ここでも神様が一緒にいてくださるのか、良く分からないと思うことはありませんか？

でも、イエス様がお生まれになったということは、神様のほうが、世界に生きている私たちのところに来てくださったということです。イエス様に救われた私たちは、世界中のどこにいても、神様と一緒にいることができるようにされています。罪から救い出されて、神様のもとに連れ戻していただいたのです。

イエス様というお名前は、神様から離れてしまっていた私たちを救ってくださったお方であることをよく表しています。イエス様は、神様が私たちにお与えくださった「罪からの救い主」です。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 1章21節後半

「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」



〈ねらい〉

イエスという名前の意味を考える。

〈展開例〉**1. 名前には意味がある**

子どもが生まれた時、お父さんやお母さんは、名前を何にしようかと考えます。たとえば空のように広い心の人になってほしいと「空」という名前をつけたり、桜の花のようにかわいい子どもになってほしいと「さくら」という名前をつけたりします。

そんなふうには、お父さんやお母さんの願いが込められているんですね。(子供たちの名前の意味を保護者から聞いておき、話し合ってもよい)

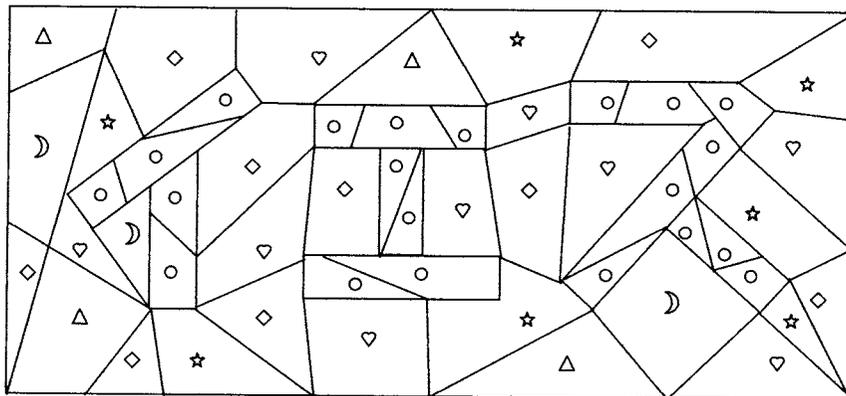
2. イエスという名前の意味

では、「イエス」という名前にはどんな意味があるのでしょうか。

この名前は、お母さんのマリアとお父さんのヨセフがつけた名前ではありません。イエス様が生まれる前に、すでに神様が決めておられた名前です。

4. ぬりつぶしゲーム

二人一組になる。一人ずつ、下の同じ絵を渡す。二人でじゃんけんをして勝った方が、○のブロックを一つずつぬりつぶすことができる。○を全部ぬり終わった人の勝ち。さて、なんという字が出てくるかな？



す。

この名前には神様の願いが込められているのです。

それは、人間を救いたいという神様の願いです。イエスという名前は「神は救う」という意味なんです。

3. 救いとは？

「救う」ってどういう意味かわかりますか？ 救うとは、苦しんでいることから助けることです。じゃあ、苦しんでいることっていったい何なのかな？ イエス様は何から私たちを助けてくれるのかな？

それは、重くて重くてたまらない罪を、私たちに代わって背負ってくださるということです。

私たちは毎日、毎日、この罪に苦しめられています。そしてこの罪のせいで、お友達をも苦しめています。この重くて暗い罪を背負ったまま、天国に行くことはできません。

でもイエス様が来てくださって、私たちの罪を代わりにぜんぶ引き受けて、十字架にかかってくれました。イエス様は罪からの救い主です。

〈ねらい〉

イエス・キリストがその名の通りの働きをしてくださったことを理解してもらう。それから、イエス・キリストという名前をきちんと理解する。「イエスが名字で、キリストが名前」というのではない。イエスが名、キリストは働きの名前。

〈展開例〉

1. 今日の「子どもカテキズム」問23をみんなで読んでみましょう。

2. みんなの名前にはどんな意味がありますか。

3. イエス様の名前と、私たちの名前で違うところを考えてみましょう。

イエス様の名前は神様がつけてくださいました。(他に、「イスラエル」も神様がつけた名前です。) イエス様のなさるお働きを、名前が表しています。

4. ○の中をうめてみよう。

イエス＝「○○は○○○」

(答え：しゅはすくい)

聖書を読んで確認しましょう。マタイ1章18～25節。

キリスト＝「○○○を注がれた者」

(答え：あぶら)

イエス・キリストは名字と名前ではありません。名前と働きです。

5. 「主は救い」という意味のイエスという名前を父なる神様が付けてくださいました。

主とは誰でしょう。神様です。

救いとは何でしょう。罪からの救い、です。

イエス様は、このお名前のおりに働いてくださいました。イエス様がなさったことは、すべて、私たちを罪から救うためでした。

イエス様はどこに来たのでしょうか。火星でしょうか。土星でしょうか。私たちのいる地球に来てくれました。イエス様は神様だからどこにでも行けるのに、私たちのところへ来てくれました。不思議なのは、神様に対してイスラエルの民は良いことをしていたわけではありません。何をしていたか、調べてみましょう。マラキ書1章6～8節。

さて、これはどういう意味でしょう。ここにはイエス様が来られる以前にイスラエルの民が神様を軽く見て、罪を犯していたことが書かれています。

しかし、人が罪深くて、イエス様を送ってくださいました。どうしてでしょう。はるか昔に神様がイエス様を送ると決めてくださったからです。ミカ書5章1節を開いてみましょう。

イエス様は私たちのところへ来てくれました。そして、私たちのもとの、私たちの罪を代わりに背負って、私たちの罪を赦してくれました。それが十字架の死でした。

イエス様と呼ぶ時、どんな気持ちですか。イエス様と呼ぶごとに「主は救いだ。本当に主は救いだ」と思い出すことができます。私たちも「イエス様」とお呼びするとき、「主は救い」と思い出してお呼びしましょう。

〈祈り〉

イエス様がお名前のおりに、私たちを罪から救ってくださいありがとうございます。そのことを忘れることがありませんように。



1. 「子どもカテキズム」問23

問 主イエス・キリストとお呼びするのはなぜですか。

答 イエスとはお名前で「罪からの救い主」、キリストとはお働きを表し、「神様から油が注がれた方」という意味です。このお方が私たちの主として与えられました。ですから、私たちは、喜びと感謝をもって主イエス・キリストとお呼びするのです。

○子どもと一緒に考えるポイント

- ① イエス様こそ、人を罪から救い出すことのできる唯一のお方。
- ② 私たちは、真の神様を名前で呼ぶことができる。

2. 罪からの救い

説教では「イエス」という名前が「罪からの救い主」であるということを教えられた。ここでは、罪と救いについて一緒に考えてみたい。

Q1 自分は罪人（罪深い）だと思ったことがありますか？ またそれはなぜですか？

Q2 イエス様は私たちが罪から救い出すことができる方。それが信じられますか？

○イエスという名に見出す救い

「名は体を表す」ということわざがあるように、名前は人やその物をわかりやすく表現している。私たちの名前も生れてくる時に、お父さんやお母さんが一生懸命考えてくれたもの。ところで、イエス様の名前は神様御自身がつけられた。しかもその名の意味は「罪からの救い主」。なんとストレートでわかりやすい名前。神様は御子を名付けるときから、私たちが罪から救うのだと約束し

てくださっていた。

でもどうだろう、あなたは心のどこかでイエス様の救いは自分とは関係のないこと、はるか昔の夢物語のように感じてしまっているところはないか。実際、筆者が子どもの頃は、聖書の語る罪や救いには無頓着、無関心だった。でも、そんなあなたに向かっても神様は語り続けている、「インマヌエル、神は共におられる。インマヌエル、わたしはあなたと共にいる」と。神様のことがわからない人こそ、罪からの救いが信じられない人こそ、神様にその思いをぶつけて祈ってほしい。神様は必ずあなたに答えてくれる。

3. 親しい神

真の神様を名前で呼ぶことのできる素晴らしさを一緒に分かち合いたい。

Q3 あなたの周りの大人や年上の人を名前（ファーストネーム）で呼ぶことはありますか？

Q4 真の神様を名前で呼べるというのは素晴らしいことだと思いますか？

○名前を呼べる幸い

相手の名前を呼べるというのは、親しい関係にあるからできること。神様は、全てのものを造り、治め、その頂点に立たれている方。人間的に考えると、そのような方を親しく名前で呼ぶなどということは恐れ多くできない。でも神様は私たちが神様の名を呼び求めることを喜ばれる。（エレミヤ書3章3節、マタイ18章20節等参照）

私たちの神様は頂点に立つ方だけど、同時に、全ての人が親しく名前で呼ぶことを喜び求めてくださる方。こんなに気前の良い神様、自ら人に近づいてくださる神様は、ほかにおられるだろうか。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

イエス様は、私たちを罪から救い出して、神様のもとに連れ戻してくださる方であることを覚えましょう。

例えば、こんな話を考えましょう。あるところに一人のコソ泥がいました。この人は、元来、王の一族に連なる高貴な者でした。しかし、幼い時よりわけあって親からはぐれてしまったため、自分がすばらしい者であって、王様と共に国を良く治めるといふ重大な使命を持っていることも、まったく知りません。自分はずっとコソ泥だったし、コソ泥のままだと思っています。それどころか、自分が悪いことをしていることも知らないのです。だれも教えてくれなかったからです。

でもある時、一人の人がやってきて言いました。あなたはこんな風に、惨めなままでもいい人ではない。あなたは王様と共に生きる人であって、王様から大切な働きを任せられる人です。あなたがしていることは悪いことです。あなたにはふさわしくないことです。ただちにやめなさい。さあ、私といっしょに王様の家に帰りましょう。

イエス様はそんな風に、私たちを探してくださって、来てくださって、連れ戻してくださる方です(ザアカイの物語を参照)。

私たちはイエス様と出会わなければ、自分が罪人だということも分からないくらいに、落ちぶれてしまった罪人です。自分で自分の罪に気づく人はいません。イエス様が気づかせてくださいます。

イエス様の教えから、私たちは自分の罪を知ります。あるいは、イエス様のようになれない自分を知って、自分の罪を知ります。愛のない自分を知ります。信仰のない自分を知ります。

でもイエス様は、そんな罪深い私たちを、本当に大切にしてくださいます。その命を身代わりに与えてくださったほどに、私たちが大切だと思ってくださいます。そうやって大切にされて始めて、私たちは「このままではいけない」と思い始めます。

ぼくはコソ泥のままでもいい存在じゃないのだ。イエス様にこんなに愛されているのだから……。こうして罪から神への方向転換=悔い改めが始まります。

そしてイエス様は、私たちに本来神様から与えられていたすばらしさを回復してくださいます。そしてこれからは、罪と戦い、神様のために生き、神様とともに神の国のために働くという、すばらしい目的を与えてくださいます。こうして私たちは、古いコソ泥の私から生まれ変わるのです。愛のない自分から、愛そうとする自分になります。悪と戦うなど考えたことのなかった自分から、戦うために小さな勇気を出そうとする自分になります。

これが、罪からの救い=解放ということです。まだ私たちには罪が残っているから、完全には罪から自由にはなれません。でも、罪を罪と知り、それと戦いはじめた人は、もう罪から救われている人です。イエス様は、そういう救いを私たちに与えるために、生まれて来てくださいました。



テキスト ヘブライ人への手紙 12章1～3節
 子どもカテキズム 問24
 参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問27

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、
 どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、
 三日目に、永遠のいのちによみがえられました。

ですから、私たちは、罪赦されて、神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

〈聖書テキスト〉

11章で、まだ見て（実現して）いないことを望み見て確信する信仰に立って生涯を歩んだ、旧約の信仰者が取り上げられている。このテキストは、彼ら旧約の信仰者が「見ないで信じる信仰」の証人として与えられているのだから、「わたしたちもまた……競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか」と言って、信仰者を励ましている。

競争を走り抜くために、「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめる」ことが必要である。以下、四つのことを箇条書き的に挙げておく。

(1) 人生はレース（競争）にたとえられる。しかし、順位が問題になるレースではない。信仰に立って完走することが大切なレースである。

(2) レースであるから、困難をともなう。わたしたちは忍耐するのであり、節制に努めるのであり、不必要なものは捨てなければならない。

(3) その原動力は十字架のキリストである。神の御子でありながら、その栄光を捨てて人となり（フィリピ2:6-8）、十字架の死さえ耐え忍んでくださった。キリストは苦しみの極みを味わってくださった。そこには神の大きな愛がある。わたしたちは、十字架のキリストを見つめて、苦しみを耐え忍び、希望に固く立つ信仰へと導かれる。

(4) 神は、十字架のキリストを高く上げて、神の右に座す者としておられる。このキリストがわたしたちを執り成し、また、守り導いてくださる。そこに、わたしたちの平安の根源がある。

〈教理の確認〉

キリストの御業は「二状態三職論」の枠組みを

用いて理解すると分かりやすい。「二状態」とはキリストの低い状態（へりくだり）と高い状態（高挙）であり、「三職」とは「預言者・王・祭司」である。問24は「二状態」を取り扱っており、今日はとくにへりくだり（謙卑）について学ぶ。

キリストの謙卑には、大きく二つのことがある。一つは受肉（人となられたこと）であり、もう一つは十字架（罪の償い）である。

罪人の救いのためには、神と罪人の間を妨げている罪の問題が解決されなければならない。しかし、通常の間には罪があり、自ら解決することはかなわない。そこで御父はご自身の御子をわたしたちに与えてくださった。御子がへりくだって肉をとり、人間となってくださったのである。ここに、神・人である真の仲保者が与えられた。

このお方は、神の御心にかなう従順なお方であった。全生涯においてへりくだって歩まれた。とりわけわたしたちの罪を背負い、罪人の一人に数えられ、ピラトによって十字架刑に処せられ、罪の償いをすべて成し遂げてくださったのである。ここに、キリストのへりくだりの極みがある。

〈聖書黙想〉

このテキストの特徴は、キリストのへりくだりに基づいて信仰者を励ますことである。キリストは苦しみの極みをご存じである。ヘブライ2章17～18節、詩編139編7～10節などを思い起こす。苦しみのただ中であって救い主に出会うことができる。どんな状況でも、「インマヌエル（神われらと共にいます）」と信じることができるところに、キリスト者の幸いがある。 （望月 信）

テキスト ヘブライ人への手紙 12章1～3節
子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

キリストの謙卑、へりくだりを取り上げる。御言葉は、苦しみの中で忍耐強く生きよう信仰者を励ましている。救い主は、へりくだって、人となり、わたしたちのためにすべての苦しみを耐え忍んでくださった。この救い主が共にいてくださって、苦しみの中でもわたしたちは決して孤独ではない。このことを伝えるために、今日は、個人的な体験、証を用いることにした。主イエスが共にいます幸いを伝えて、子どもたちを励ますことに努めたい。

「苦しみを耐え忍ばれたイエスさま」

今日は、ヘブライ書の御言葉を読みました。「競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか」とありました。わたしたちの信仰生活は、競争とありますが、マラソンのレースのようなものです。ゴールを目指して、終わりまで走り抜くことが大切です。順位ではありません。ゴールすることが大切です。そして、レースなので、楽しいことばかりでなく、苦しいこともあるでしょう。そこで、今日の御言葉は、イエスさまを見つめて忍耐強く走り抜きなさいと教えています。イエスさまを見つめていると、ゴールまで走り抜くことができるのです。今日は、最初に、わたし自身のことを少しお話ししたいと思います。

わたしは中学一年生の時に、病気で入院したことがあります。病気の始まりは、中学一年生の五月頃だったと思います。手や足の関節、くるぶしのところが痛くなって、近くにあった整形外科のお医者さんに行ったのが最初でした。そのときは、体の成長にともなう痛みではないかということでした。みんなにもそういうことがあるかもしれませんから、お話ししておきますと、中学生くらいになると、体がぐんぐんと大きくなりますね。そうすると、体の成長のバランスが崩れて、痛みが起こることがあるのだそうです。骨が先に成長して、筋肉がまだ追いつかないとか、体の部分によって成長の度合いが違ってしまって、ですから、病

気ということとは少し違うのです。成長の進み方が違って、体に痛みが起こることがある。人間の体って不思議ですが、そういうことがあるんですね。わたしの場合も、調べてみてもとくに悪いところはなくて、成長の度合いの違いから来る痛みではないか、ということでした。

けれども、少し様子を見て、そうではないかもしれないということで、別の病院にかかることになりました。近くの病院にかかり、少し遠い病院にかかり、六月には二週間くらい入院しました。そして、夏休みには、家から電車で二時間あまりかかる病院に入院することになりました。

その病気は、その後、すっかり良くなったのですが、家から遠く離れて入院しなければならなかったのは、たいへんなことでした。とてもつらかったのです。入院して、わたしは独りぼっちでした。そんなことを言うとお父さんお母さんには申し訳ないですし、きちんとお見舞いにも来てくれて、お父さんお母さんはよくしてくれました。お医者さんや看護師さんもやさしかったです。けれども、やっぱり家から離れて、独りで病院にいるというのは、寂しいものでした。とくに病気の理由が分からなくて、この先いったいどうなるのだろうかと思うと、とてもつらく感じました。

そんなときに、小さい頃から礼拝してきたイエスさまのことを思い出して、聖書を読んだのです。聖書を読むと、イエスさまが病気の人のそばに来

て励ましておられること、たくさんの病気の人の
おいやすくなったことが書いてあります。イエス
さまというお方は、病気の人のそばに寄り添って
くださるお方なのだと分かりました。

自分の病気は治らないかもしれない、このまま
死ぬのかもしれないと思うこともありました。
すると、聖書には、イエスさまが十字架につけら
れて死んでくださったことが書いてあります。イエ
スさまも死んでおられる。それも人になじられ、
ののしられて死んでおられます。見捨てられて死
んでおられます。もしたどえわたしがこのまま見
捨てられるように死んでも、イエスさまは一緒に
いてくださるのかな、と思いました。

これはあとになって知ったのですが、聖書には
こういう言葉があります。詩編139編7～10節。

「どこに行けば

あなたの霊から離れることができよう。

どこに逃れば、御顔を避けることができよう。

天に登ろうとも、あなたはそこにいまし

陰府に身を横たえようとも

見よ、あなたはそこにいます。

曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも

あなたはそこにもいまし

御手をもってわたしを導き

右の御手をもってわたしをとらえてくださる」。

ですから、たとえ死ななければならないとして
も、その死の苦しみにあっても神さまが共にいて
くださる。それが、イエスさまが十字架につけら
れてくださったということです。それで間違いあ
りません。ですから、どんな苦しみのときにもわ
たしたちは独りぼっちではありません。まことの
神であるイエスさまがわたしたちと一緒にいてく
下さるのです。それが神さまの約束です。

入院して独りでいるときに聖書を読んだこと
は、このことを知る良いきっかけになりました。
ですから、今になると、あれも神さまがしてくだ
された良いことだったなと思えるのです。

自分の話が長くなってしまいました。今日は、

イエスさまがへりくだってくださったことを学ん
でいます。「へりくだる」とは、低いところに降っ
てくださった、低い状態になってくださった、と
いうことです。イエスさまは、まことの神さまで
す。天の御父のみもとにおられたのです。です
から、高いところにおられたのですが、低いところ
に降りて来てくださいました。そのことを、「イエ
スさまのへりくだり」と言います。

それは、一つには、まことの神であるお方が人
間になって生まれてくださったということです。
もう一つは、人間になるだけでなく、人間が味わ
うすべての苦しみを味わってくださったというこ
とです。すなわち、イエスさまは、罪を除いてす
べての点で、わたしたちと同じものになってくだ
さいました。病気になることもあれば、つらくて
泣いてしまうこともあったでしょう。そして、へ
りくだりの極みとして、十字架につけられてくだ
さいました。先ほど言ったように、人からののし
られて死んでくださいました。神の呪いと刑罰を
引き受けて、苦しめられてくださいました。それ
は、わたしたちの罪とその悲惨のすべてを背負っ
てくださるということだったのです。

皆さんに、ぜひ知ってほしい、信じてほしいと
思います。イエスさまは、人間の味わうべき苦し
みをすべて味わってくださったお方です。孤独で
あることも、病も、死も、苦しみの極みまで味わ
い尽くしてくださいました。イエスさまがわたした
ちの罪を背負うとは、そういうことでもあった
のです。そして、わたしたちに罪の赦しを与え、
罪の悲惨からの救いも与えてくださるのです。わ
たしたちは、どんなに苦しくても、独りぼっちに
思えるときでも、決して独りではありません。イエ
スさまと一緒にいてくださいます。

聖書は、このイエスさまをしっかりと見つめな
さいと教えています。イエスさまを見つめて、わた
したちは、忍耐強く、信仰のマラソンを走り抜く
ものとされます。それが神さまの約束なのです。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 12章1, 2節より

自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、
信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。

〈ねらい〉

神の御子が自らを低くし、人間の姿をとってくださった。人間としてすべての苦しみを味わってくださったイエス様が共にいてくださる恵みを感じよう。

〈展開例〉**1. イエス様が体験されたこと**

イエス様は神様で、力あるお方です。そのイエス様があるとき、私たちと同じ人間の姿でお生まれになりました。人としてお生まれになったイエス様が、どんな体験をされたのか、考えてみましょう。

イエス様も赤ちゃんのときは、オギャーオギャーって泣いたのかな？

イエス様も、お腹がすいたとき、お腹がグーってなったのかな？

イエス様も夜になると眠くなってあくびをしたのかな？

イエス様もお仕事をしたあとは、疲れてくたくたになったのかな？

イエス様も転んでケガをしたのかな？

イエス様もおかしいときは笑ったのかな？

イエス様も悲しいときは泣いたのかな？

イエス様も病気になったのかな？

イエス様もお友達からいじめられたことがあったのかな？

イエス様も一人ぼっちのときは、寂しかったのかな？

イエス様も苦しいとき、神様にお祈りしたのか

な？

イエス様も悪いことをするようにと、誘惑されたのかな？

2. わたしたちと同じ人間として

イエス様は神様であられたのに、わたしたちと同じ人間として弱さや痛みや苦しみ、すべてのことを味わっていただきました。

それは私たちと同じ人間となって、私たちを救ってくださるためでした。

寂しいときも苦しいときも、私たちは一人ぼっちではありません。私たちの痛みや痛みをご自分のことのように、よく知っていてくださる方がそばにいてくださいます。

イエス様は、私たちのことを本当によくわかっていてくださる一番のお友達です。いつも私たちを励まし、助けてくださいます。

3. 障害物競走でゴールを目指そう！

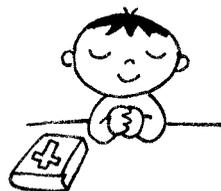
障害物としてたとえば

- ・ゴミ袋をくぐる(ゴミ袋の底をハサミで開く)
- ・ペットボトルの周りをまわる
- ・マットの上でくるりん
- ・片足でケンケン
- ・箱にボールを投げ入れる
- ・お菓子を拾う

などを途中で用意する。

ゴールにはイエス様と書いた紙を立てておく。

イエス様を見つめてゴールを目指しましょう。



〈ねらい〉

受肉したキリストは、私たちと全く同じ人として生きてくださったということを理解してもらおう。罪がないということで、イエス様が人としての苦しみや悲しみもなかったり、感じなかったりする、と思われないようにする。

〈展開例〉

1. イエス様は、地上に生まれる前はどこにいたんでしょうか。天にいました。そして、マリアから人として生まれて、地上で生きてくださいました。ところで、イエス様は特別な体をもっていたんでしょうか。

一度、お会いして見てみたいですね。その体は私たちと全く同じです。転んだら怪我をするし、針でちくりと刺したら血も出ます。長旅で歩き続ければ疲れます。喉だって渴きます。みんなも同じですね。だから、みんなが感じることを同じように感じていました。

でも一つだけ違うところがありました。それは、罪がなかったということです。神様に反することを全くしませんでした。

罪が無い状態を、私たちは経験したことはありません。だから、どんな状態かわからないかもしれません。イエス様は大切なことだけを教えてくださいました。それは、私たちが感じることは全部同じように経験した、ということです。

2. 「イエス様が一緒にいてくれる」ということには、「イエス様も人間として苦勞をされた」、あるいは、「もっと苦しい苦勞をも耐え忍んでくださった」ということがあります。

だから、苦しい時にイエス様はどうやって父なる神様に従ったんだろう、と考えることができます。イエス様は、みんなと同じように困ってしまうこと、苦しいこと、悲しいことを味わわれました。それはいろいろなことがあったでしょう。

・空腹で苦しくて苦しくてしょうがないことがありました。(マタイ4:2)。

・親が亡くなる経験をしています。お父さんが途中で亡くなったようです。

・親しい友達が自分を裏切ると悲しいでしょう。イエス様はペトロに知らないと言われ三度も言われました。(マタイ26:69～)

・長い旅をして疲れ果てて、寝てしまったことがあります。

・必要なものが足らず困った経験もしました。けれども父なる神様に感謝の祈りをささげて5000人以上の食べ物を与えられました。

・人に何度説明してもわかってもらえない苦しさを経験しました。弟子たちにもなかなか理解されませんでした。

・悪意をあげせられていじめられることがありました。ファリサイ派や律法学者たちにひどいことを言われました。けれどもイエス様は、悪口に悪口をもって返さず、正しいことを言いました。

・みんなは、ひどい目にあった時に腹が立って、やつあたりしたくなることはないでしょうか。イエス様もひどい目にありました。けれども、父なる神様を愛し、神様の心を第一に大切に、神様のいやがることを決してしませんでした。愛することに徹しました。

・イエス様はみんなから小さいと思われる人や、のけ者にされている人を大切にしました。彼らを大切に一緒に喜ぶことは、父なる神様と一緒に喜ぶことだと知っていたからです。(マタイ25:31～)

3. イエス様だから、苦しいことやつらいことはなかったんじゃないかと思うのは間違いです。イエス様は私たちのつらさをよく知った上で、助けてくださいます。

〈祈り〉

イエス様が人となり私たちのつらいこと・苦しいことを同じように経験されたことを学びました。今週も私たちと共にいてください。

1. ニューヨーク州立大学リハビリテーションセンターの詩

大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと、神に求めたのに、謙遜を学ぶようにと、弱さを授かった。より偉大なことができるように健康を求めたのに、より良きことができるようにと、病弱を与えられた。幸せになろうとして、富を求めたのに、賢明であるようにと、貧困を授かった。世の人々の賞賛を得ようとして成功を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。人生を享受しようとするものを求めたのに、あらゆることを喜べるようにと、命を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが願いはすべて聞き届けられた。神の意に添わぬものであるにもかかわらず、心の中の言い表せないものは、すべて叶えられた。

私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ。

○子どもと一緒に考えるポイント

- ①キリスト者であっても苦しいことや悲しいことはたくさんある。
- ②苦しみや悲しみを乗り越える模範を示されたのがイエス様。

2. 苦しみを耐え忍ぶ

今日の聖書箇所であるヘブライ人12章2節には、「御自分の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び」とある。私たちもイエス様と同じことができるか一緒に考えてみたい。

Q1 偉くなりたい、強くなりたいなど今より上のレベルになりたいと思ったことはありませんか？

Q2 逆に、今の自分より弱くなる（例えば、病氣

になる、お金がなくなるなど）としたら、それを受け入れることはできますか？

○前出の詩から考える

生きていると、自分が想像もしていなかったような試練や戦いに襲われるときがある。それは教会にきている人も来ていない人も同じ。では、待ち受ける戦いはただ辛く苦しい戦いなのか。

この詩は、アメリカの癌患者が入院する病院に書かれている。この作者は様々なことを神様にお願いした。でも願うたびに神様はその願いとは違う物を与えた。そう聞くと神様ってケチだとか、優しくないって思ってしまうかもしれないけど、神様にはそうした理由があった。それは、私たちが神様の子どもとして成長させるということ。聖書にも「主は愛する者を鍛え（ヘブライ人12章6節）」とあるように、神様は私たちが成長するための訓練をも備えられる。

ところで、訓練などと聞くと、どこか恐ろしい不安なイメージを持ってしまうかもしれない。でも大丈夫。その苦しみや悲しみを耐え忍び、訓練を乗り越え模範を示した方がいる。それはもちろん私たちの主であるイエス様。イエス様は御子であるにも係わらず、私たち罪人の身代わりとして十字架に架かってくださった。これはイエス様にとっても人生をかけた訓練だったと思う。そしてイエス様はこの訓練に間違いなく打ち勝った。それは三日目に永遠のいのちを持ってよみがえられたのが何よりも証拠。

さて私たちはどうだろう。試練や困難の中にある時に、それを耐え忍ぶことはできるだろうか。試練の中にあるときは思わず弱音も吐いてしまうかもしれない。でも最後には、この詩の作者のように、「私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福された」と神様に感謝できるキリスト者へと成長させられたいのである。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「救い主は、へりくだって、人となり、わたしたちのためにすべての苦しみを耐え忍んでくださった。この救い主が共にいてくださって、苦しみの中でもわたしたちは決して孤独ではない。」

(単元のねらいより)

主のうけぬころみも
主の知らぬかなしみも
うつし世にあらじかし
いずこにもみあと見ゆ。
ひるとなく、よるとなく
主の愛にまもられて、
いつか主にむすばれつ
世にはなきまじわりよ。

賛美歌532番の2節です。

イエス様が受けなかった試練も
イエス様の知らない悲しみも
この世にはひとつも存在しない
どんなに苦しい時にも、そこに主はおられる
昼も夜も、生きる時も死ぬ時も
イエス様の愛に守られて、私たちは歩いていく
そして、やがて終わりの時に、
イエス様と完全にひとつに結ばれる
そんな美しいゴールに向かって、
私たちは歩いていこう

と、私なりに解釈してみました。

これから皆さんは、たくさんの試練や悲しみを

味わうでしょう。私たちが罪人である限り、そういう「悲惨」がつきものです。私がこれまで味わってきた試練や悲しみなんて、もっと辛い経験をしてきた方々に比べれば実にちやっちいものですが、それでも、もう二度と味わいたくないような苦くて痛い記憶がたくさんあります。そんな思いを、愛する皆さんがこれからきっと味わわれる……。そう思うと、本当に切なくなる。

でも、覚えていてください。どんな苦しみを味わおうと、イエス様の知らない苦しみはありません。

これから皆さんは、孤独を感じる時もしばしばあるでしょう。私の苦しみなど誰にも分からない……。しよせんみんな他人だ、だれも助けてなどくれない……。そりゃ、しかたない。そのとおりですから。例えば私が、あなたのことをどれだけ愛しても、結局苦しむのはあなたですし、私にはどうすることもできない。それが現実です。……だから、私は、あなたのことを主にゆだねます。主は、主イエスだけは、あなたの苦しみを、あなた以上に苦しんでおられる方だから。あなたが苦しい時に、必ずそばにいてくださる方だから。主はあなたのそばにいるために、人間になって来てくださったのだから。だから、主におゆだねして祈ります。無責任と言われるかもしれないが、それが私の精一杯の愛です。

主に支えていただきながら、信仰の旅路を歩んでいてください。山あり谷あり、一回休みがあったり、三歩下がらされたり、めっちゃめっちゃ難しいすごろくみたいな旅路になるでしょうが、あなたを創造され、救い、今確かに共にいて導いておられる主を見つめながら、なんとか歩いてみてください。私も、君たちよりちょっとだけ先で、だからと汗かきながら、時には涙を流しながら、それでも、がんばって生きてますから。



テキスト ヘブライ人への手紙 5章7～10節
子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

本日は、宗教改革をおぼえる主の日。確かに私たちの罪からの救いは、十字架にはりつけにされたイエスさまにこそあるが、しかし、そのイエスさまは、復活なされて、墓から出て来られ、天に昇られて、今は、神さまの右の座に着いておられることをおぼえたい。そして、何よりも、そのイエスさまが、信じる者に救いと神の国の完成をもたらすために、もう一度、お出でになることを子どもたちと共におぼえたい。私たちの救い主イエスさまが天におられるがゆえに、私たちの歩みは、どんな時も、そのイエスさまを見つめて（上を向いて）歩むことになる。

上を向いて歩こう！

子どもの教会（日曜学校）の愛するお友だち、おはようございます。

今から495年前、その頃の教会は、子どもにこんな風に教えていました。

「ローマの教会の建物のために、この献金箱の中にお金を入れると、チャリンと音がしたとたんに、死んだおじいちゃんやおばあちゃんが天国に行けるよ！」。

そんな教えを信じて、子どもたちだけでなしに、大人の人も、献金していました。けれども、マルチン・ルターという修道士の人がいました。修道士というのは、修道院で神さまにお仕えする人のことです。ルターは、聖書を一所懸命学んでいました。ですから、それはおかしいと思って、人が天国に行けるのは、献金するとか、そういう善い行いによるのでなく、十字架で死んでくださったイエスさまを信じることによるんだと言って反対しました。そして、どうとう、教会から追い出されてしまったのです。しかし、ルターが説く聖書の教えは、たくさんの人たちの心をとらえて、宗教改革の運動がドイツ中だけでなく、ヨーロッパ中に広がったのです。今、みんなが通っている子どもの教会（日曜学校）は、宗教改革から始まった教会、プロテスタント教会っていうのですが、聖書の教えにのみ基づく教会に属しています。

さて、私たち、ぼくたちは、どんなに善いこと

をしても、天国に行くことは出来ません。たとえば、お年寄りに親切にして、満員電車の中で席をゆずっても、天国に行くことは出来ません。先生も経験したことがあるけれど、お年寄りに席ゆずってつり革につかまって立ちながら、いろんな善くない思いが心に生まれて来るのです。「他の人たちは、知らん顔で、中には寝ているふりをしている人もいるのに、ぼくって、席ゆずれてすごいな！」。難しい言葉で、優越感！ このように私たち、ぼくたちの行いは、必ず罪に汚れているのです。だから、善いことをたくさんしたとしても、神さまは認めてくださいません。神さまは、その行いが100%善い行いでないと、天国に入れてくださいません。けれど、神さまは、「そんな人間知らん！」でなしに、愛し、憐れんでくださって、天国に入れるようにしてくださいました。それが、み子イエスさまによって天国に入れるという方法です。

まず、イエスさまは、神さまのみ子で、罪とけがれが全然ないので、100%善い行いをしてくださいました。そればかりか、言葉でも、何よりも、思いでも、100%、神さまに喜ばれるようになさいました。神さまの戒めに完璧に従って歩んでくださったのです。さらにそればかりか、私たち、ぼくたちが犯す罪の責任を全部引き受けて、十字架で死ぬことで果たしてくださいました。こう

してイエスさまは、私たち、ぼくたちの罪赦されて、天国に行ける道となってくださったのです。

イエスさまが天国への道となってくださったことが、私たち、ぼくたちにはっきりと示されたのが、イエスさまが十字架の死から三日目に復活なさって、天に昇られ、神さまの右の席に着かれたみ業です。イエスさまは、お弟子さんたちにこうおっしゃったことがあります。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」(ヨハネ14:1-4)。イエスさまは、自ら天に昇って行かれました。ですから、「昇天」です。そのようにして、私たち、ぼくたちのために天国への道をひらいてくださったのです。そして、今、イエスさまは、神さまのお側近くで、大祭司として、私たち、ぼくたちのために神さまに執り成してくださっておられます。だから、ヨハネは次のように書くことが出来ました。「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(ヨハネ2:1,2)。

今、イエスさまは、神さまの右の席におられます。そのイエスさまの手やわき腹には、確かに十字架にはりつけにされた時に出来た傷あとがあります。復活なさったイエスさまがお弟子さんのトマスにおっしゃった通りです。「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、

わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい』(ヨハネ20:27)。しかし、天におられる復活のイエスさまのお姿は、確かに十字架による傷あとがありますが、もう既に栄光のお姿です。その栄光のイエスさまは、私たち、ぼくたちの大祭司としてだけでなく、全世界を治められる王さまとして、天の王座に着いておられるのです。そういうイエスさまが、もう一度、私たち、ぼくたちが住む世界にお出でになります。この世界の裁き主としてお出でになるのです。その時、全ての人が復活させられて、イエスさまを信じていない人は、イエスさまによって裁かれて、神さまに永遠に見捨てられることになります。しかし、イエスさまがお弟子さんにおっしゃったように、イエスさまを信じている人は、その時完成する天国、神さま中心の国に入れられるのです。イエスさまはお弟子さんにおっしゃいました。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」。

ところで、イエスさまがお出でになって、この罪に汚れた世界が裁かれ、新しくされる時は、恐ろしい時です。イエスさまはこのようにおっしゃいました。「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(マルコ13:24-27)。しかし、たとえ、天地が崩れるようなことが起こっても、イエスさまは、イエスさまを信じる私たち、ぼくたちにとっては、救い主なのです。私たち、ぼくたちの救い主として天におられるイエスさまを見上げながら、今週も、安心して歩いて行きましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] へブライ人への手紙 5章8～10節より

キリストは……完全な者となられたので、

御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、
神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

〈ねらい〉

天に昇られたイエス様は、そのちから強いみ方で、いつも私たちを助け、守ってくださる。

〈展開例〉**1. 十字架につけられた後のイエス様**

イエス様は十字架につけられた後、どうなったのでしょうか。今も墓の中におられるのでしょうか。いいえ、イエス様は三日目に復活されました。

つまり……

十字架につけられ、

墓に葬られ、

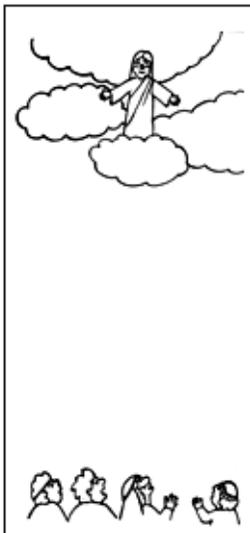
三日目に復活されました。

それから40日間、弟子たちに姿を現わされました。

そのあと、何が起こったと思いますか？

イエス様は、みんなが見ている前で天に昇っていかれました。(絵で説明をする)

別紙の、まちがいさがしの絵を上の方の絵をコピーして、雲にのるイエス様の部分と、お弟子さんたちの部分を切り取り、水色の紙に貼る。



紙の上の方を折り、弟子たちとの距離を縮める。一番上の紙を手で持ち、少しずつ上に上げていく。

**2. 共にいてくださるイエス様**

こうして天に昇られたイエス様は、今、何をなさっておられるのかな？

もう仕事が終わったので休んでおられるのかな？

高いビルから下を見ると、人や車がよく見えるように、イエス様は、天から私たち一人一人のことを、よ〜く見ておられます。私たちがどこにいても、寝ている時もイエス様は、私たちと一緒にいてくださるんだよね。そして助けが必要な時はすぐに助けてくれたり、励ましたりしてくださいます。

イエス様が見守っていてくださるので、私たちはどんなときでも心強いのです。

3. 「まちがいさがし」

別紙の絵のまちがいさがしをしてみよう。まちはいは全部で七つあるよ。見つけられるかな。時間があったらこの絵でぬりえをしてみよう。

まちがいさがし

まちがいは七つ。見つけられるかな。見つけたら色をぬってみよう。



〈ねらい〉

高挙のキリストの姿に、私たちの祝福が表れていること。将来へ希望をしっかりとてることを理解する。

〈展開例〉

1. 「子どもカテキズム」問24をみんなで読みましょう。

2. 先週は人とのなられたイエス様を学びました。イエス様には低い状態と高い状態があります。問24を読んで、どの部分が低い状態（謙卑のキリスト）のことか、または高い状態（高挙のキリスト）のことか分けてみましょう。

謙卑＝「私たちの罪人の身代わりとして十字架に死に」

高挙＝「三日目に、永遠のいのちによみがえられました」

3. キリストの高い状態が私たちに示すことは、キリストを信じる私たちも同じになるということです。キリストの高い状態には、復活の体を持って、栄光に充ち満ちていますね。これと同じことが私たちにも約束されています。ここに私たちの将来の希望があります。今がどんなにつらくても、苦しくても、またいろいろと失敗していても、必ずキリストが完全な勝利を与えてくださいます。私たちはキリストと同じように栄光に満ちたものになります。

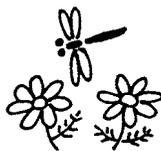
4. 高い状態と低い状態がどこで区別されるかを考えてみましょう。先ほど、カテキズムの文章を低い状態と高い状態のキリストに分けましたが、この区別がつけられると、高い状態がよくわかります。どこで区別がつけられるでしょう。

正確に言えば、律法のもとにいれば、低い状態、そうでなければ高い状態です。律法とは神様とのお約束です。十戒は律法です。そのお約束を守なければいけない状態が低い状態。そうでない時が高い状態です。生まれてから十字架の死までが低い状態。その後が高い状態だと言われます。

5. 私たちは高い状態のイエス様を見上げて、神様に従っていきましょう。イエス様を信じているなら、必ず同じように私たちを変えてくださいます。もし、高い状態のイエス様を考えなかったり、軽んじたりするということは、私たちが高い状態になるということをきちんと期待していないのと同じです。それは、イエス様がせっかく用意してくれたプレゼントを無視したり、希望を軽んじたりすることと同じです。高挙のキリストの姿は、私たちに与えられる恵みが表れています。

〈祈り〉

高くされたイエス様と同じ恵みが私たちに与えられることを感謝します。



1. 「子どもカテキズム」問24

問 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。ですから、私たちは、罪赦されて、神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

○子どもと一緒に考えるポイント

- ① 私たちに一番大切なことは、善いことをするのではなく、ただ神様を信じること。
- ② イエス様は今も生きて、働けているという事実。

2. 人の行いの限界

ヤコブの手紙に代表されるよう、信仰には必然的に行いが伴う。だから、完全に行いが否定されるということではない。しかしながら、聖書信仰に基づかない人の行いには限界があるということと一緒に覚えたい。

Q1 あなたが最近行った「良いこと」は何ですか？

Q2 あなたの周りで「良いこと」をしている人はいますか？

Q3 聖書は「良い（善い）こと」についてどのように教えているのでしょうか？

○聖書が語る一番大切なこと

イエス様が律法学者に、どうすれば永遠の命を受け継ぐことができるかと聞かれたとき第一と教えたのは、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という申命記6章5節の言葉だった。（ルカ10章25～28節参照）これは自分の力で何か善いことをする前に、まずは神様を愛しなさい、信じなさいという私たちが覚えるべき最も大切なこ

と、聖書信仰の根っこの部分。

人に良いことをしたり、人に良くされるというのは気持ちが良いことだと思う。でも例えば、自分がプレゼントを用意していて相手に渡した時、自分が想像していたよりも相手が喜ばなかったとしたら、怒ったり悲しい気持ちになったりしないだろうか。そう、私たちは相手の為と思ってやっていたことが実は自分の為だったということが結構ある。

神様は、人間には完全な善い行いができないことを良くわかっておられる。だから、最も大切だと教えたことは、自分で善い行いをするのではなく、完全である神様を信じるということだった。それは神様に自分の全てを「ゆだねる」ということでもある。

3. 事実

イエス様が生きて、私たちのために十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられた事実と一緒に覚えたい。

Q4 イエス様の死と復活、昇天をあなたは聖書中の物語としてではなく、自分のための事実だと信じられますか？

○イエス様は今も生きている

イエス様が人々に直接語り、働かれたのは約三年間と言われている。その間イエス様は寝る間も惜しんで伝道に努めていたことが福音書からもよくわかる。ではイエス様の働きとはこの聖書に書かれていることだけ、もう過去のことで今の私たちには関係ないのか。もちろんそうではない。イエス様は天に昇られているけど、確かに生きて今、働かれている。私たちはそのことを、日々のみ言葉で、祈りで、賛美で、なによりもこの礼拝において事実として覚えることができる。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

（ヘブライ人11章1節）」

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

前回、私たち罪人の苦悩を知り、それを担い、そこから解き放つために、身を低くして苦難を受けてくださった、イエス様のへりくだりを学びました。父なる神様は、そうしてお働きをまっとうされたイエス様を、栄光へと引き上げられました。今やイエス様は、高く挙げられた栄光の主として、下記の様々な救いのお働きをなし、私たちをも高く引き上げてくださるのです。

○死者の中からの復活

イエス様は罪と死の力を打ち破り、永遠の命へとよみがえられました。今や私たちも、イエス様の勝利と命の力にあずかり、やがて終わりの時には、主と同じ栄光の体によみがえることが約束されています。

○昇天

イエス様は天に昇られ、神の聖なる住まいにお戻りになりました。そうして私たちのために天への道を開いてくださって、救いの完成の時に入ることができる天の居場所を用意してくださっています。

○神の右の座への着座

右の座への着座とは、御父と等しい権威をもって、地上を治めておられるということです。イエス様はまことの王として私たちを守り導き、また

永遠の大祭司として、私たちのために父なる神にとりなしつづけてくださっているのです。「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくさるのです。」

(ローマ8:34)

○終わりの日の再臨

世の終わりに、イエス様は栄光の裁き主として再び世に来られ、生きている者も死んだ者も、すべての人をふるいわけ、神の国を完成されます。この時私たちはイエス様からよしとされ、すべての涙をぬぐわれます。死も罪もなく、悲しみも痛みもない世界が到来します。

教会のシンボルは十字架です。十字架にかけられた痛ましいキリスト、その裂かれた体、流された血によって、私たちは癒され、ゆるされます。でも、イエス様は十字架にかかりっぱなしのお方ではありません。

イエス様のことを、私たちのために死んでくださった方とだけ覚えているようなら、まだまだです。私たちのために死んでよみがえってくださった方であることを覚えましょう。

そうして、ただ私たちと苦しみを共にして下さる方ではなくて、私たちを高く引き上げて下さる方であることを覚えましょう。考えられない高みにおられた方が、考えられない低みまで下ってきてくださって、考えられない高みまで導いてくださる。それがイエス様のしてくさることです。



テキスト	ヘブライ人への手紙 1章1～4節
子どもカテキズム	問25
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問24 ウェストミンスター大教理問答 問43

問25 イエスさまの預言者としてのお働きは何ですか。

答 神さまの御言葉を教えてください。

イエスさまは、今も、教会を通して、

聖書と聖霊なる神さまによって私たちに語りかけてくださいます。

ですから、私たちは心をこめて御言葉を聴きます。

〈キリストの三職〉

主なる神の第二位格であるキリストは、私たちの贖いのために、三つの職務（預言者・祭司・王）を果たされました。子どもカテキズムにおいては、このキリストの三職を問25～27において学んでいくこととなります（参照：ウェストミンスター小教理問24－26、同大教理43－45）。

〈旧約時代のキリストの預言者職〉

ヨハネは福音書の最初で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」（ヨハネ1:1）と語り、御子の永遠性を語ります（参照：子どもカテキズム問22）。そして、神は言葉において天地万物を創造されました（創世記1章）。これは御子の働きです（1:2b）。

旧約の時代、キリストの預言者としての働きは、主がお立てになった預言者を通して、イスラエルの民に、神の言葉を預言として語りかけることによって行われました（1:1）。

〈新約時代のキリストの預言者職〉

御子は受肉されると、ご自身の口により福音を弟子たちとイスラエルの人々にお語りくださいました。

そして、キリストが十字架の御業を成し遂げ、

天に昇られた現在、御言葉は、66巻の旧・新約聖書としてまとめられました。そして、主なる神さまは、教会を通して、聖書と聖霊なる神さまによって、私たちに語りかけてくださっています。

しかし、神の啓示は、聖書以外には、今は停止されているため、私たちが主による救いを知り、神さまによる救いを受け入れようとするのであれば、私たちは神の御言葉である聖書の解き明かしを聞く以外には方法はありません（ウェストミンスター信仰告白1:1）。

だからこそ、私たちは、御言葉である聖書を解き明かすことにより、御子がお語りくださった神のよる救いを、すべての民に伝えることが出来るのであり、また人々を神の救いに導く唯一の手段です。

〈預言と成就〉

私たちが、神の御言葉である聖書の言葉に耳を傾けるのは、神の御言葉の確かさにあります。主は御言葉により、主なる神さまの御言葉を信じる者に対する罪の赦しと永遠の生命である救いを約束してくださり、一方、神の御言葉に聞き従わず、自らの欲望を求めて歩む者に対する裁きを予告されています。（辻 幸宏）



テキスト ヘブライ人への手紙 1章1～4節
子どもカテキズム 問25

〔単元のねらい〕

人となられた御子イエス・キリストの働きとして、おもに三つのことが示されています。キリストの三職と呼ばれるこれらの働きは、預言者職・祭司職・王職です。今日から三回に分けて、キリストの三職を取り上げていきますが、今回は第一回目であり、預言者職です。預言者・祭司・王は、旧約の時代にイスラエルに立てられた働き人であるが、キリストはそれぞれの働きを成就されたお方です。今日は、キリストの預言者としての働きを確認することにより、神の御言葉の完成者としてのキリストを確認し、キリストこそが真の神であることを確認していきたい。

救いをお語りくださるイエスさま

今日から三回、イエスさまのお働きについて、一緒に考えていきたいと思いますが、皆さんは、イエスさまが、どのようなことをされたか知っていますか？

- ・おとめマリアよりお生まれになったこと。
- ・奇跡を行われたこと。
- ・病人をいやされたこと。
- ・悪霊を追い出されたこと。
- ・死んだ人を生き返らせたこと。
- ・救いのお話をされたこと。
- ・十字架にお架かりになったこと。
- ・死から三日目の朝によみがえられたこと。
- ・天に昇られたこと。

いろいろありますね。イエスさまのお働きは、三つに分けることが出来ます。そのお働きは、「預言者」、「祭司」、「王」です。これから毎週一つずつ、学んでいきます。

最初に今日は、イエスさまのこれらのお働きの中であって、お弟子さんたちやユダヤ人たちに対して、救いのお話をされたこと、つまり預言者としてのお働きをされたことを、考えていきたいと思えます。

「預言者」という言葉を皆さんも聞いたことがあると思います。知っているお友だちは、旧約聖

書に記されているイザヤやエレミヤといった預言者を知っていると思います。イエスさまも預言者のお働きをしたのであれば、イエスさまも旧約聖書の人なのでしょう。いいえ。新約聖書において、預言者が出てこないのは、イエスさまが預言者としてのお働きを行い、完成してくださったからなのです。

今日、お読みしましたヘブライ人への手紙においては、イエスさまのことは「御子」と記されています。2節でこのように語られています。「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。」神さまは、御子（イエスさま）によって世界を創造されたと語られています。天地創造の最初に、「初めに、神は天地を創造された。……神は言われた『光あれ。』こうして光があった」（創世記1:1,3）と記されています。イエスさまは言なる神です。天地創造の言葉の背後には、言なる神であるイエスさまがおられると考えることができます。イエスさまは、創造の時から働きになっていたのです。

旧約聖書の時代に、主なる神さまはイスラエルに何人もの預言者をお立てになりました。預言者はイスラエルの人たちに、「罪を悔い改めて、神

さまを信じなさい。主なる神さまを信じたならば救われますよ。あなたたちの救い主メシアは、これから来られますよ」と語りましたが、預言者たちは、自分で考えて語っていたのではなく、いつも神の御子であるイエスさまから御言葉を預かって、語っていたのです。

この神の御子であるイエスさまが、人となりました。イエスさまは、お弟子さんたちに対して、そしてユダヤ人の律法学者やファリサイ派の人たちに対して、何をお語りになられたのでしょうか？「罪を悔い改めて、神さまを信じなさい。主なる神さまを信じたならば救われますよ」ということです。そして、神の御子であるイエスさまご自身が十字架に架かって死ぬのは、「あなたたちの罪を償うためですよ。だからこそ、神の御子であるイエスさまも神さまとして信じなさい」ということです。つまり、旧約の時代に、預言者によって語られていたことと、まったく同じことでした。

この神の御子であるイエスさまは、十字架に死に、三日目に復活を遂げて、私たちの救いを成し遂げてくださってから、天に昇られました。天に昇られたイエスさまは、もう何もお語りにならないのでしょうか？ いいえ。今、私たちは、イエスさまの言葉を、旧約・新約66巻の聖書によ

て、聞いているのです。聖書は、イエスさまが、私たちにお語りくださった唯一の神の御言葉なのです。だからこそ私たちは、聖書の御言葉に聞かなければ、神さまによる救いを理解することは出来ないのです。だからこそ、私たちは、毎週、神さまの御前で神さまを礼拝する時、聖書の言葉を聞くのです。皆さんも、毎日、家において、聖書を読んで、神さまの御言葉に聞いていただきたいのです。

イエスさまは、聖書をとおして、皆さんに何をお語りになっているのでしょうか？「罪を悔い改めて、神さまを信じなさい。主なる神さまを信じたならば救われますよ」ということです。すでにイエスさまの十字架によって、イエスさまを信じる人たちの罪の赦しは完成しています。そしてイエスさまは、「わたしはすぐに来る」（ヨハネによる黙示録22:20）とお語りくださっています。イエスさまが、再び来られた時、救いは完成して、神さまを信じる私たちは、神の国（天国）において、神さまと共に永遠の喜びに満たされるのです。

イエスさまがお語りになったお約束は、必ず実現します。イエスさまは、私たちに嘘をついたり、裏切ったりすることは絶対に行われません。だからこそ、イエスさまが救いに導いてくださるとの約束の言葉に、私たちは、感謝して、喜んで聞き従って行くことが出来るのです。（辻 幸宏）

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 1章12節

しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。



〈ねらい〉

イエス様は、神様の言葉を伝えるためにこの世に来てくださった。イエス様こそ父なる神様の心を伝えるまことの預言者である。

〈展開例〉**1. 誰に伝えてもらうのが一番？**

誰かに何かとても大切なことを伝えなければならないとしたら、どんな方法で伝えますか？

手紙を書く？ 電話をかける？ でも、郵便も電話もないところだったらどうしますか。

いい方法があります。代わりに誰かに話しに行ってもらうことです。

それでは、どんな人に、そのお仕事をお願いしたらいいでしょう。それは、何を伝えたいのかを、自分と同じくらいよ〜く知っている人です。もし、お願いしたことと違ったことを勝手に伝えてしまったら、大変です。また、伝える人が、そのことをよ〜く知らないのと、何か質問をされても正しく答えることができません。

ですから、そのお仕事に一番ふさわしいのは、伝えたいことを本当によくわかっている人です。同じ考え方を持っている人なら安心です。

2. 神様の言葉を伝えるために来られたイエス様

神様は、神様の言葉を伝えるために、いろいろな人を選びました。

モーセやサムエル、エリヤ、イザヤ、エレミヤという名前を聞いたことがあるかもしれませんね。この人たちは神様から語りなさいと言われた言葉をそのまま語りました。「預言者」と言われている人たちです。

そしてイエス様も、神様の言葉を伝えるためにこの世界に来られました。

イエス様はこれまでの預言者と、どこが違っていたのでしょうか。

この世界が造られる前から、イエス様は神様と共におられました。そしてこの世界を神様と一緒に造られたのです。イエス様は神様の御子であられるので、神様の言葉を伝えるのに、イエス様ほどふさわしいお方はおられません。イエス様がお語りになった言葉は、神様が語られた言葉そのものなのです。

また、イエス様は神様ですが、人となられた方なので、私たち人間にもわかる言葉で神様の言葉を伝えることがおできになるのです。

3. 伝言ゲーム

○正しく伝えられるかな？

(例文)

「むかし、むかし、あるところに、おにいさんとおばあさんがいました。二人の年を足すと、99歳になります」

「パンダとコアラとタヌキが、かけっこをしました。一等になったのは、コアラでした」

「誕生日にお母さんからケーキをもらい、お父さんから絵本をもらい、お兄ちゃんからお菓子をもらいました」

○背中や手のひらに、指で文字や図形をかくて伝える伝言ゲームもおもしろいよ。(この場合は、文字はひらがな一文字のみ)



〈ねらい〉

主イエスの働きを知ることで、主イエスへの頼り方がわかること。また、主イエスが預言者として神の言葉を間違いなく明らかにしてくださったことを伝える。

〈展開例〉

- 今日の「子どもカテキズム」問25を読みましよう。
- イエス様の働きについて詳しく学びます。イエス様の働きを詳しく分かるようになると、イエス様への頼り方が分かって来ます。

例えば、皆さんの家にテレビはありますか。もしテレビを修理するなら電気屋さんにもっていきますよね。もしケーキ屋さんにいったらどうでしょう。直してもらえないと思います。もし、床屋さんや、スポーツ用品店にもっていてもダメですね。電気のは電気屋さんにはいかないといけません。電気屋さんに行くのは、私たちが電気屋さんのお仕事を知っているから行くわけです。私たちは神の言葉を知るには、きちんと伝えられる人に聞かないとダメです。でも、多くの方は、きちんと伝えられない人のところへ聞きに行こうとする人が多いのです。こういう人は、見た目や、評判で判断したり、聞いて楽しい、おもしろい、心地良いというだけで聞いたりしてしまう間違っただけの人たちです。

さて、イエス様は何の仕事をしてくれる方でしょう。罪を赦してくださる方というのは正解ですね。でも、今日はもっと詳しく学びますと言いました。罪を赦してくださるという仕事を詳しくしてみると、三つのお仕事に分けることが出来ます。

それは、預言者と祭司と王という三つのお仕事で、今日から三回にわけて学びますが、今日

は最初の預言者というお仕事について学びます。

- 「預言」とは、「言葉を預かる」と書きます。神様の言葉を聞いて預かって人にちゃんと伝えるお仕事です。（「預言」であって、「予言」じゃありません。）

イエス様は神の言葉をきちんと私たちに伝えてくれました。どうやって生きればいいのか、神様をどうやって愛すればいいのか、罪とは何か、大切なことを教えてくれました。特に、私たちが罪赦されて、救われるためにどうしたらいいか、神様からの言葉を伝えてくれました。

だから、私たちは神様の言葉を知りたいときはイエス様の言葉を聞けばいいと言うことが分かります。どうやって生きればいいのか、神様をどうやって愛すればいいのか、罪とは何か、救われるためにはどうしたらいいか、イエス様は伝えてくれました。

- イエス様だから間違いなくきちんと教えてくれます。だから、私たちはまず、イエス様が聖書で伝えていること、語っていることをちゃんと聞きましょう。生きるために必要なことをイエス様は伝えてくれています。

それから私たちは自分でわかったと思っても間違っていることがあります。だからわかったと思っても、イエス様はどう言っているのかなあ、と調べたり思い出したりしてみましょう。

〈祈り〉

神様の言葉を正しくイエス様が教えてくださることを感謝します。どうしようか迷うことがあるときにも、イエス様の言うことを聞くことが出来ますように。



〈ねらい〉

- ・キリストの預言者としての働きの意味を確認して理解する
- ・キリストをどうしてのみ、私たちは罪赦されて救われる

〈展開例〉

イエス様のお働きを大きく分けると、預言者・祭司・王の三つに分けられます

これから三回にわたって、ひとつひとつについて学んでいきますが、今日はこのうちの「預言者」について考えてみましょう。

みなさんは「預言者」というとどんな人を考えますか？

この世の中の人には「預言者」というと「未来に起きる事を予測して言い当てようとするちょっと不思議な人」と考えるかもしれません。

でも、聖書に書かれている「預言者」は違います。聖書に書かれている預言者は「神様の言葉を神の民に取り次ぐために、神の僕として神の民から召された人」のことをいいます。預言者という旧約聖書にたくさん出てきますね。みんなが知っている預言者は誰でしょう。モーセ、サムエル、エリヤ……。この人たち預言者は、自分で閃いたことを勝手気ままにイスラエルの人たちに話しているわけではありません。預言者の「預」という字は「預かる」という意味で、神様の御言葉を預かって忠実にイスラエルの人たちに語り聞かせました。神様は預言者たちを通して、ご自分がどんなお方であるかお知らせになりました。

では、イエス様が預言者というのはどういう意味でしょうか。

神の子であるイエス様が人となってこられたのは、私たちに御言葉を教えて下さるため、罪からの救いについて語るためです。イエス様がお語りになられた御言葉は、神様の御言葉そのものです。神様とはどういうお方なのか、イエス様を通して私たちにもはっきりわかるのです。

イエス様は今には天におられますが、今もイエス様は神様のお言葉を預かり、私たちと神様の間に立って御言葉を伝えて下さるのです。それは私たちが教会で礼拝のお話を聞くこと聖書を読むことによって、聖霊なる神様を通して私たちに神様はどんなお方か、イエス様の十字架のほかに私たちの罪からの救いはないことを語りかけて下さいます。

目には見えなくても、イエス様は御言葉を通して私たちひとりひとりに語りかけて下さるって、本当に素晴らしいですね。これからは聖書を読むとき、お話しを聞くとき、「今イエス様が自分に語ってくださっているんだな」と今までより意識してみると、また心に響くと思います。感謝して御言葉を聞きましょう。

〈祈り〉

神様、イエス様を預言者として私たちに御言葉を教えて下さり、本当にありがとうございます。私たちが御言葉を通して神様のみこころがわかるように、そのために日々喜びを持って聖書を読み、祈ることが出来るように助けて下さい。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず教理的なポイントを整理しましょう。

○預言者の中の預言者キリスト

「モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』」(使徒言行録3:22、※申命記18:18も参照)

預言者とは、単に未来を予言する者ではなく、神の言葉を預かる者です。「わたしたちの救いのための神のご意志」、すなわち、私たちの永遠の救いのために、神が私たちに知らせ、信じさせようとしておられる救いのメッセージ＝福音をもたらす人のことです。イエス様は、そんな預言者の中の預言者です。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブライ書1:1,2)

神様の最終的・完結的なメッセージは、御子イエス・キリストの派遣にすべて表されています。イエス様は「神の言葉」そのものとして(ヨハネ1:1-3)、神の御心(われらの救いのために独り子をお与えになるほどの愛!)をあますところなく明らかにしてくださいました。

○今も語ってくださっているキリスト

1. 旧約時代には、イエス様は聖霊において、

預言者・聖書記者たちの内に働いて、神の御心を教えておられました。

2. 地上にあっては、その説教と御業、また十字架・復活・昇天にいたるご生涯を通して、神の御心を教えてくださいました。また聖霊において使徒たちの内に働いて、教会を教え導き、また「聖書」を完成されました。

3. 今は、「聖書」を読む者の内に、またそれを解き明かす説教者と聴衆の内に、聖霊において働いて、神の御心を教え、救いの完成に導いて下さいます。

あの人の存在そのものがメッセージ……、そういうのって、まだよく分からないかな? 例えば、サッカーでスーパーサブっていますよね。スペイン代表のセスクみたいに。この人が交代で入ってくる時というのは、監督からの「攻めろ!!」というメッセージが発せられた時です。イエス様という存在が私たちに与えられたというのも、神様からの明確なメッセージです。「お前たちをどうしようもなく愛している」という、愛のメッセージが発せられたのです。

このイエス様を通してしか、神様はお語りにはなりません。だから、イエス様以外のいかなる者からも聞く必要はありません。昔、幻聴に悩まされた人からの電話がよくかかってきました。私は悪魔にとりつかれている、こんな自分では神様に愛されていないに違いない……。何度もかかってきました。私は、何度でも同じことを言いました。「そんなことはありません。あなたのために、神はイエス様を与えてくださったのですから、愛されているに決まっています。安心して下さい。」みなさんにも同じことを伝えたいのです。



テキスト ヘブライ人への手紙 4章14～16節
子どもカテキズム 問26

問26 イエスさまの祭司としてのお働きは何ですか。

答 父なる神さまと私たちとの間に立ってくださることです。

イエスさまは、かつて、私たちの身代わりとなって、

十字架の上で御自分をいけにえとしてささげてくださいました。

今は、御父の右に座して、私たちのために執り成しの祈りをささげていてくださいます。

ですから、私たちは心をこめてお祈りします。

〈真の大祭司イエス〉

主イエスこそ真の大祭司です。主イエスはただ一度、十字架の上で、わたしたちのための犠牲の小羊としてご自身をささげられました。罪なき小羊の命によって罪を贖う贖いのみわざは完全に、十分に成し遂げられました。わたしたちは罪赦され、父なる神と和解し、神の子とされたのです。

これは神の愛によることでした。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ福音書3章16節)。

〈主の功績のゆえに〉

わたしたちが主イエスを大祭司として持つという事は、わたしたちの救いがひとえにこのお方の贖いのみわざ、このお方の功績によっているということです。このお方がわたしたちのために十字架に死んでくださった。それはただひたすらなる恵みであり、わたしたちは自身の救いということに指一本関わっていません。だからこそ救いは確かです。揺らぐことがないのです。

わたしたちの救いのためにすべてのみわざを成し遂げてくださったお方が、今も大祭司として、天にあって父なる神とわたしたちの仲立ち、仲保者となってくださるのです。これほど心強いことはありません。

このお方は真の神でありますが、真の人となられました。それゆえわたしたちと同様に試みにあわれ、わたしたちの苦しみも痛みもすべてご存知であられ、わたしたちの弱さにも同情してくださいます。そして、わたしたちをあらゆる罪のみ

じめさから救い出してくださいます。

〈大胆に恵みの座に近づこう〉

そのように、大祭司イエス・キリストにある執り成しの恵みを知るとき、わたしたちは大胆に神に近づくことをゆるされます。わたしたちは罪贖われ、義と認められ、神の子とされました。それゆえ、臆することなく神を仰ぐことができます。

主を信じ、主に従って生きる者は罪に定められることがありません。大祭司が共にいてくださることの恵みによって、わたしたちの人生の歩みはいかなるわざわいからも守られています。主の贖いのみわざを土台に据えるとき、わたしたちの人生の歩みは正しく確かなものとされるのです。また、主はご自身に信頼する者たちに時宜に合った助けをくださるのです。

こんなに罪深い、こんなに欠け多き自分は、おそれ多くてとても神さまに近づくことはできないと考えてしまうことはないでしょうか。けれども、救いがひとえに主イエスの功績によるのだということをおぼえ、思い起こします。わたしたちは、主イエスという大祭司を与えられています。救いはわたしたち自身の正しさ、立派さ、あるいは力によるものではありません。大祭司イエスの贖いのみわざの確かさによるのです。

罪あるままで、恥多き姿のままで、わたしたちは神に愛され、受け入れられています。わたしたちのために死なれた大祭司は、今も生きてわたしたちを支え、守り、助けてくださいます。大祭司の大いなる恵みに信頼して、大胆に恵みの座に近づきましょう。(木下裕也)

テキスト ヘブライ人への手紙 4章14～16節
子どもカテキズム 問26

〔単元のねらい〕

キリストの三職のうち、今回は祭司職について見る。旧約にあって祭司職によって担われてきた贖いのみわざを、真の大祭司イエス・キリストが十分に、完全に成し遂げられたことを学びたい。そして、独り子の命をもってわたしたちを罪と死から救い出してくださった神の愛を喜び、たたえたい。なお、展開例は中高生への語りかけを念頭に置いている。

大胆に恵みの座に近づこう

神さまとともにあること。それが人間の幸せです。神さまも、人間がご自身と共にあることを喜んでくださいます。しかし、神さまと人を隔てるものがあります。人の罪です。きよく、正しい神さまは人の罪をおきらいになります。それで、罪ある人間は神さまに近づくことができません。

神さまの恵みに感謝しましょう。神さまは罪人がご自分と仲直りし、もういちどご自分のふところに帰って来ることができるよう、人の罪を赦すための手だてをご自身で備えてくださいました。それは贖いのみわざです。「贖い」とは「代価を支払って買い戻す」という意味です。罪とは、命をもって償わなければならないほどに重いものです。ですから人がみずから罪の償いをするためには、本当ならば自分の命を差し出さねばならなかったのです。

けれども憐れみ深い神さまは、犠牲の動物を身代わりとしてささげることにより、その動物の血に免じて人の罪を赦し、人を罪からときはなつことをみこころとしてくださったのです。

旧約聖書の時代には、そのために祭司というつとめが立てられました。祭司の大切なつとめは、神さまの民がたずさえてくる犠牲やささげものを彼らに代わってささげることでした。祭司は神さまと神の民との間に立って、その罪が赦されるように、贖いの動物をささげました。この祭司のとりなしのわざによって、民は罪赦され、神さまとの和解の恵みをいただいたのです。

時が満ちてイエスさまが来られると、もう旧約の祭司たちはいらなくなりました。イエスさまこそ真の大祭司です。祭司は動物をイスラエルの民の罪の犠牲としてささげましたが、イエスさまはわたしたちの罪を贖う犠牲の小羊として、ただ一度ご自身を十字架の上にささげられ、尊い血潮を流され、死なれました。罪なき小羊の死によって、わたしたちの罪を贖う贖いのみわざは完全に、十分に成し遂げられました。

そして、わたしたちは神さまの子とされました。十字架の贖いによって、神さまとわたしたちとを隔てていたわたしたちの罪がとりのけられたからです。神さまはわたしたちと和解してくださり、わたしたちをご自身のふところに迎え入れてくださったのです。

そのように、わたしたちの罪を贖うためにイエスさまは人となりました。まことの神であられる方が、まことの神であられるままにまことの人となりました。天の栄光を捨てて、身を低くしてこの世に来られました。そして苦しみと恥を受け、罪人のひとりに数えられ、十字架刑という最も苦しい、最もみじめな死を死なれました。

イエスさまが人となられたとは、わたしたちと同じになられたということです。イエスさまが人となられたのは、わたしたちの苦しみをご自身の苦しみとし、わたしたちの痛みをご自身の痛みとし、ご自身の悲しみをご自身の悲しみとされるた

めでした。わたしたちの苦しみ、痛み、悲しみをだれよりもわかってくださるのは大祭司であるイエスさまです。このお方は罪は犯されませんが、あらゆる点においてわたしたちと同じ試みにあわれました。ですからどんなときにもわたしたちのことを知っていてくださるのです。そしてあらゆるわざわいからわたしたちの命を守ってくださるのです。どのような苦難からも、最もふさわしいかたで助けてくださるのです。

イエスさまの贖いととりなしの恵みによって、わたしたちは大胆に天の神さまに近づくことができます。神さまに、父よ、と親しく呼びかけることができます。もうわたしたちと神さまを隔てるものはないからです。イエスさまは今も大祭司として、天でわたしたちのことを父なる神さまに

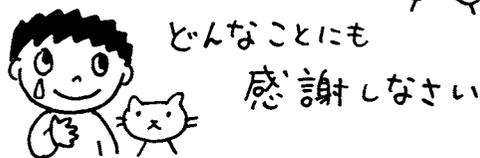
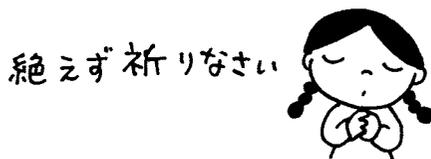
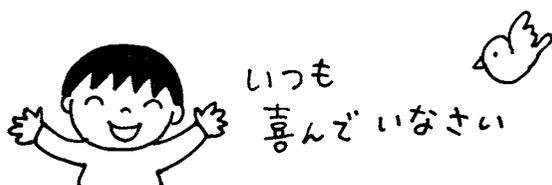
とりなしていただきます。こんなに心強いことはありません。わたしたちは、もう何をも恐れる必要はありません。

こんなに罪深い、こんなに惨めな、こんなに欠けの多いわたしはおそれ多くてとても神さまに近づくことはできないなどとしり込みしなくともよいのです。神さまは独り子であるイエスさまを十字架につけるほどに、わたしたちを愛しておられます。罪あるままで、恥多き姿のままにわたしたちを愛し、喜んでご自身のふところに迎え入れてくださいます。大祭司イエスさまに守られ、助けられて、わたしたちの人生の歩みは正しい、確かなものとなるのです。

神さまの大いなる恵みに信頼して、大胆に恵みの座に近づきましょう。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 4章16節

だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、
大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。



〈ねらい〉

「祭司」や「とりなし」という言葉は幼児には難しい。幼児でも理解できる言葉で、罪をとりなしてくださるイエス様が共にいてくださることを教えたい。

〈展開例〉

1. 一緒に謝ってくれる人

愛ちゃんは、お友達とけんかをして、ブンブンと腹を立てていました。むしゃくしゃして幼稚園の花瓶をわざと落として割ってしまいました。先生は「花瓶を割ったのはだれですか」と聞きました。でも愛ちゃんは、叱られるのが恐くて、なかなか自分が割りましたと言うことができません。

そのとき、お友達のさくらちゃんが言いました。「愛ちゃん、私も一緒に言ってあげるからあやまりに行こうよ」

それで愛ちゃんは、思い切って先生にあやまることができました。悪いことをしたときに、一緒に行って助けてくれるお友達がいると心強いですね。

2. 私たちのためにお祈りしてくださるイエス様

私たちが愛ちゃんのように、たくさん悪いことをしてしまいますよね。

イエス様は、一緒にあやまってくたださるだけでなく、「神様、私が代わって罰を受けますから、どうかこの人をゆるしてあげてください」と私たちの代わりに十字架にかかってくださいました。

神様と私たちの間にイエス様がいてくださるので、私たちは安心して神様に近づくことができるようになりました。

イエス様は私たちのために、今も祈り続けていてくださいます。どんなときでもイエス様のお名前によってお祈りするとき、神様はそのお祈りを聞いてくださいます。

ですから私たちはどんなときでも心強いのです。

3. とりなしの祈りのカードを作ろう

用意するもの

白の画用紙 ハサミ のり・ボンド
クラフトパンチ 色紙または色画用紙 ビーズ リボン

- ・白い画用紙をA4の4分の1ぐらいの大きさに切る。
- ・とりなしの祈りの文を書く。(字をかけない子どもには、先生が書いてあげましょう)
- ・クラフトパンチでくり抜いた紙を貼る。
- ・お花の真ん中にビーズを貼り付けてもいい。
- ・目につくところに飾ってお祈りしよう。

例文

「おじいちゃんの病気が早くよくなりますように」

「〇〇ちゃんが神様を信じることができますように」

「〇〇ちゃんが教会に来ることができますように」

「地震や津波で今も苦しんでいる人、悲しんでいる人たちを助けてください」



〈ねらい〉

主イエスの働きを知ることで、主イエスへの頼り方がわかること。また、主イエスが大祭司として、私たちが神に近づけるようにして下さったことを伝える。

〈展開例〉

- 今日の「子どもカテキズム」問26を読みましよう。
- 先週に続いて今日、そして来週まで、イエス様の働きについて、詳しく学びます。詳しく分かるようになると、イエス様への頼り方が分かって来ます。
先週、電気屋さんの例を話したように、私たちが電気屋さんへ行くのは、そのお仕事を知っているから行くわけですね。
イエス様は何の仕事をしてくれる方でしょう。罪を赦して下さるお仕事です。そのお仕事を詳しくしてみると、預言者と祭司と王という三つのお仕事に分けられ、今日は、祭司というお仕事について学びます。
祭司という名前を今はあまり聞きませんが、神様へ献げ物を献げる働きをする仕事です。
献げ物の中には、感謝の献げ物や、罪を赦してもらったための献げ物があります。昔の人は、神様に家畜を献げて、罪の赦しの献げ物をしていました。
- 今日はイエス様が最も偉大な大祭司だったという話でした。だから感謝の献げ物にしても、罪の赦しの献げ物にしても、イエス様を通してすることが大切です。しかも、イエス様は何を献げて下さったのでしょうか。十字架を思い出してください。ご自分の命を献げて下さいました。
- 聖書では罪の赦しのための献げ物しないといけないことを知っていますか。(レビ記4:27-

29等) どうして今みんなはしないのでしょうか。

それは、イエス様が、大祭司として、私たちのための罪の赦しの献げ物を献げて下さったからです。それは尊い、ご自分の命です。十字架につけられて、献げて下さいました。罪のある私たちは自分の命を献げなければいけないところを、イエス様がかわりに献げて下さったのです。これがイエス様だけができた大祭司のお仕事でした。

- みんなは神様に心からお詫びしたくなる時はありますか。本当は神様に謝りたい、と思うとき、自分の力だけで頑張ろうとするんじゃなくて、大祭司であるイエス様に頼りましょう。最も偉大な大祭司だから必ず、神様に謝れば赦してもらえるようにして下さいます。

もし、イエス様のこの大祭司の働きに頼らなかつたらどうなるかという、私たちが神様にお詫びしたり祈ったりしても、十分神様に届かないことになります。すると、私たちの心には不安が残って仕方なくなります。神様にお詫びをしても、まだお詫びし足りないかも知れない、あれもこれももしないといけないかも知れない、といっただけで不安が残ることになります。そうすると、お札を買ったり、お守りをつけたり、色んな偶像の神様へ頼ってしまうことがあるかもしれません。

イエス様は大祭司の働きを完璧になさって下さっています。私たちがすることは、そのお働きをいつも、どんなときも、どんな状況でも信頼すること。自分が大きな罪を犯す失敗をしてしまったとしても、イエス様の大祭司のお働きを心から信じることです。

〈祈り〉

私たちがイエス様の大祭司のお働きをどんなときも信じる事ができますように。

〈ねらい〉

- ①あらためて イエス様が私たちの救い主であることを学ぶ。
- ②私たちと神様を結び付けている絆は大祭司イエス様であることを しっかり信じ、そしてイエス様に頼って大胆に神様に近づく者になる。

〈展開例〉

4章14節。「さて、私たちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、私たちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。」ここに、ねらいの①があります。私たちには大祭司、神の子イエスがあたえられているということです。ユダヤ人は、神様と自分たちの生活をむすびつけるための務めをもった祭司を大切にしていました。その祭司の長が、大祭司です。

5章2節。「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまどっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。」

皆さんは 自分の思い通りにならない時や試練にあった時などに、神様との結びつきが無くなったと思うことはありませんか？

聖書は、神様と私たちの結びつきを、そのような主観的なものとして教えていません。旧約時代には、神様がお立てになった祭司、特に大祭司が、神様と私たちを結び付けていると考えられていました。そこでは、神様の愛が信じられなくなるような時も、自分がいかなる罪人であっても、大祭司が神様と私たちの間に立って、絆となってくだ

さると考えられていました。ですから、悲しいことや辛いことなどで、神様の愛が見えなくなるときや、自分なんか神様に愛されていないと思うときがあるかもしれません。けれども、そういうときにも、偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのではないかと、言えるのではないのでしょうか。

4章16節。「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」これが、ねらいの②です

サタンは私たちを信仰から引き離そうとしています。いろんな誘惑で教会から足を遠ざけたり、また、神様に祈る資格がお前にはあるのか？ 愛される資格があるのか？ 罪を犯したのではないのか？ このように私たちの資格を攻めてきます。このように言われたら、「いいえ、違います」とは、なかなか言えません。そして、自分は神様にふさわしくないと我慢させて、信仰から遠ざけようとしています。

たしかに、私たちは弱いものであり、おろかな者、不十分なもの、とても信仰者として呼べないものかもしれませんが、このような者を憐れみ、招いてくださるのが、イエス様です。その恵みにすがりつこうではありませんか。

「大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」

「大胆に」というのは、口語訳聖書では、「はばかりことなく」とあります。「遠慮するな」ということです。このように、「イエス様、わたしを救ってください」とイエス様のもとに行くのが、まことの信仰ではないのでしょうか。イエス様の恵みの御座に近づこうではありませんか。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○神と人を和解させる方、永遠の大祭司キリスト

預言者が「神に代わって人々に近づき、神の御心を伝える者」であるのに対して、祭司は「人々を代表して神に近づき、人間の願いをとりなす者」です。

墮落以来、私たちはみな神の敵と見なされ、破門の身です。そのままでは決して神に愛されることはありません。神は正義の神として、私たちの処刑を要求せざるをえませんから、愛したいのに愛せないのです。しかし、その神と人とを結び、断絶を埋めてくださるのが、永遠の大祭司イエス様です。

○ご自身をささげてくださったイエス様

その方法は、ご自身の生命を「償いのささげ物(イザヤ53:10)」としてささげるといふものでした。まったく罪のない神の子が、負う必要のない責任を負って、私たちに代わって処刑を受ける。それによって神の正義の要求は満たされました。

今や罪人を救いたいと願う神の愛が満ち溢れ、すべての者が赦しと和解に招かれています。この十字架の犠牲は、歴史の中でただ一度与えられた、永遠に有効な、最後の決定的犠牲です。旧約時代には、神殿祭司たちは動物犠牲を日ごとに繰り返していましたが、もう繰り返す必要はないのです。

(ヘブライ書9章を参照)

○とりなし続けてくださるイエス様

主は生きておられ、天において私たちのためにとりなし続けてくださっています。地上に生きる私たちには様々な試練があり、その中で多くの過ちを犯します。また、自分の不信仰や不道徳を責める声が、内からも外からも聞こえてきます。しかし、安心してください。私たちの罪を完全に償ってくださった大祭司が、どこまでも味方です。私たちは、もう神の怒りと呪いに恐怖する必要はありません。

イエス様がぼくらの大祭司になってくださったことの恵みは、お祈りということを考えると一番よく分かるかもしれない。

どうして、「イエスさまの御名によってお祈りします」と言わなければならないんだろう？ それは、大祭司イエスさまのとりなしがなければ、ぼくらのお祈りなんて、神様から聞いてもらえずに無視されるものだからです。墮落した罪人の、ぐちゃぐちゃして情けない声なんて、いと高い神様が聞きたいわけありません。自分は神のために何もしないくせに、自分のためには助けを願う……なんとまあ図々しいやつだ、と怒られても仕方ない。

でもそんな図々しい祈りが、「イエス様の御名によって」祈ることで、神様にも聞いていただける。それが、イエス様がぼくらの大祭司でいてくださるってことです。



テキスト	ヘブライ人への手紙 3章1～6節
子どもカテキズム	問27
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問26 ハイデルベルク教理問答 問31

問27 イエスさまの王としてのお働きは何ですか。

答 私たちの王さまとなってくださることで。

弱い私たちが悪に滅ぼされないように戦い、私たちを従わせ、治め、お守りくださいます。

この王さまこそ真の王さまです。

ですから、私たちは心をこめて従います。

〈王とは羊飼いであること〉

「キリストは御子として神の家を忠実に治められる」とあるとおり、主イエスは私たちの王として、私たちを治め、守ってくださっています。ここでの中心は、主が弱い私たちを守ってくださるということです。イスラエルの王は、羊飼いかと呼ばれ、羊飼いであることが期待されました（エゼキエル34章23、24節）。王の模範とされたダビデ自身、かつては羊飼いで、そのダビデに、神は「牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者とした」と言われました（サム下7章8節）。それは、民を虐げる圧制者でも自分を養う独裁者でもなく、どこまでも民に仕え、民を慈しみ、民のために善政をし羊飼いであることが期待され、求められたということでした。気まぐれな独裁者、自分自身を養う圧制者ではなくて、民を導き、養い、憩わせ、守る羊飼いであるということでした。羊飼いが細心の注意を払ってか弱く小さな一匹一匹の羊を見守り、最大の勇気をもって自分の身を盾にして猛獣の危険から群れを守り、忍耐強く群れを導いて養うように、民を治め、守り、導くことが王には求められました。それは古代オリエント世界の専制君主とは全く異質な王の姿でした。

〈主はわたしの羊飼い〉

そのために遣わされたダビデの子こそ、主イエスです。だから主イエスは、「わたしは良い羊飼い」と言われました（ヨハネ10章11節）。「良い

羊飼い」は、羊のために命を捨て（同11節）、自分の羊をよく知り、それにふさわしい養いをします（同14節）。このように主が私たちの「良い羊飼い」であることを歌っているのが詩編23編で、羊飼いであったダビデ自身が養われ、守られてきた幸が歌われています。そこでダビデは、「主はわたしの羊飼い」と歌い、主ご自身がイスラエルの羊飼いであり、羊飼いが自分の羊を身をもって守るように、主はイスラエルと自分自身を守ってくださるという信仰を歌います。主が羊飼いであるということが、養いと安らぎ、導きと守りとして歌われます。

〈死の陰の谷を行くときも〉

私たちはときとして「死の陰の谷」に迷い込むことがあります。そのような「死の陰の谷」を行くときも、災いを恐れることはありません。なぜなら「あなたがわたしと共にいてくださる」からです。信仰者であっても災いにあい、死の陰の谷を通ります。しかしまさしくそこで神が共にいてくださるり、神の支えのうちに守られています。そしてその神が、私たちを「正しい道」に導いてくださいます。自分を苦しめる者を前にしても、なお揺らぐことのない平安の中で、心安らいでいることができます。この地上での歩みのために、主は戦い、私を治めて守ってくださる、このことが、主が私の王、つまりまことの羊飼いであるということなのです。（三川栄二）

テキスト ヘブライ人への手紙 3章1～6節
子どもカテキズム 問27

〔単元のねらい〕

ここでは、主が私たちの「王」であることについて考えます。王ということで、子供たちがどのようなイメージを抱くかを考え、問いかけながら、それとは違う主イエスについてお話してください。一方では、力強い王です。力強さがなければ、私たちを守ることができません。しかしその力ある王が、私たちの弱さを理解できない方ではなく、むしろそれを受けとめながら、配慮し、かばいつつ、守ってくださるのです。ここでは、イスラエルの王の本来の姿としての「羊飼い」として展開しました。子供たちが抱く孤独や心配、悩みや恐れを、しっかりと受けとめてくださり、その上で守ってくださる、配慮に満ちた真の王、羊飼いとしての主イエスへと、子供たちの思いを向けさせていってください。

「羊飼いとして守ってくださる王さま

今日読んだ聖書には、「キリストは御子として神の家を忠実に治められる」と書いてあります。主イエスは私たちの王様として私たちを治め、守ってくださっているということが、今日のお話です。皆さんは王様ということで、どのようなイメージを持ちますか？ 色々考えることができますが、ここで私たちに約束されていることは、主イエスがは、力強い王様であり、だから弱い私たちを守ってくださるということです。

しかし主が力強い王様として私たちを守ってくださるということ、私たちは実感して生きているでしょうか。主を信じていても、困ったことに出遭い、災いにも遭います。病気にかかったり、苦しいことにも遭います。問題を抱えて、一生懸命に祈りますが、何も答えをもらえず、がっかりすることもあります。このような毎日の中で、主イエスが私たちの王様であり、王として私たちを守ってくださっていると、どうして信じることができるのでしょうか。

聖書に、王様が登場しますが、そこで教えらるる王様は羊飼いと呼ばれ、羊飼いであることが期待されました（エゼキエル34章23、24節）。

イスラエルにおいて王様とは羊飼いでした。その模範とされたのはダビデで、ダビデも羊飼い

でした。羊飼いであったダビデに、神様は「わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者とした」と言って、王様にしたのです（サム下7章8節）。王様が羊飼いであるとは、民を虐げる圧制者ではなく、自分を養う独裁者でもなく、民に仕え、民を慈しみ、民のために善政をしく羊飼いであることが期待されました。ダビデのように善良で賢明な政治を行い、民を愛しむ王様として治めることが求められました。

しかし実際に登場した王様たちは、自分自身を養うばかりで（エゼキエル34章2節）、民を養うことがなく、イスラエルは滅亡して、民は世界に散らされました。「彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食になり、ちりちりになった。わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う」（同5、6節）とあるような、悲惨な状態に苦しんだのです。そこで傷つき、弱り、倒れ伏す民を見て、神はいても立ってもいられなくなり、ついにご自分が自分の羊を探し出して、救い出すことを決意されます。ちりちりになった羊を探し出し、救い出し、養うのです。これがやがて登場することが期待されたダビデの子、真の羊飼いである王様に期待されたことでした。

それは気まぐれな独裁者、自分自身を養う圧制

者ではなくて、民を導き、養い、憩わせ、守る羊飼いであるということでした。羊飼いが細心の注意を払ってか弱く小さな一匹一匹の羊を見守り、また最大の勇気をもって自分の身を盾として猛獣の危険から群れを守り、さらに忍耐強く群れを導いて養うように、イスラエルの王様はそのように民を治め、守り、導くことが求められました。それは古代の専制君主とは全く違う王の姿でした。そのために遣わされたダビデの子こそ主イエスでした。

だから主イエスは、「わたしは良い羊飼い」だと言われました(ヨハネ10章11節)。「良い羊飼い」は、悪い羊飼いと対比されます。悪い羊飼いは、自分自身を養うばかりで、羊を養いません。狼が来ると我先に逃げてしまい、羊を守ろうとはしません。しかし「良い羊飼い」は、羊のために命を捨てます(同11節)。自分の羊をよく知り、それにふさわしい養いをします(同14節)。このように主が私たちの「良い羊飼い」であることを、豊かに歌っているのが、詩編23編です。

この詩編は、羊飼いであったダビデ自身が、この方に養われ、守られた幸いを歌ったものでした。そこでダビデは、「主はわたしの羊飼い」と歌い、主がイスラエルの羊飼いであり、羊飼いが羊を自分の身をもって、盾となって守るように、主はイスラエルと自分自身を守ってくださるという信仰を歌います。ここでは、主が羊飼いであるということが、養いと安らぎ、導きと守りとして歌われています。

私たちはときとして「死の陰の谷」に迷い込むことがあります。「死の陰の谷」と言わざるをえないような真っ暗闇、見通しの利かない、先行き

の见えない中を、手探りでたどることがあります。どうしたらよいのか分からない問題を抱え、いつ終わるのか分からない苦しみを通り、誰も自分を分かってくれないと、心細く淋しさをかみしめるような中を通ることもあります。それが本当に「正しい道」なのか不安に駆られることもあります。大きな病気にかかって体が起き上がらなくなることもありますし、心がまったく打ちのめされて、希望を失うこともあります。そのような死の陰の谷を行くときも、しかし私たちはそこで「災いを恐れない」ということができます。なぜなら「あなたがわたしと共にいてくださる」からです。主を信じる私たちであっても災いにあい、死の陰の谷を通ります。しかしまさしくそこで、「神が共にいてくださる」ことを信じ、神の支えのうちに守られている。そしてその神が、私たちを「正しい道」に導いていってくださるのです。その神が私の羊飼いとして導いてくださるのですから、「わたしは災いを恐れない」と大胆に語ることができるのです。

そこには常に「魂を生き返らせる」憩いがあり、「わたしには何も欠けること」がありません。自分を苦しめる者を前にしても、なお揺らぐことのない平安の中で、心安らいでいることができます。こうして毎日の歩みのために、主は戦い、私を守ってくださる、だからこの方こそ私の王さま、まことの羊飼いです。主イエスは、わたしたちが抱く淋しさや心配、悩みや恐れを、しっかりと受けとめてくださり、その上で守ってくださる、配慮に満ちた羊飼い、だから真の王様なのです

(三川栄二)

[今週の暗唱聖句]

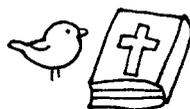
詩編 23編1～3節前半

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴い

魂を生き返らせてくださる。



〈ねらい〉

羊飼いの働きをとおして、良い羊飼いと真の王であるイエス様であることを学ぶ。

〈展開例〉**1. 羊の特徴**

(羊の写真などを用紙して見せながら説明する)

羊はとても弱い動物です。

自分でおいしい草をさがすこともできません。きれいな水がどこにあるのかもわかりません。羊飼いが羊たちをおいしい草や水があるところに連れていってくれないと、自分たちだけで生きることができません。

また羊は、すぐに迷子になってしまいます。オオカミやライオンにおそわれれば、弱いのですぐにやられてしまいます。

羊はとても恐がりです。何か心配なことがあると、横になって安心して眠ることもできません。ハエなどの虫に苦しめられていたり、お腹がすいていたら横になって眠ることをしません。

また、羊はひっくり返ると自分で起き上がることが出来ません。羊飼いがすぐに気がついて起こしてあげないと、羊は死んでしまいます。

毎日、羊のことを心配してお世話をしてくれる羊飼いがいないと羊は生きていけないのです。

2. 良い羊飼いと悪い羊飼い

それでは、良い羊飼いと、悪い羊飼いはどこがちがうのでしょうか。一緒に考えてみましょう。(○と×のカードを用意する)良い羊飼いだと思ったら○のカードを、悪い羊飼いだと思ったら×のカードを上げてね。

- ・羊が病気で苦しんでいても、ほおっておく。
- ・迷子の羊がないか、毎日一匹一匹数えて調べる。

- ・羊を食べたり水を飲んでる間、オオカミに襲われないように、守ってくれている。
- ・オオカミがやってきたら、恐いので羊をおいで逃げる。
- ・オオカミが来たら、オオカミと戦って羊を守る。

3. イエス様は良い羊飼い

イエス様は「わたしは良い羊飼いである」とおっしゃいました。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」のです。

羊とは誰のことでしょう。イエス様を信じる私たちのことです。イエス様は、私たちが困っていることはないか、迷子になっていないかいつも気にかけてくださっています。それだけでなく、私たちの代わりにご自分の命を捨ててくださるほどに、私たちが愛してくださっているのです。

羊飼いであるイエス様の声をしっかり聞いて、従っていきましょう。

4. 羊さがしゲーム

- ①紙に一人ひとりが羊の絵をかく。
- ②羊に名前をつけて絵の下に書く。
- ③その紙を先生が部屋のどこかに隠す。
- ④羊の名前を呼びながら羊をさがす。
(一度に何匹も隠さないで「一匹隠して、さがす⇒見つかる」を繰り返す)



〈ねらい〉

主イエスの働きを知ることで、主イエスへの頼り方がわかること。また、王として私たちを世から集め、また神様から引き離す力から守ってくださることを伝える。

〈展開例〉

1. 「子どもカテキズム」問27を読みましょう。
2. イエス様のお仕事について、勉強してきました。その一つ目と二つ目は、「預言者」と「大祭司」でした。今日は、三つ目、「王」としてのお仕事です。三つもお仕事をして忙しそうにも見えませんが、バラバラのお仕事じゃなくイエス様は同時になさってくださいます。この三つのお仕事を言えば、全体を言い表せることになります。
3. たとえば、みんながある王様のもとにいるとすれば、どんな王様がいいですか。きっとその王様は正しくて優しくして弱い者を守り、悪い敵から守ってくれる王様がいいと思います。
そして、実はイエス様という王様のもとにみんなはいます。イエス様だったら何をしてくれるんだろう？ 王様としてのお仕事を少しだけ聖書から調べてみよう。

①世の中から集めてくださる

イエス様を王様とする人たちを集めてくれます。今、みんなは教会に集まっていますね。王様は、安息日を守りなさいよと十戒で言っていますから、私たちは教会に集まって礼拝や分級をしています。

イザヤ書55章5節を開いてみよう。神様が呼びかけると、神様を知らなかった人たちが神様のもとに集まってきます、ということが書かれています。このようにイエス様は呼びかけて集めてくださいます。私たちがふらふらしていても、イエス様は呼びかけて安息日には教会に集まれ！ といってくださいから集まります。

②集めた民を敵から守り、敵をやっつける。

王様は敵から守ってくれます。コリントー15章25節を開いてみよう。「キリストはすべての敵をご自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。」足の下に置く、というのはやっつける、ということです。地上でイエス様は敵と戦いました。悪魔の誘惑と戦って勝ちました。その戦い方は御言葉を使うことによって戦いました。悪魔は神を愛するふりをして神を愛さないようにさせ、また人を愛さないようにさせて、自分だけを愛するように誘惑しましたが、イエス様はきちんと神を愛し人を愛し続けました。神から私たちを引き離そうとする力に対して、イエス様は戦ってくださいます。

ローマ8章37～39節を開いてみましょう。「……どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」このイエス様が王様として戦ってくださったから、私たちも戦えます。そして、私たちが御言葉に立って神と人を愛するという仕方です。

③守るべき律法を与えてくださった。

イエス様は王様として生き方の基本となる律法を与えてくださいました。イザヤ書33章22節を開いてみましょう。「まことに、主は我らを正しく裁かれる方。主は我らに法を与えられる方。主は我らの王となって、我らを救われる。」法というのは律法で、それは十戒にまどまっています。王様として、私たちにこのように生きるべきだと、示してくださいました。正しい生き方をするために大切なことです。

〈祈り〉

神様、イエス様が王様として私たちを守ってくださいありがとうございます。色んな事が起こっても神様が私たちを守ってくださることを信じさせてください。

〈はじめに〉

今週から数回にわたって、コーヒーブレイクという手法を一部用いて、小学科上級の分級を展開します。

コーヒーブレイクとは、小グループで行う聖書発見学習です。始める前に、次のことを子どもたちと確認してください。

- ①わからない、答えたくないときは、遠慮なくパスしてください。
- ②人によって感じ方が違います。自分が読んで感じたことを言って下さい。
- ③愚かな質問などありません。分からないことは誰でも自由に聞けます。

〈ねらい〉

質問の形式で「真の王」について理解を深めます。観察質問が多いので、初めてCSに来た子どもにも対応できます。

〈展開例〉**○ヨハネによる福音書10章7～9節を読みましよう**

質問① ここでイエス様はご自分を何とおっしゃいましたか？（9節：門）

質問② 門の役目は何ですか？

学校の正門など思い浮かべて自由に言わせる。（身近なことの質問で緊張をほぐします）

質問③ 9節によれば、イエス様を通して入る者はどうなりますか？

質問④ 9節によれば、イエス様を通して入る者は何を見つけますか？

質問⑤ 羊にとって牧草とはどんなものですか？自由に言わせる。

○ヨハネによる福音書10章10～15節を読みましよう

質問⑥ イエス様が来られた理由は何ですか？（10節）

質問⑦ ここでイエス様はご自分を何とおっしゃいましたか？（11節）

質問⑧ 11節によると、良い羊飼いは羊のために何を捨てますか？

質問⑨ 狼が来たら、雇い人はどうするでしょうか？（12節）

質問⑩ 狼が来たら、良い羊飼いはどうするでしょうか？（15節）

○エゼキエル書34章23～24節を読みましよう

質問⑪ 23節によれば、神様は何のためにダビデをお選びになりましたか？

ダビデ王は牧者として起こされました。神様がお決めになった王様の仕事は民を牧すること（牧者）です。

良い羊飼いであるイエス様は、私たちの牧者、すなわち王です。詩編23編を読みましよう。そして、感謝の祈りをささげましよう。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○まことの王キリスト

イスラエルでは、神から委ねられた民を、神に代わって献身的に愛し守る、よき羊飼いの像が、王の理想とされました。イエス様はダビデの子孫として生まれてこられたまことの王です。この方はすべての人に仕える者(マルコ10:45)であり、命を捨てて羊を危険から守ってくださる羊飼いです(ヨハネ10:11)。

○私たちをご自身に従わせ、治め、守って、導いてくださるイエス様

イエス様は教会のかしらとして、教会に連なる神の民を霊的に支配されます。私たちは生まれながら神に対して反抗的であり、放っておけば必ず間違った方向に進んでいく愚かな羊です。しかしよき羊飼いなる王イエスは、そんな私たちを力強く「従わせ」、正しい方向に導き返し、ご自分のもとの最善を尽くして「治め」、絶望や不安や恐怖から「守り」、救いの完成まで確実に「導いて」くださいます。

○ご自身と私たちとのあらゆる敵を抑えて征服してくださる、力強い王イエス様

王の王であるイエス様は、すべての被造世界を治められ、神に敵対する諸勢力を抑えておられます。私たちは、サタンの攻撃や死や病に日々おびやかされ、時に戦いの中で傷つくこともあります

が、もはや決定的に破滅に至ることはありません。王の王イエスが、すでに勝利をおさめておられます。

そして終わりの時に再び来られ、すべての敵をけちらし、罪も悲惨もない神の国を完成されます。信仰者は、この王の王の支配と権威を認め、また彼に従うことで、勇気をもってキリストの敵に立ち向かい、神の国を広げていくことができるのです。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」(マタイ28:19)

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。……しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」(ローマ書8:35,37)

私たちには、守り導いてくださる王様が必要ですから言われても、ピンとこないかな？それは、自分のまわりに危険がいっぱいだってことを、君が知らないだけです。

死は、すぐそばにあります。今は健康かもしれない、でも明日、病に倒れて、自分の弱さを味わうかもしれない。悪への誘惑があります。神から離れさせようとするささやきがあります。思いもかけない事件で、もうどうしたらいいか分からなくなるかもしれない。

私たちは、自分で自分を守り導けるほど強くはない。だから王様が必要です。イエス様という王様が勇気をくださるから、私たちも「死の陰の谷」を行くことができます。



テキスト ルカによる福音書 18章9～14節
子どもカテキズム 問28

問28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、
自分の力で救いを手に入れることはできません。
救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

〈カテキズムの黙想から〉

・子どもカテキズムは、問28から聖霊なる神についての教理を取り扱います。確かに、聖霊なる神は、御父や御子のような仕方で明瞭に解説することはできません。そこで、聖霊は、分かりにくいとの声を聞くこともあります。しかし、むしろ、このお方こそ、私どもの救いと聖化において働いて、実りを結ばせてくださる、言わばもっとも近いお方です。

・子どもカテキズムは、聖化論を取り扱う中で、問34において教会論を取り上げます。そもそも、ウ小教理にこのような教会論はありません。大教理では、キリスト論の中で扱います。教会の生活、信仰生活とは、聖霊の恵み、その実りに生かされることに他ならず、それは、教会と離れたところではあり得ないことを、強調しているわけです。

・問28は、ウェストミンスター信仰基準の用語では、「有効召命」にかかわる問いです。「恵みのみ・信仰のみ」による救いの教えは、教会の改革者たちが改革の内容原理として主張したことで、あまりにも有名です。ただ、救っていただく以外に道のない、罪人である私どもに、どれほど幸いな福音でしょうか。他の宗教と比較するとき、まさに唯一の救いであることが鮮明になると思います。

・父なる神は、聖霊によって、「無条件」に信仰を与えてくださいます。それは、「自発的」、つまり「自由の愛」に基づいて喜んでなされます。しかも、「無償」で提供されます。

〈テキストの黙想から〉

ファリサイとは、「分離」を意味する言葉と言

われています。律法に忠実に生きていない人々と分離して生きることによって、自分たちの義をいよいよ誇示しようとしているわけです。自他共に、ユダヤ社会の良心と認めています。その対極にいるのが、徴税人です。

したがって、ファリサイ派の人は、胸をはって神殿に詣で、顔と手を挙げ、祈ります。ついに神からも義と認められているとの確信をもって、意気揚々と帰って行きます。

ところが、徴税人は、顔を挙げることもできません。自分を「罪人のわたし」と理解し、悲しみ、神の憐れみにすがって祈るのみです。おそらく、赦された確信を得ることもできず、職場に戻って行ったのではないでしょう。

ファリサイ派の人は、ここで何をしていますでしょうか。祈りではありません。言わば神を自分の義を証明する道具であるかのように利用しているのです。

私どもは、恵みにすがる以外に生きるすべがありません。神が顧みられるのは、この罪人です。事実、彼らの贖い主として、主イエスが十字架に赴かれました。今や、信じる者に、聖霊は注がれ、救いの確信へと招かれています。

〈子どもたちの黙想から〉

生きる術を持たない子どもたちこそ、福音の幸いを知ることができます。なぜなら、よい子にしていなければ、成績が良くなければ……、〇〇してもらえない……と、不安を覚えやすいからです。

聖霊の家である教会こそ、子らを、福音によって慰め、育てる使命があります。（相馬伸郎）

テキスト ルカによる福音書 18章8～14節
子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

宗教改革(教会改革)の形式原理は、「聖書のみ」。その内容原理は、「恵みのみ・信仰のみ」と言われます。聖書を正しく理解する鍵になるのが、聖書の証しする恵みの神との出会いです。そもそも、私どもの教会は、イエス・キリストの「福音」を理解(再発見)したとき成り立ちました。恵みのみによる救いは、私どもの救いの信仰のまさに心臓です。この福音の喜びこそ、大人と子どもの別なく、教会生活の原動力です。これなしに、教会の健やかで力強い形成は、望むべくもありません。この譬え話に聴き、福音の神を仰ぎ見て、心からの感謝と賛美をささげましょう。(小学中・上級以上を対象として説教展開例を執筆した)。

神さまの恵みによって救われる

皆さんは、動物は好きですか。「ちょっと苦手かも。怖いな」と思ってお友だちも、赤ちゃんの動物だったら、どうですか。きっと、かわいいなど思うでしょう。なぜ、赤ちゃんって、あんなにかわいいのでしょうか。

昔、こんなお話を聞いたことがあります。赤ちゃんは、自分で食べることも飲むこともできません。着ることもお風呂に入ることもできません。でも、赤ちゃんがかわいいので、お母さんやお父さんは、お世話をしたくなってしまいます。そのために、赤ちゃんは、かわいいものとしてつくられたのだということです。

皆さんの中には、「あ～あ、赤ちゃんに戻りたいな。笑っても泣いても、何でも許されて、楽だったのになあ……。今は、自分でさっさとやりなさい、宿題しなさい、いろいろ、叱られる……。つらいなあ」と思う人もいます。

さて、今日のイエスさまの譬え話には、二人の立派な大人が登場します。一人は、ファリサイ派の人、もう一人は、徴税人です。

ファリサイ派の人たちは、皆から、ほめられていました。「あの人たちは、一週間に二度も断食している。お給料の十分の一を献金している。時間さへあれば、聖書を読み、集まって学んでいる。

エルサレムの神殿にもしょっちゅう詣でてお祈りしている。偉いなあ。すごいねえ。」

実は、自分でも、そう思っているのです。人と比較しては、鼻を高くしていました。「エヘン、私たちは、他のユダヤ人とは違う。一から十までぜんぶ神さまの御言葉をきちんと守っている。他の人なんかとは、比べられないはずだ。」もう、自信満々の顔です。

そればかりではありません。神さまに対しても、自信満々なのです。自分たちほど、神さまに喜ばれ、認められている人間はいないと考えているのです。

それに対して、徴税人はどうでしょうか。彼は、周りのみんなから、「ユダヤ人の屑。異邦人以下。神からもっとも遠い人間！」このように軽蔑されていました。お金は持っていました。けれども、不正に巻き上げたものが多いのです。嫌われ者なのです。

そのような二人が、ちょうど、エルサレムの神殿に詣でます。ファリサイ派の人は心の中で、こう言いました。「神様、わたしは他の人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、徴税人のような者でもないことを感謝します。」イエスさまは、人の心の中の祈りを聞

いておられます。

皆さん、こんなお祈りってあるでしょうか。この人は、「感謝します」と言っていますが、それは結局、神さまに自慢しているだけです。この人の言う感謝は、神さまに助けていただいたことに対する感謝ではありません。自分の力で頑張っ、やり遂げたのだと言っているだけです。しかも、他の人たちと比べて、自分の方がこんなにすごいのですよと、神さまに向かって、認めさせようとしているのです。

それに対して、徴税人は、こう祈りました。「神さま。罪人のわたしを憐れんでください。」ぼくたち私たちが十戒の後、唱える「主よ。憐れんでください」と同じ言葉です。この人は、神さまに憐れんで頂かなければ、お祈りすることもできないと考えているのです。それほど、神さまの前で、自分が罪深い生き方をしているということ、認めているのです。

さて、イエスさまはおっしゃいました。「言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」

皆さんは、不思議に思いませんか。この徴税人は、誰がどう見ても、悪い仕事をしているはず。それなのに、ただ、憐れんでくださいとお祈りしただけで、神さまが義とされたというのです。普通だったら、まず、そんな仕事をやめて、行いを正し、たといファリサイ派の人までとはいかなくとも、御言葉を守った時に初めて「義と認め」、つまり、赦されて、神さまに受け入れられていると言うべきではないでしょうか。

いったい、イエスさまは、今朝、ぼくたち私たちに、この譬え話を通して、何を伝えてくださるのでしょうか。それは、神さまがぼくたち私たちに、神さまの子どもとしてくださるのは、ぼくたち私たちが、お行儀がよい子どもだからでも、かわいい子どもだからでも、頭がよい子どもだからでも、素直な子どもだからでもない、ということです。ただ、神さまの前に、「ぼくは、心が弱く、

自分勝手に、わがままな子どもです。神さまがいっしょにいてくださらないと生きていけません」と言う人こそ、神さまの子どもとされるということです。天のお父さまは、ありのままのぼくたち私たちを愛し、受け入れてくださっています。自分のことを、「あの子よりは、少しはマシだよ、かなり勝っているよ……」そんな風に比べる必要はありません。比べてはいけません。なぜなら、神さまは、理由なんかつかないで、誰に強いられてでもなく、ただあなたのことを愛しておられるからです。

最後に、どうして、そのようなことがはっきりと分かるのでしょうか。それは、この譬え話をしてくださったイエスさまが、ぼくたち私たちの身代わりに神さまからの罪への刑罰を受けてくださったからです。

徴税人が義と認められたのは、その仕事をやめたからではありません。ただ「憐れんでください」と祈り願ったからです。そして、イエスさまが、この徴税人を憐れんで、この罪深い人のために十字架につかれたからです。

きっと、この徴税人は、自分が義とされたことを知らないまま、自分の家に帰って行ったと思います。でも、ぼくたち私たちは、イエスさまが十字架について、よみがえってくださったことを知っています。だから、顔を上に挙げることができます。心から、感謝しましょう。

最後の最後です。ぼくたち私たちのまわりに、この徴税人のようなお友だちはいませんか。どうぞ、伝えてください。「もう、心配ないよ。イエスさまのおかげで、イエスさまを信じるだけで、神さまの子どもとされるんだよ」と。きっと、その人も、「イエスさまを信じよう、御言葉を喜び、守って生きよう」と新しい人にされてしまうはず。聖霊なる神さまは、今日も、熱心に、世界中で、救いのお働きをしておられるからです。だから、ここに教会があって、ぼくたち私たちがいるのです。
(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

ローマの信徒への手紙 3章24節

ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、
神の恵みにより無償で義とされるのです。

〈ねらい〉

救いはただ恵みによって与えられることを感謝する。

〈展開例〉**1. 「恵み」ってどういう意味？**

今日のお話で「恵み」という言葉を聞きましたね。

「恵み」ってどういう意味か、考えてみましょう。

お買い物をするときにレジの人に何を払いますか。お金ですね。お金と品物を交換するのは、恵みかな？恵みではありません。

じゃあ、お友達とおもちゃを取り換えっこするのはどうでしょうか。これも恵みとは言いません。

恵みとは、交換するものが何もないのに、プレゼントとしてもらえるものことです。何もよいことをしていないのに、与えられるものことです。

2. 一番大きな「恵み」

恵みによっていただくものに、どんなものがあるでしょう。

朝起きて、まず太陽の光が私たちに照らしてくれますね。小鳥の声も聞こえます。空気や水、食べ物、これらはみんな神様が恵みとして私たちにくださったものです。

でも、もっとうれしい恵みが私たちに与えられています。それは、天国行きの切符です。

電車に乗るときは、お金を出して切符を買いますね。でも、天国行きの電車の切符は、お金を払って買うではありません。この切符がほしい人は誰でも、イエス様のところに行けばもらえるのです。

イエス様は、だれでも天国に行きたいと思う人は、わたしのもとに来なさいとおっしゃいました。

イエス様を信じる人は、プレゼントとして天国行きの切符をもらえるのです。

私たちがそれをいただくために、イエス様は私たちに代わって十字架にかかってくださいました。

イエス様の十字架によって、恵みという電車に乗せられ、天国に連れて行っていただけるのです。イエス様、ありがとうございます。

3. 「ふくいんのきしゃ」（ふくいんこどもさんびか）を歌う。**4. ハンモックで遊ぼう**

神様の大きな恵みは私たちの体を大きく包むハンモックのようです。ゆらゆらゆられてその心地よさを楽しみましょう。

用意するもの：タオルケット

先生がタオルケットのはじを持って、子どもをタオルケットの上に乗せます。タオルケットを左右にゆらして遊びます。先生は、タオルケットのはじをしっかり持つこと。落とさないように気をつけましょう。子どもにもしっかりつかまっけてもらいましょう。



〈ねらい〉

徴税人の気持ちになって考えてみる。そして、罪の赦しは自分の力ではなく神様の恵みによって与えられることを学ぶ

〈展開例〉

1. 「子どもカテキズム」問28を読みましよう。

2. 今日の聖書のお話しに出てきた人を思い出しましよう。

ファリサイ派の人はお祈りしていました。きっとお祈りを頻繁にしていたと思います。みんなはどれくらいお祈りしていますか。よく祈ることはいいことです。けれども、このファリサイ派の人はどんな祈りをしたでしょうか。「神様、助けてください」というお祈りではありません。「自分は神様にこれだけ従っていい、悪いことはしていません」というお祈りです。これは神様は喜びません。

みんなはどんなこういうお祈りをしますか。祈りじゃなくても、「わたしは、あの子みたい

に悪くないもん」と思うことはありませんか？

これも神様は喜ばれません。

イエス様が教えてくださったのは、ここで徴税人がしたようなお祈りが神様に受け入れられるということです。13節を読んでみましょう。

徴税人はどんな気持ちで祈ったでしょう。徴税人はどんなことをしたんだと思いますか。

先ほどのファリサイ派の人のお祈りと違うところを考えてみましょう。「憐れんでください」とあります。簡単に言えば、「赦してください」とか「助けてください」という意味です。

ぜひ徴税人と同じ祈りをしてみてください。似たお祈りをしたことはありますか。祈ったら、どんな気持ちになりますか。

徴税人がこのように祈れたのはなぜでしょうか。何を大切にしていたのでしょうか。

私たちは神様に助けてもらわないと、神様の望むことができないし、神様を信じることもで

きません。聖霊が私たちに働くときに、神様の望むことができはじめるし、神様を信じることが出来ます。だから、聖霊の働きを求めることが大切です。

この気持ちを家でも学校でも大切にしてくださいね。そして、お友達に聞かれたら答えましよう。

3. イエス様が私たちの罪を代わりに背負ってくださいましたね。この罪の赦しが私たちに与えられるためには、聖霊が私たちに働かないと与えられません。聖霊の働きを求めないで、自分で手に入れようとしてもだめなんです。これは手に入れるものではなくて、神様が与えてくれるものだからです。

例えばジュースを手に入れるとき、そのためにお金を払いますね。120円くらいなら、出せるかもしれません。

けれども、私たちはイエス様によって罪を赦してもらったり、祝福をあたえられたりするのにお金を払ったりするのでしょうか。献金は、そのためのものではありませんね。120円じゃだめかもしれませんが、100万円くらいならいいのでしょうか。いくらならいいのでしょうか。いくらでもだめです、私たちが何をしてもそれが代金になるわけではありません。

私たちは、神様の前に罪人です。自分が罪人であることを認めることが必要です。そして、それは、聖霊のお働きによるのです。私たちは聖霊によって罪の赦しを与えられます。自分の力では無理なんです。ですから、ただ、神様にたよって、罪を赦してもらいます。それで、私たちがすることは感謝です。「神様、罪を赦してくれてありがとう」と言って、神様の喜ぶことをもっともっていきましよう。

〈祈り〉

私たちが、ただ聖霊によって神様に救われることを信じる事が出来ますように。

〈ねらい〉

質問形式で理解を深めます。

〈展開例〉

○ルカによる福音書18章9～14節を読みましよう。

- 質問① このお話の登場人物は何人ですか？
 質問② 誰と誰ですか？
 質問③ この人たちは何をするために神殿に上ったのですか？
 質問④ ファリサイ派の人は何と祈りましたか？
 質問⑤ ファリサイ派の人は、自分はどんな人間だと思っていますか？
 質問⑥ 徴税人は何と祈りましたか？
 質問⑦ 徴税人はなぜ目を上げず、胸を打ちながら祈ったのでしょうか？
 質問⑧ 徴税人は自分はどんな人間だと思っていますか？
 質問⑨ 神様が義とされたのはどちらでしたか？
 質問⑩ なぜ、神様は徴税人を義とされたのでしょうか？
 質問⑪ ファリサイ派の人が義とされなかったのは、なぜだと思いますか？
 質問⑫ 私たち自身は高ぶることがありますか？
 質問⑬ 私たちはどうすれば神様に高めていただけますか？

ファリサイ派、徴税人については、聖書の後ろにある用語解説をみんなで調べるとよいでしょう。子どもたちが自分で調べながら読めるようになったら嬉しいですね！



〈コラム〉

坂戸教会の子どもクリスマス(2011年の実践から)

2011年の子どもクリスマスは、協力宣教師キム・キョンヒ先生の母国、韓国でメジャーな行事「タラントの市場」を実践してみました。

子どもたちは、一年間、「タラント」と呼ばれるチケットを集めます。このタラントは、CS礼拝出席一回につき5タラント、聖書を読みお祈りをしたら一日につき1タラント、お友達を連れてきたら10タラント、礼拝後のランチのお手伝いをしたら3タラント、お誕生月に10タラントなど、いろいろな方法で集めることができます。一月からの一年間に集めたタラントを、クリスマスに使うことができます。

教会員や求道者の協力を得て、12月第三主日の公同礼拝の後にタラントの市場を開きました。献品された品物(子どもたちが喜ぶものに限定!)に値段を付けて(ヘアアクセサリーひとつ3タラントなど)、タラントで買い物をします。また、射的や輪投げ、お菓子釣りなどを用意し、これも一回何タラントと決めて遊びます。韓国海苔巻きやおでんなども用意し、子どもは無料、大人は200円くらいで買ってもらいます。近所の子どもや、教会員のお孫さんもたくさん遊びに来てくれました。

当日は礼拝堂でペープサートを用いて短くお話をし、クリスマスの賛美歌を歌ったあとに買い物袋を配ってよいよ市場を開きました。市場は大にぎわいでした。中古の電子辞書やipodなども並び、中学生に人気でした。一年間の神様のお守りと、子どもたちのがんばりを覚えつつ、楽しいひとときとなりました。

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

わたしは今日のメッセージを聞いて、このファリサイ派の人のようにはなりたくない、と思います。

「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人間」(ルカ18:9)

ぼくは、そういう人間じゃないって、そういう人間にはなりたくないって、わたしは思います。

でも、自分の心の中をのぞいてみると、どうもぼくも、このファリサイ派の人と同じ類の人間のようなのです。

ぼくの家の近くの大きな道路には、毎日毎日あきもせず、大きな音を出して走っていくバイクの騒音が響きます。暴走族でしょうか。アホだな……って思ってしまいます。事故して死んだらいいのに……、だなんて、絶対に思ってはいけないことまで心に浮かぶこともあります。

新聞を見ると「政治家がアホだ、ちゃんと働け」と、みんな文句言っています。ぼくも同じように、偉そうに言います。それから今は特に、大人たちは「役人が悪い、官僚のせいで国が悪くなった」って騒いでいます。ぼくも同じように、偉そうにそう言います。

でも、時々思います。「文句ばかり言ってるけど、あなたたちもちゃんと働きなさいよ。日本

が腐ったのは、あなたたちのせいでもあるでしょうに……。あなたたちもお役人になっていたとしたら、きっと同じことしてたでしょうに……。」

そして、さらに思います。「……あ、ぼくも同じだな。ぼくもちゃんと働いてないし、きっと同じことしてしまうだろうな。」

そうやって考えると、自分は正しい人間だとうぬぼれて、このファリサイ派の人のことを見下すこともできません。

わたしという人間は、小さく、みじめだなどと思います。神様に拾っていただく値打ちなど、かけらもない。

でもそんな人間が、イエス様のおかげで、神に見捨てられるどころか、拾いあげられ、宝として大切にさせていただいて、よいものとして扱われます。それにふさわしく、磨いてもいただけます。

これが、ただ神の恵みによって救われるということなのです。

この恵みは、ほしいと願う人には誰にでも与えられます。

暴走族にも、悪い政治家にもお役人にも、このファリサイ派の人にも……。彼らが本当に、自分のみじめさに気づいて、神様に救いを求めるなら、神はそれを拒むことなどありません。

もし彼らが拒まれるとすれば、わたしたちだって、絶対に救われることなどないのです。



テキスト	ルカによる福音書 5章1～11節
子どもカテキズム	問29
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問29～31

問29 神さまの恵みとは何ですか。

答 神さまが、一方的に、愛をもって、私たちが救いのうちに選んでくださったことです。

私たちは、聖霊のお働きによって、

自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じることができました。

ですから、私たちは、心をこめて神さまを賛美します。

○子どもカテキズム問29に告白される教理は、信仰のいかなる論理を内包するか。その論理を物語るため、聖書箇所はどこに注目して黙想を深めるべきか。待降節第一主日での説教として子どもにアピールできるポイントはありますか。

〈主題教理が内包する信仰の論理〉

- 子どもカテキズム問29は、キリストの救いを私たちに得させる「神の恵み(28)」について、その本質を問いかけ、「一方的な(無償の)愛」による「選び」と告白する。また、恵みによる救いの実現は「聖霊の働き」の下での「罪人の悔い改め」と「主イエスへの信仰」という過程を経ることを表明する。さらに、救いの恵みへの応答として「心からの神賛美」を奨励する。ここに奨励され表明され告白された神の恵みは、もっぱら聖霊による「キリストとの結合(30)」という神秘である、との告白につながる。
- 子どもカテキズム問28～30は、ウ小教理29～31のパラフレーズである。聖霊なる神だけが、キリストの贖いを有効に適用することが可能である。救われるべき罪人が有効に召命される出来事は、罪人側のなにものにも依拠しない。

〈信仰の論理を物語るための聖書箇所〉

- ルカ福音書5章1～11節は、マルコ福音書1章16～20節の「漁師を弟子にする」記事を前提に、ルカが独自伝承を加筆した箇所である。マルコは、イエスのお召しに漁師たちが「すぐに」(マルコ1:18,20)従った事実を伝え、その後にはシ

モン(マルコ1:31)を記す。ルカは、シモンの姑のいやし(ルカ4:39)の後に、漁師たちがイエスのお召しに「すべてを捨てて」(ルカ5:11)従った事実を伝える。つまり、「すぐに」従った漁師たちが、「すべてを捨てて」従う弟子となるまでには、シモンの姑のいやしという出来事の前、ある一定の時間が必要だったことを物語る。シモンを選んで召した主イエスの言行録は、選ばれた罪人を有効に召命する聖霊の言行録として、今の私たちにもあてはまる神の恵みの物語となる。

- 「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」(ルカ5:4)と命令なさるイエスに対して、「先生、私たちは夜通し苦勞しましたが何もとれませんでした」(ルカ5:5)と返答するシモン。彼はイエスの「御言葉の権威」(ルカ4:32,36)を認めてはいたが、「被造世界に対する権威」を認めていなかった。彼を沖へ連れ出し、大漁の奇跡を体験させたもう主イエスは、シモンから「主よ、私から離れてください、私は罪深い者なのです」(ルカ5:8)との告白を引き出した。間髪を入れず語られる主イエスのお召し「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」(ルカ5:10)は、選ばれた罪人を有効に召命する御言葉となった(ルカ5:11)。私たちが自分の罪と不信仰を認め、悔い改めて服従するようになるのも、ただ主イエスの奇跡の御業と召命の御言葉、すなわち神の恵みによる。(二宮 創)

テキスト ルカによる福音書 5章1～11節
子どもカテキズム 問29

〔単元のねらい〕

子どもカテキズム問29は、聖霊だけがキリストの贖いの恵みを有効に適用することができる、との信仰を告白する。すなわち、救われるべき罪人が有効に召命される出来事は、罪人の側の何ものにも依拠しない、との真理を表明する。ここに表明され告白される信仰の論理を、主イエスが漁師シモンを選び、時間と奇跡をかけて彼から罪の告白を引き出し、召命の言葉によって彼を弟子となしたもう出来事として物語る。それは救われるべき子供たちの物語となる。

私は罪深い者です

今日(12月2日)から数えて四回目の日曜日(12月23日)までの三週間は、教会の暦で「アドベント」と呼ばれます。「主が来てくださる」「神の子がお生まれになる」「キリストの時代が始まる」「神の真の光が人の世の闇に輝き出る」この救いの日を前にして心の備えをする期間が「アドベント」です。先輩たちがしてきたことはお祈り、悔い改めと断食を伴うお祈りです。この祈りの形は、旧約聖書の昔から、救い主が来られるという預言を信じたユダヤの人々が子々孫々と受け継いできた礼拝の形です。

アドベントの第一の日曜日のために選ばれた聖書の箇所は、ルカによる福音書5章1～11節にある御言葉です。「イエスさまが来た」「神の子と呼ぶにふさわしい方が現われた」「この方がメシア(キリスト)なら新しい時代の始まりだ」「昼間でも闇の夜をゆくような悲惨な私たちに神の国の栄光を見させてくださるのはこの方かもしれない」。そんな期待が寄せられ始めた頃に、四人の漁師たちがイエスさまによって選ばれ、召し出されました。すぐに網と舟を置いて従ったシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ。彼らがすべてを捨てて主イエスの弟子になるまでには、しばらくの準備の期間が必要でした。

イエスさまと初めて出会った時のことを、漁師のシモンは忘れることができません。仕事場であるガリラヤの湖、そこに兄弟アンデレと舟を出し

て、網を打っていた時のことです。突然呼びかける声が出たのです。「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」(マルコ1:17)。その声は、天から響きわたる雷鳴のようであり、湖面を渡ってくる風の音のようでもありました。しかしそれは確かに人の声でした。その主(ぬし)こそイエスさまだったのです。その御言葉は、まるで魚を一網打尽にとらえる大網のようでした。シモンとアンデレは自分が魚になったような気がしたのです。イエスという漁師にすなだられた気持ちになったのです。もう逃げられない。舟を岸に上げて、とにかくそこに網を置いて、イエスさまの後についてゆきました。漁師仲間のヤコブとヨハネも、同じように、イエスさまにすなだられたのです。

イエスさまが真っ先に向かわれたのはユダヤ教会堂の安息日礼拝でした。ピーンと張り詰めた緊張感の中で、イエスさまは聖書を朗読して説教なさり、病魔にとりつかれた人を御言葉ひとつでいやされたのです。礼拝が終わるとすぐ、イエスさまはシモンの家へ向かわれ、熱病で臥せていた姑をいやされました(マルコ1:31、ルカ4:39)。その日から、シモンの家がイエスさまの宿となりました。大勢の病人が運び込まれる町の診療所、そこで救急救命士のように働かれるイエスさまを、四人の漁師たちとシモンの妻と姑もお手伝いしたのです。

イエスさまのお働きは、礼拝奉仕や病人治療だけではなく。しばしば湖に出かけて、人々を神の国へ招かれました。ある日のこと、あまりに大勢の人が近寄って来たので、イエスさまはどんだん水辺へと後ずさり、とうとう足が水につかるほどになります。近くには見慣れた舟が二艘つないであって、四人の漁師たちが無言で網を洗っています。彼らの暗い表情から察するに、昨夜は不漁だったようです。そこでイエスさまはシモンに声をかけ、彼の舟に乗って岸边から少し漕ぎ出し、舟の上から人々に、神の国の教えを語り始められます。シモンは舟に揺られながら、イエスさまのお話に耳を傾けます。安息日礼拝でなさる力強い説教とは違って、湖に吹き降ろす穏やかな風に吹かれながら、岸边から丘の上までびっしり座っている群衆の一人ひとりに届くようゆったり、朗々と語られる説教は、まるで歌をうたっておられるような美しい響きです。その御声を聞いているだけで、夜通し働いた体から疲れと熱りが抜けてゆきます。何度網を打っても魚がかからず、その度に仲間をなじったり、自分の不運を嘆いたり、天に拳を振り上げたり。そんな茨のようにささくれ立った心から、怒りと焦りが去ってゆきます。イエスさまとご一緒するだけで、仕事場しながら、エルサレム神殿にいるような、厳かな気持ちになるのです。まるで神さまによっていやされ、赦され、養われているような、この上なく幸せな思いに満たされるのです。イエスさまは神の言葉そのものだと、シモンは感じました。

どれほど時が経ったのか。舟上からの説教を終えたイエスさまは、シモンに話しかけます。「さあ沖に漕ぎ出せ、網を降ろせ、漁をせよ」。その御言葉に対し、プロの漁師である自分が一晩中網を打っても駄目だったのに、今さら舟を出して何になるだろう。そんな思いがシモンの心をよぎりました。イエスさまの言葉は、確かに人の心に響く神の言葉だと思う。しかし湖の魚に届くとは思えない。しかしどうしても抗えない御言葉の力に

圧倒されて、シモンと三人は舟を出すのです。そして網を降ろすのです。するとどうでしょう。それまで経験したことがないほどの大漁に恵まれ、二艘の舟は沈みそうになるのです。

その時、シモンは気付きました。天地創造の初め、「光あれ」と仰せになった造り主なる神の御言葉が、「光あり」という事実を造り出したように、今ここで「網を打て」とお命じになるイエスさまの御言葉は、人間業ではない、神業としか思えない大漁をもたらした。イエスさまの御言葉は「アーメン！本当にその通り！」神の御言葉である。その言葉を語られるイエスさまこそ「アーメン！本当にその通り！」造り主なる神と同じ方である。主が来られたのに、私は今まで気付かなかった。神の子と呼ぶにふさわしい方が現われたのに、私はひれ伏すこともしなかった。シモンは恐ろしくなると、舟の上でイエスさまの足元にひれ伏し、祈りの言葉をささげます。「主よ！造り主なる神と同じ方よ！私から離れてください。私は罪深い者なのです。」

これがシモンの悔い改めの祈りです。神に背を向けてきた自分を悲しみ、身も心も神の前に向き直ろうとする祈りです。自分のあまりの罪深さに気付いて恐れを抱き、思わず「私から離れてください」と口走ったのです。離れてほしいからではなく、離れないでいたいからこそ、シモンの悔い改めは深まり、うそのない祈りとなったのです。イエスさま御自身が、シモンの悔い改めの祈りを引き出されました。彼を召し出すためです。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。アーメン！本当にその通り！この日から、シモンはすべてを捨てて、イエスさまの弟子となりました。

この物語は、アドベントを迎えた私たちの物語です。救われるべき罪人が、主イエスに結ばれるために、悔い改めの祈りを引き出される。その祈りを引き出すことができるのは、ただキリストの霊、すなわち聖霊だけです。 (二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 8章30節

神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、
義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

〈ねらい〉

神様は、決して失敗することのない腕の良い漁師です。救おうと思われる者を、力強い御手によって確かな救いの網へと導かれます。

〈展開例〉**1. 魚を捕るのが上手なのはどっち？**

イエス様のお弟子さんだったシモンは、どんなお仕事をしていましたか？

漁師という、魚を捕るお仕事でしたね。だからシモンは、魚についてよく知っていました。たとえば、魚の名前や、何時頃に網をしかけたら一番たくさん魚が捕れるのか、湖のどのあたりに一番魚が多くいるのか、などです。

そんなシモンに、あるときイエス様が言いました。「さあ、網をおろしてお魚を捕りなさい」シモンは「え〜っ」と思いました。だって、シモンはこの日、前の晩からずっとお魚を捕っていたのに、何も魚が捕れなかったからです。

シモンは思いました。「こんな昼間に魚なんか捕れるはずがないのに。イエス様は魚のことはあんまり知らないんだな〜。でもまあ、イエス様の言われることだからやってみるか」

さて、イエス様の言われるとおりにシモンが網をおろすと、どうなりましたか？

たくさんの魚が網いっぱいにかかっていました。魚がいっぱいで、網が破れそうになりました。(絵本があれば絵を一緒に見る)

びっくりしたシモンは、イエス様の前にひれ伏しました。「イエス様、私のそばから離れてくだ

さい。私はイエス様のそばにいられるような者ではありません」

魚のことならイエス様よりよく知っていると思っていた自分が、はずかしくなりました。イエス様が本当の神様であることが、はっきりとわかったのです。

2. 人間をとる漁師

イエス様はどうして魚をたくさん捕ることができたのでしょうか？ それは、イエス様は魚を造られた神様だからです。

イエス様が捕ろうとして捕れない魚はありません。人間を罪から救ってくださる時も同じです。イエス様が救おうと決められたら、もうその人はイエス様から逃げることはできません。イエス様は魚だけでなく、人間を捕る最高の漁師だからです。

でも、その人を無理やり教会に連れてきたり、いやいやイエス様を信じさせるようなことはなさいません。イエス様がその人をやさしく導いてくださるので、イエス様によって選ばれた人は、イエス様が大好きになってしまうのです。

3. アドベントカレンダーを作る

次ページの絵をコピーする。

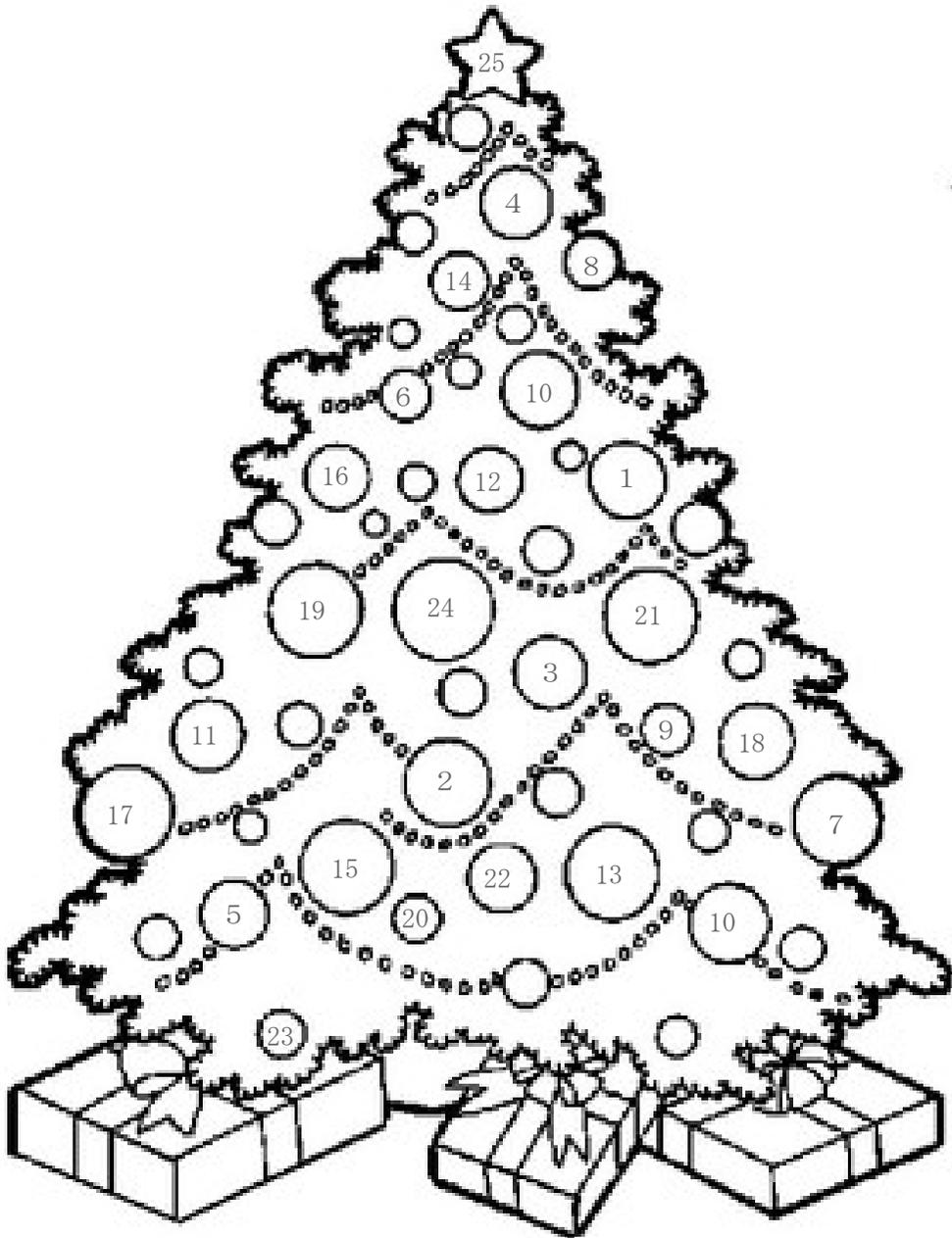
ツリーの緑色の部分と番号の書いていない飾りの○に色をぬる。

ツリーの下のパレートの色もぬる。

毎日、番号順にツリーの飾りに色をぬっていく。



アドベントカレンダー



〈ねらい〉

神様が私たちを選んでくださったこと。また、神様を信じ、従うことができるのは聖霊の働きによることを教える。

〈展開例〉

1. 「子どもカテキズム」問29を一緒に読みましょう。

2. 選び

「神さまが、一方的に、愛をもって、私たちを救いのうちに選んでくださったことです」とありますね。神さまは何をしてくださいましたか。私たちを選んでくださいました。何に選んでくださったんですか。救いのうちに選んでくださいました。

お弟子さんたちがイエス様についていったお話を聞きました。イエス様は何と言いましたか。「わたしについて来なさい」です。漁師さんたちはほかにもいたはずですが。どちらがどちらを選んだでしょうか。イエス様がお弟子さんたちを選びました。これは私たちも同じです。

選ばれたのは私たちが良いものを持っているからではありません。不思議なことですが、神様がただ愛によって、選んでくださいました。だから、私たち選ばれたこと自慢せず、ただ感謝をします。何もしていないのに選ばれたというのは不思議だと思いますが、それ私たちが謙遜に「小さい者」となるためです。そして、自慢したり、いばったりしないためです。何より、最も大切なことは神様の働きを感謝し神様をほめたたえるためです。

3. 有効召命

私たち罪人は、神様が呼んでいるのに答えない罪を犯します。神様が来なさい、こうしなさい、と言っているのに、罪があるのでわからなかったり、神様の言うようにはしたくない、自分の

やりたいようにやりたい、とって神様から離れてしまいます。だから、罪人の力によっては神様を信じることはできないし、御心にしようすることもできません。

ではどうして私たちが神様を信じているかという、罪人の力ではない別の力が私たちに働いたからです。その力は、聖霊の力です。聖霊は見ることも触れることも感じることもできない、神の霊です。聖霊が働いたことがわかるのは、神様を信じられるようになったときや、神様に従えるようになったときです。これは本当に不思議なことだけれども、そういう不思議な働き方をするのが聖霊です。

今日は、「有効召命」という言葉ができました。これは、神様を信じ従えるようにしてくれる招きです。例えば、教会に招かれて聖書のお話を聞いても、結局は神様を信じない人が多いのです。けれども、神様を選んでくださっているなら、必ず信じる事ができる。神様の招きには確かに力があると信じるのです。それが有効召命ということです。

旧約聖書のエレミヤ書5章21節を開いてください。「愚かで、心ない民よ、これを聞け。目があっても、見えず／耳があっても、聞こえない民。」これは、神様の言葉を何度告げても、しらんぷりしている人たちのことを言っています。聖霊の働きを拒んでいる人たちです。

それに対して、今日のお弟子さんたちはどうだったでしょうか。ルカ5章11節を開いてみましょう。「……すべてを捨ててイエスに従った。」これは、まさに聖霊のお働きです。私たちも、聖霊のお働きを受けて主に従っていきましょう。

〈祈り〉

神様、私たちを選んでくださり、聖霊を与えてくださってありがとうございます。聖霊によってますます神様の言うことを聞けますように。

〈ねらい〉

シモンに自分を重ね合わせることで、自分自身もイエス様から呼ばれていることを感じとる。

〈展開例〉

○ルカ福音書5章1～11節を読みましよう

- 質問① イエス様が今いる場所はどこですか？
 質問② 群衆がやってきました。なんのために？
 質問③ イエス様はどこからお話しましたか？
 質問④ だれの舟ですか？
 質問⑤ 話が終わりました。シモンに何と云われましたか？
 質問⑥ シモンは何と答えましたか？
 質問⑦ シモンは魚が捕れると思いましたが？
 質問⑧ あなたがシモンなら、魚が捕れると思いますか？ なぜ？
 質問⑨ 網を降ろした結果、どうなりましたか？
 質問⑩ これを見たシモンはイエス様に何と言いましたか？
 質問⑪ なぜ、そう言ったのでしょうか？
 質問⑫ シモンの言葉を読んで、あなたはどう感じますか？
 質問⑬ 自分を罪深い者と告白したシモンを、イエス様は弟子にお選びになりました。なぜだと思いますか？
 質問⑭ イエス様が弟子をお選びになる条件は何だと思いますか？ それは私たちに備わっていると思いますか？

後半の質問は少し難しいかもしれませんが。出席者を見ながら、選んでください。

アドベントを迎えました。「わたしは罪深い者です」という告白がクリスマスの喜びと感動につながります。子どもたちと確認しましょう。

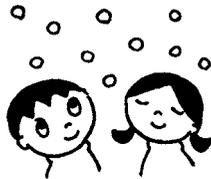
〈コラム〉

CS 教師のためのキャンプ (2011年の実践から)

キム・キョンヒ協力宣教師の提案で、CS 教師のためのキャンプを実施しました。坂戸市から車で約一時間の山の中、堂平山の展望台にあるキャンプ場です。子どものための行事はたくさん実施しますが、CS 教師がゆっくり語り合うための時間はなかなかとれないのではないのでしょうか。

主の日の礼拝の後、教会を出発。数名の教会員も飛び入り参加で天文台に到着。さっそく BBQ の準備にかかりました。抜群の眺望を楽しみつつ、野外での食事。宿泊は女性と幼児はログハウス、男性と子どもたちはテント。夜は、満点の星空と夜景を堪能。ログハウスで夜11時まで CS 教師の語り合いの時をもちました。

この晩の語り合いで、共同礼拝の説教時に別室で子ども礼拝をもつことを小会に提案することになり、現在も月に一度、第三主の日に実施しています。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

ペトロは、イエス様から選ばれました。

何に選ばれたのでしょうか？
クリスチャンとして、そして「人間をとる漁師」として選ばれました。

そのためのオーディションのようなものに合格したのでしょうか？

違います。もしオーディションだとしたら、ペトロは明らかに不合格でしょう。

自分でも認めています。「わたしは罪深い者なのです」と

ペトロが、やる気満々で、イエス様の弟子になったのではないのですか？

とてもそのようには見えません。むしろ、尻込みしているようです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」とあるとおりです。(ヨハネ15:16)

では、そんな人を、なぜイエス様は選ばれたのでしょうか？

それは、イエス様にしか分かりません。選ばれる値打ちのないペトロが、ただ恵みによって、イエス様に選ばれたのです。

イエス様は、値打ちのない人を好んで選ばれるのですか？

というより、値打ちのない者も愛して選んでくださるのです。いや、というよりも、神様のものさしで測るときに、値打ちのある人なんて一人も

いません。でも、イエス様はその値打ちのない者たちを、「私の目に価高く尊い」と言ってくださり、私は君がいいのだと選んでくださいます。

でも、選ばれたペトロのほうも立派だと思えます。自分で「わたしは罪深い」と認める心も持っているし、従いなさいと言われて、「すべてを捨てて従う」勇気と決断力もありました。

そうですね。しかし、それもすべてはイエス様が与えてくださったことです。イエス様は、ご自分のものにすると思われた人たちを、聖霊によってはじめから終わりまで導き、ふさわしく整えてもくださいます。

では、わたしもペトロ以上に値打ちがないとしても、このままで選ばれるのですか？

そうです、イエス様があなたを選ぶと決められたら、あなたがどんなにダメな者でも選ばれます。ただし、「そのままのあなた」で救われますが、イエス様はいつまでも「そのままのあなた」ではいさせてくれません。必ずご自分の手の中で、生まれ変わらせて、イエス様に似せていってくださって、神様の御用を果たすのにふさわしい器にしてください。

あなたは、何のために選ばれるのかを、いつも覚えていてください。あなたはイエス様とともに、愛と正義の神の国を打ち立てるといって、とんでもないプロジェクトのメンバーとして選ばれたのです。

ペトロのように、あなたも、イエス様の教える神の愛と正義の道に生き、新しい世界のかたちを作り出すのです。あなたはのためにイエス様に選ばれた尊い器です。希望と誇りをもって、イエス様の招きに応えていきましょう！！



テキスト ルカによる福音書 1章5～25節

〈背景と文脈〉

ルカ福音書はキリストの誕生物語の前に、洗礼者ヨハネの誕生物語を記している。ヨハネは旧約聖書の最後の書、マラキ書3章23、24節で預言されていたように(註一マタイ11:14)、キリスト(メシアを意味する)が公生涯に入られる前に、民の心を備えさせる先駆者としての働きをした。その意味で、キリストとは密接な関係がある。ちなみに、キリストとヨハネの年齢差は約六ヶ月と推測される(註1:26, 36)。

旧約最後の預言者がマラキであるが、その後の400年間、神は沈黙された。ヨハネの誕生物語は、神が旧約聖書を通してイスラエルに約束されていた、メシアによる救いのご計画の成就が、いよいよ間近いことを示すものだった。

〈洗礼者ヨハネ誕生の予告(1:5-17)〉

救済史のなかで重要な働きをしたヨハネの誕生に用いられたのが、祭司ザカリアとその妻エリサベトである。夫婦とも祭司の家系出身者だった。6節の「二人とも神の前に正しい人で」との表現から、敬虔な信仰に裏打ちされた彼らの生活は、神のみ心にかなうものであったことがわかる。エリサベトは不妊で、しかもこの夫婦はすでに老いていた。

ある日、ザカリアは自分の組(アビヤ組)が当番になったとき、くじに当たり、主の聖所に入り香をたく務めについた。このような務めは、生涯で一度だけの奉仕だった、と言われている。ザカリアが香をたいていたとき、主の天使が突然現れた。この天使の名はガブリエル(19)であり、この後マリアに現れ、彼女がキリストを身ごもることを予告した(1:26)。

突然の天使の出現に、恐怖の念に襲われているザカリアに、天使は「恐れることはない」と言い、ヨハネの誕生を予告した。そして、妻エリサベトが産む男の子をヨハネと名付けなさい、と命じた。ヨハネは「主は憐れみ深い」、あるいは「恵み深

い神の賜物」を意味する。

天使は、産まれてくる子は、母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、神の特別な使命のために聖別されていることを告げた。「イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立っていき、父の心を子に向けさせ、逆らう者に分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」という、キリストの先駆者としての使命である。のちにヨハネは成人し、主イエスが公生涯に入られる前に、この働きをしたことが四福音書に記されている。ヨハネの誕生の予告は、霊的な暗黒の中で、約束のメシアを待ち望んでいた民を慰めるために与えられたものであり、民への神の憐れみと真実を示している。

〈ザカリアの不信仰と約束の成就(1:18-25)〉

その予告に対してザカリアは「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年を取っています」と応答した。わたしは、何によって、そのことが成就することを信じるのでしょうか、という意味であり、信じるための印を求めたのである。これに対して天使は、自分は神の御言葉を告げるために遣わされた者であり、その言葉は神の御言葉であるゆえに、時が来れば必ず成就する、と告げた。ザカリアは口が利けなくなることを通して、不信仰が戒められた。皮肉なことに、口が利けなくなるという出来事が、預言の成就の印となった。

その後、天使が告げたように、妻エリサベトは身ごもった。彼女は老いていたが、神の特別なご介入によって、告げられたとおりになった。人間の不信仰は神のご計画を妨げることができない。ヨハネは旧約と新約をつなぐ預言者として歴史に登場した。彼の誕生は新約時代の到来の象徴であり、神が決してイスラエルを忘れておられないことの証しだった。(後藤公子)

テキスト ルカによる福音書 1章5～25節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

毎年くるクリスマスですが、いつもイエスさまという大きなプレゼントを頂いた喜びを新鮮に喜ぶことができること。そしてみんなの期待を超えることを神さまが用意してくださっていることを礼拝の中で一緒に神さまに期待することができることを願って。

思いを越えた喜びの訪れ

みなさんと一緒に、クリスマスを待ち望むアドベントの季節を過ごしています。今日は一緒にクリスマスの出来事に耳を傾けましょう。

皆さんはクリスマスにどんな大きなプレゼントを期待していますか。あれもこれもたくさんありすぎて分からないというお友だちもいれば、もう決まっているというお友だちもいるかもしれませんね。また通信簿次第だというお友だちもいるかもしれません。みんなすばらしいプレゼントがあるといいですね。今日はとっても大きな、とってもすてきなプレゼントをもらった人のお話を聖書から聞きましょう。

今日の聖書には、ザカリアとエリザベトという夫婦と天使が登場しました。このザカリアとエリザベトはともにユダヤ教の祭司の家系に生まれた夫婦でした。二人は神さまの定めた掟をよく守って、非のうちどころがない正しい人たちであった、そのように聖書はこの夫婦を紹介しています。けれども、その立派な彼らの姿とは異なって、彼らの心の中というのは実は暗いものでありました。それは何かといいますと、7節にあるとおり、彼らには子供がなく、彼らはすでに年をとっていたということでした。子供が生まれるということは大きな喜びですがけれども、しかし逆に、願っているながら子供が与えられないことは、これは大きな悲しみですよ。彼らには子供がいませんでした。また、当時の社会で子どもができないことは、神さまからある種の罰として理解されていました。つまり子どもがいなくて世間から冷たい

目で見られるということがあったわけです。今日の最後の25節のところ、エリザベトが「人々の間からわたしの恥をとりさってください」、こう言っているとおり、子どもができないことをエリザベトは恥だと思っていたのです。このように彼らは、子どもがいなかったということで、いつも心に暗さを抱えていました。

しかし、そのような重い暗い心で歩んでいたザカリア夫婦の元に、ここで一つのまことにさやかな喜びが訪れます。彼らに訪れた喜びとは、いったい何だったのでしょうか。子供が生まれた？ その前に出てくる喜びは、ザカリアがくじに当たったという喜びです。みんなもくじに当たるとうれしくなるでしょう。ザカリアは聖所に入るくじに見事に当選したのです。当時、祭司はザカリアだけでなく、たくさんいました。そのため、全員でくじを引いて、その年に聖所に入れる人をひとり決めていたのです。くじですから、なかには一生このくじが当たらず、一生聖所に入れないうままその務めを終える祭司もいたことでしょう。ですから、今回ザカリアがそのくじにあたったことを夫婦はとても喜んだと思います。二人して特別な喜びの食事をしたでしょうし、神さまに感謝したことでしょう。ザカリアは年をとっていましたが、もう祭司としての働きをいつやめてもいいと思ったかもしれません。しかし、この小さな喜びは、ザカリアにとっての本当の大きな喜びの前触れでした。この後もっと大きな喜びがザカリア夫婦を訪れます。

ザカリアが聖所に入りますと、そこに天使が現れました。ザカリアは天使を見て驚き、さらには恐ろしくなりました。ザカリアとしては聖所に入って決められた献げ物をして、立派に務めを果たせば十分と思っていたのですけれども、まさかここともあろうに、そこに神の使いである天使が現れたのですから、驚いて恐れるのも当然です。まさかこんなことがあろうとはと、すでにザカリアの想像を超えた出来事が起こったのですけれども、さらに天使はザカリア夫婦に、あなたたちに男の子が生まれると告げます。これこそまさに喜びの訪れでありました。自分たちはどうにあきらめていたこと、そのことがいつも心の暗さとなっていたことでした。子どもが生まれる。この喜びを神さまはザカリア夫婦に与えると言われるのです。よかったですね。

でも、ザカリアはあまりにも自分の想像を超えている事態に、天使の言葉を信じることができませんでした。「わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。そんなことがどうしてありえるでしょうか。そう、疑いの心を持ってしまったのです。そこで天使は、ザカリアに子供が生まれて名前がつけられるまで口が利けなくなるという罰をお与えになりました。そしてこの後、天使の言ったとおり、エリザベトは身ごもり、そして生まれたのが、大きくなってイエスさまを指し示すことになる洗礼者ヨハネでした。

わたしたちはこのヨハネ誕生のストーリーから何を思うのでしょうか。今日、最初にみんなはクリスマスにどんな大きなプレゼントを期待していますかと質問しましたが、それらはみんなの心を完全に満足させ、永遠に喜ぶことのできるものでしょうか。実は私たちも、ザカリアのように、小さな喜びささやかな喜びを求めて歩んでいるなど

思います。せめてこのくじがあたるくらいの喜び、自分の前に差し出されたくらいの喜び、実はそれくらいの喜びしか期待していないのかもしれない。わたしたちはいわば、自分で自分の喜びというものを計算して、喜びに自分で制限をつけて求めて歩んでいるのかもしれない。彼が、「私たち夫婦は年を取っていますから」と言ったのは、もう年をとってしまったわたしたちにとっての喜びというのはこれくらいだ、というもう自分で喜びの大きさを低く設定したからですね。

わたしたちは確かに自分の範囲で、自分の理解できる範囲で、喜ぼうとしています。しかし神さまが与えてくださる喜びというのは、それをはるかに上回って大きなものです。実を言えば、ザカリア夫婦にとりまして、このヨハネの誕生という出来事は、まだ最後の喜びではありませんでした。この後与えられるもっと大きな喜びが控えていたのです。その喜びとは、イエス・キリストの誕生ですね。年老いた夫婦に子供が生まれること以上の喜び、救い主が生まれるという大きな喜びが、この後待っています。

このアドベントの季節というのは、わたしたちが一緒に、神さまが与えてくださった、救い主イエスさまという大きな喜びを感謝する季節であるとともに、そのイエスさまが今、あなたにも与えられ、あなたと共にいてくださり、あなたが喜びの人生を歩むことの約束をしてくださったことを喜ぶ季節でもあります。わたしたちは、自分に見合うだけの喜びを期待するのではなくて、もっと大きな期待を神さまに寄せていいのだと思います。神さまはいつもわたしたちの期待を超えた喜びを持って訪れてくださったのです。それがクリスマスの出来事です。 (草野 誠)

【今週の暗唱聖句】 ルカによる福音書 1章13節より

「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。」



〈ねらい〉

神様は、神様のご計画に基づいて、一番良い時に祈りを実現してくださる。

〈展開例〉

1. お話の振り返り

- ①ザカリアは教会でお仕事をする先生でした。ザカリアも奥さんのエリサベトも、神様を信じる正しい人でした。二人は長い間、どうか赤ちゃんをくださいとお祈りしていましたが、なかなか生まれませんでした。そのうちに二人とも年をとって、おじいさん、おばあさんになってしまいました。



- ②ある日、ザカリアが教会で神様のご用をしているとき、天使があらわれました。ザカリアはびっくりして怖くなりました。天使は「恐がらなくてもいいのです。神様はあなたのお祈りを聞いてくださいました。あなたに男の子が生まれます。名前をヨハネとつけなさい。この子は救い主のことをみんなに知らせる人になります」と言いました。



- ③ザカリアは「えっ、私たちのようなおじいさんとおばあさんに赤ちゃんが生まれるんですか」と言いました。ザカリアは神様の言葉を信じなかったので、お話をすることができなくなりました。



やがて、神様のお言葉どおり、エリサベトのお腹の中に赤ちゃんができました。二人は神様に心から感謝のお祈りをしたことでしよう。

二人の祈りがかなえられたのは、二人がすっかり、おじいちゃん、おばあちゃんになってしまったときでした。

神様は、神様が一番よいと思われる時に、私たちの願いをかなえてくださいます。そのことを忘れないで祈り続けましょう。

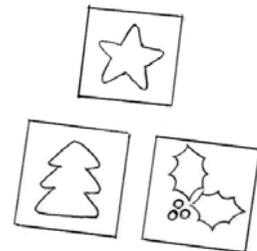
2. クリスマスブローチを作ろう

(準備するもの)

フェルト (赤・緑・黄色)、はさみ
布用のボンド、安全ピン

(作り方)

台となるフェルトを四角に切り、星やツリー、ひいらぎなどの形に切ったフェルトをボンドで貼る。裏側に安全ピンをつけてブローチにする。



〈ねらい〉

神様は、時に自分では考えられないくらい大きな喜びを与えてくださることを子供たちに気づかせる。

〈展開例〉

1. 今日はクリスマスを待ち望むアドベントのお話ですね。ザカリアとエリサベトが登場します。この二人は、神様に忠実に従う信仰深い夫婦ですが、でも、この夫婦には自分たちに子供が与えられなかったという寂しさが心の中にありました。「もう年をとっているからしかたない……。」そう思っていたんですね。そんな二人に、ある日、大きな出来事が起りました。

問① ザカリアは、くじが当たって一生に一度あるかないかの、とても大切なお仕事をすることになりました。ザカリアの気持ちはどうだったでしょうか。

答① 嬉しい、感謝、光栄、緊張……など。

問② ザカリアが香をたいて祈っている時に、天使ガブリエルが現れました。ザカリアはどんな気持ちだったでしょうか。

答② 12節

ザカリアが聖所に入ると、そこに天使が現れて、びっくりします。天使はザカリアにさらにびっくりすることを告げました。それは「あなたたちに男の子が生まれますよ」。先ほど、ザカリアは年をとっていたので子供はあきらめていたと言いました。だから、「そんな自分たちに子供が生まれるなんて信じられない！」と思って、とてもとても驚きます。あきらめていた願いが神様に聞き入れられたからです。

問③ 天使ガブリエルがザカリアに、「男の子が生まれる。主の御前に偉大な人になる」と言われて、ザカリアはどんな気持ちだっ

たでしょうか。また、ザカリアはこのように言われることを予想していたでしょうか。

答③ 信じられなかった。(20節)。このように言われることを予想していなかった。

問④ 天使ガブリエルに告げられたことは嬉しいことですか、悲しいことですか、それはなぜですか。

答④ 嬉しいこと（のはず）。願っていた子供が与えられるということ、さらに子供が神の御前に偉大な人になるため。

2. 話し合みましょう。

話し合い①

嬉しいことや、良いことが告げられたのに、どうして信じられないのか考えてみよう。また、どれくらいのことなら信じられるか話し合ってみよう。

話し合い②

ザカリアと同じように、私たちも神様の言葉が信じられないことはありますか。どうすべきですか。

3. 神様が働かれるときは私たちにはわかりません。しかし、神様が約束してくださっていることは必ず私たちを実現します。20節で神様の言葉は、「時がくれば実現」と言われています。

私たちにとって祝福が大きすぎるように見えることでも、天地を造られた神様から見れば、大きすぎるものではありません。神様はなんでもおできになります。ルカ1章37節に「神にできないことは何一つない」とあります。

〈祈り〉

神様、大きな喜びを与えてくださり、感謝します。どうか、神様の力を信じて、神様に大きな期待していただけますように導いてください。

〈ねらい〉

救い主ご降誕までの出来事を味わいつつ、待つ楽しみを知る。

〈展開例〉

○ルカ福音書1章5～9節を読みましょう

質問① このときのユダヤの王は誰ですか？

質問② この話に出てくる夫妻の名前は？

質問③ この夫妻はどういう人たちですか？

質問④ 主の聖所に入って香をたく役目はどうやって決めましたか？

質問⑤ あなたはくじに当たったことはありますか？ その時はどんな気持ちでしたか？

（アイスブレイクのつもりで自由に話をさせる）

○ルカ福音書1章10～20節を読みましょう。

質問⑥ ザカリアが聖所に入り、香をたいているとどんなことが起こりましたか？

質問⑦ 天使の言った言葉を聞いて、ザカリアはどう思いましたか？

質問⑧ ザカリアはヨハネが生まれるまでどういう状態にされましたか？

質問⑨ なぜ、口がきけなくされたと思いますか？

○ルカ福音書1章21～25節を読みましょう。

質問⑩ 天使ガブリエルの話したことは成就しま

したか？

質問⑪ ザカリアはこの事実を見て、どう思ったと思いますか？

質問⑫ エリザベトは身ごもって、どう思ったと思いますか？

質問⑬ 年老いた夫妻が子どもを生むということは人間にはできません。なぜ、この夫妻には生まれたのだと思いますか？

質問⑭ この話を読んで、神様はどのようなお方だと思いますか？

救い主のお誕生の前に、神様はいろいろな出来事を通して人々の心を整えてくださいました。そのことを覚えつつ、今年のクリスマスも、心の準備をして迎えましょう。

〈コラム〉

アイスブレイク

緊張をほぐすために、簡単なゲームや質問をするときに用います。分級で必要なのは一方的に教えることよりも、子どもの心をときほぐして教師との信頼関係を作り、話のできる関係になることではないか、と思います。

「最近どう？」といきなり聞くよりも、何か話題をふって、その反応から子どもの心にあるものを引き出す、感じ取ることが必要な、と思います。



（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

「わたしたちは自分に見合うだけの喜びを期待するのではなくて、もっと大きな期待を神さまに寄せていいのだと思います。神さまはいつもわたしたちの期待を超えた喜びを持って、訪れてくださったのです。それがクリスマスの出来事であります。」（説教展開例より）

神さまはいつも、「わたしたちの期待を超えた喜び」を与えてくださる。本当にその通りだなあと、思います。まだみんなには実感できないかもしれない。でもみんなより、少しだけたくさん人生を経験して、本当にそうだなあと、前よりは思うようになりました。

ザカリアたちは、子どもが与えられるようにと祈っただろうか？

わたしは、もう祈っていなかったのではないかと思う。もうすっかりあきらめていた。でも、祈ってもいなかった道が、主によって開かれる。恥ずかしながらわたしも、そんな経験ばかりです。

神さまを小さくしてはいけないと言われます。あなたのサイズに合わせて、神さまの力を考えてはいけない。もっと期待して、心を高くあげてあつく祈りに生きたいと思う。

ただ、注意が必要です。神さまは「期待を超えた喜び」をくださるけど、それはわたしたちにとって、いつもハッピーであるとは限らないってことも覚えましょう。

例えば、ザカリアたちにとってはどうだったか。待望の、愛しい息子のヨハネが、すくすくと育っ

て、やがてバプテスマのヨハネとして、救い主のあらわれるための道備えをすることになる。神さまのための大切な働きをすることになる。そこまでは万々歳。こんなにうれしいことはなかっただろうね。

でも、やがてバプテスマのヨハネはヘロデによってとらえられ、首をはねられることになる。人間的にはこれほど悲しくて痛ましい別れはない。せつかく神様が与えてくださった「期待を超えた喜び」が、そんなかたちで失われたことは、やはりとても悲しいことです。

でも神さまは、確かにヨハネを用いてくださって、救い主イエス様をこの世に与えるという永遠の救いのご計画を成し遂げてくださいました。それは、ザカリアやヨハネの悲しみさえも小さなものにしてしまう、「期待を超えた喜び」でした。人間的なハッピーかハッピーでないかのものさしでは到底測ることのできない、神さまのスケールでの、永遠の喜びを与えてくださいました。

クリスマスにイエスさまが与えられたというのも、そういう喜びなのです。それは、今の君にとっては、もしかすると喜びとは思えないものかもしれない。それがぼくに何の関係があるの？と思うかもしれない。でも、それは神様が周到な準備の上で君に与えてくださった、とてつもない喜びなのです。きっと君にも、いつかそれが分かる時がくる。

はっきり言って、君がどう思おうかなんて、どうでもいいんだ。君の小さい考えなんて、吹き飛ばしてしまうくらい大きな喜びが与えられたんだ。大事なのは、君のほうが、このクリスマスの喜びによって、心を高く引き上げてもらうことなんだ。



テキスト ルカによる福音書 1章57～66節

〈背景と文脈〉

エリサベトが身ごもってから六ヶ月目に、天使ガブリエルが神から遣わされ、マリアに、彼女が身ごもって男の子を産む、と告げた。また天使は、彼女の親類のエリサベトも男の子を身ごもっている、と告げた。それを聞いて、マリアがエリサベトを訪れたときの出来事が1章39～49節に記されている。「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった」(41)とある。のちにヨハネは「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(ヨハネ3:29, 30)と言ったが、この言葉を象徴するような出来事だった、と言える。ヨハネは先駆者として、メシアであるキリストを、民衆に指し示すことが使命である、と深く自覚していた。

〈洗礼者ヨハネの誕生 (1:57－63)〉

天使が告げたようにエリサベトは男の子を産んだ。近所の人々や親類はそのことを喜び合った。天使はすでにザカリアに「多くの人もその誕生を喜ぶ」(1:14)と告げていた。しかし近所の人々や親類が、ヨハネの誕生に特別な意味があることを悟り始めたのは、このあとザカリアの口が開き、神を賛美し始めるといふ不思議な出来事を見たときからだと思われる。彼らは律法(レビ12:3)に従い、八日目に割礼を施し、また父の名を取って、ザカリアと名付けようとした。当時の記録によると、生まれた男子に、父親あるいは祖父の名を付けるのは珍しくなかった。

しかしエリサベトは、彼の名はヨハネとしなければならぬ、と言った。天使は、ザカリアに、妻エリサベトが男の子を産む、と告げたとき、「その子をヨハネと名付けなさい」(1:13)と命じていた。エリサベトがどのようにして、それを知っ

たかは記されていないが、おそらく夫を通して知らされていた、と推測される。エリサベトは、産まれた子の名に関して、神の命令に従順かどうか、試されたことになる。

人々は彼女の言うことが理解できなかった。彼らには、名前に関する神の命令が知らされていないからである。それで、話すことのできないザカリアに、「この子になんと名を付けたいか」と手振りで見せた。今度はザカリアの従順さが試されることになった。彼は字を書く板の上に、「この子はヨハネ」と書いた。断定的に、「この子はヨハネ」と書いたのである。それは神が名付けられた名であり、それ以外の名はあり得ないからである。人々は驚いた。なぜなら夫婦二人とも、その子の名前をヨハネと断定したからである。

〈ザカリアの賛美 (1:64－66)〉

すると、たちまちザカリアの口が開け、神を賛美し始めた。「あなたは口が開けなくなり、このことの起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである」(1:20)、と天使に告げられていたことが成就したのである。不信仰のゆえに一時的に懲罰を受けたが、名付けに関して神の命令に従ったとき、舌がほどけ、神を賛美し始めた。この不思議な出来事を見て、人々は恐れを感じた。そして評判になった。この子には主の力が及んでいたのだらうか、と彼らは「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。

父ザカリアの預言が67～79節に記されている。幼子はいと高き方の預言者と呼ばれ、主の道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる(76, 77)、と預言されているように、彼は救済史のなかで、特別な使命をもって遣わされた預言者だった。ヨハネという名前の通り、主の民に罪の赦しによる救いを知らせ(1:77)、主が憐れみ深い方であることを告げる者となった。(後藤公子)

（単元のねらい）

ヨハネの名前（主は憐れみ深い）を78節から語ることもできるでしょうが、この説教展開例では、ヨハネに託された任務を強調して展開しました。人間の期待を神に押しつけることこそ、本末転倒な行為であり罪です。ヨハネがその一生をかけてしたことは、キリストをお迎えする備えをすることでした。私たちが神様の心をしっかり理解いたしましょう。

この子の名はヨハネ

赤ちゃんが生まれるのは、だれにとっても、とても嬉しいことですよね。生まれる前からいろいろと準備します。赤ちゃんに着せる洋服や、おむつのためにたくさんの布を用意しなければなりません。でも、生まれたら、まずしなければいけないことは、その子をどう呼ぶのかを決めることです。いつまでも「赤ちゃん」とか「おちびさん」と呼んでいるのじゃ、かわいそうですものね。2000年前のユダヤでは、お父さんお母さんの兄弟姉妹や、おじさんおばさん、近所の人が集まって名前をつける「命名式」を、生まれて八日目にしていました。

私たちは漢字を使えるので、名前はただの音だけではなく、そこに、こういう人になってほしいなあという気持ちを込められます。同じ「たかし」という名前でも、親孝行する子という意味の「孝」であったり、世の中で名前をあげて欲しいと思って「隆」とついたり、尊敬される人であって欲しいと思えば「尊」とか「敬」とついたりします。でも、この時代のユダヤでは、おじいちゃんやおばあちゃんの名前をもらったり、お父さんお母さんと同じ名前をつけたりしたのです。

今の私たちは「えー、そんなの嫌だなあ」と思うかも知れませんね。でもこれは、同じように生きて欲しい、立派な跡継ぎになって欲しいという気持ちの表れなのです。赤ちゃんを産んだエリサベトさんの旦那さんであるザカリアさんは、エルサレムの神殿という神様を礼拝する大きな建物で、人々が神様にプレゼントするために持ってき

た品物を神様に献げたり、人々のためにお祈りしたりする「祭司」という仕事をしていました。

でも、この二人には長い間、一人も子どもが生まれなかったのです。たぶん二人は、何度も何度も神様に「私たちに子どもを与えてください」とお祈りしていたことでしょう。でも何年たっても生まれず、いつの間にか、二人ともおじいちゃんおばあちゃんになっていました。「もうこれでは生まれないなあ」と誰もが思っている中で赤ちゃんができました。少し前の所で、神殿でお祈りをしている時に、天使であるガブリエルさんがやってきて、ザカリアさんにそのことを教えたことが書かれています。でもザカリアさんは、それがあまりにも不思議なことであったので信じられませんでした。このため、ガブリエルさんから怒られて、赤ちゃんが生まれるまで話せなくなりますよと言われ、本当にそうってしまったのです。

祭司という仕事は、祭司の家に生まれなければならない決まりです。ですから、みんなザカリアさんに男の子ができたと聞いて、「ああ良かった。跡取り息子ができた。この子は立派な祭司になるはずだ」と考えました。だから、お父さんのようになって欲しいと思って、赤ちゃんにもザカリアという名前をつけようとしたのです。「名付けようとした」は、「名付けていた」でも良いでしょう。おじいさんもおばさんも近所の人、もう「ザカリアちゃん」と呼んでいたみたいです。

ところがお母さんのエリサベトさんは、「いいえ、この子の名前はヨハネにしなければいけませ

ん」と反対しました。みなびっくりしたことでしょう。「そんな名前、親類にはいないし、先祖にもいないじゃないですか」と言って、何とかザカリアにしようと思いました。でもエリサベトさんが全く言うことを聞かないので、「じゃあ、旦那さんのザカリアに聞こう」ということになったのです。ザカリアさんは話せないだけではなく、耳も聞こえていなかったようです。だから身振り手振りで「この子の名前をどうするか」と聞きました。

ザカリアさんは字を書く板に「この子の名はヨハネ」と書きました。それもそのはずです。天使のガブリエルさんから、そうするように言われていたからです。ザカリアさんは誰とも話しができない十ヶ月の間、いろいろと考えたと思います。エリサベトさんとは字で書いてお話ししたのでしょう。そして神様によくお祈りしたことでしょう。周りからどんなに言われても「ヨハネです」と言ったのは、自分たちの「こういう子になって欲しい」という気持ちよりも、神様が「この子はこうなる」と考えておられることの方が大切なのだと分かっていたからです。

神様がヨハネさんにさせようとしているのは、祭司の仕事ではありませんでした。半年後に生まれてくるイエス様のために色々な準備をすることでした。教会でも、何か大切なことがあると、みんなで大掃除をすることがありますね。見せられないぐらいに悪いものは片付けます。新しいものに換えないといけないこともあります。大昔はもっと大変で、道にデコボコがないように飛び出ている所は削り、引っ込んでいる所は埋めて、平らになるようにしていました。丘を削ったり谷を埋めたりしたのです。

人間の心は神様の前にまっすぐではありません。ひどくデコボコしていて、そこを歩けばつま

ずいたり引っかかったりします。「神様のお考えなんかどうでもいいです。」「私はこういう救い主が欲しい。」「私の願いをかなえて欲しい。」「こんな気持ちでいっぱいだからです。ヨハネさんに「ザカリアちゃん」と名付けようとした人々の気持ちに似ています。自分の心が先になってしまう人たちを、神様の方に、そしてイエス様に向けさせる大切な仕事、これがヨハネさんのすることになる仕事でした。預言者という、神様のメッセージを伝える仕事です。

「名前はヨハネだ」と書いたとたんに、ザカリアさんはお話することができるようになりました。これも不思議なことですが、ヨハネさんは小さいころから少し変わった子だったようです。聖書は「主の力が及んでいた」と言っています。神様のために特別な仕事をする力があると誰にも見えていたからです。そして、大きくなるにつれて、だんだんと人から離れて、誰もいない荒野にいるようになります。神様のそばにいて、神様のメッセージを自分の中にいっばいためるためでした。

準備をする人が来ることは、400年前にもう言われていたことです。救い主が来る前にデコボコをなくしなさいというメッセージも、もっと前に言われていたことでした。神様ってなんてすごい方なのでしょう。救い主であるイエス様を地上に生まれさせるために、色々な準備をなされていたのです。それはずっとずっと昔から始まっていた。そしてヨハネさんという預言者を最後に生まれさせました。

来週はクリスマス礼拝です。だから、私たちもヨハネさんが伝えたことを思って、準備をしましょう。心の中からデコボコをなくしましょう。救い主であるイエス様を心から喜んでお迎えするためです。
(高内義宣)

[今週の暗唱聖句]

ルカによる福音書 1章76, 77節

幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。

主に先立って行き、その道を整え、

主の民に罪の赦しによる救いを

知らせるからである。

〈ねらい〉

クリスマスは、長い間準備されてきた神様のご計画が実現したときである。

〈展開例〉

1. お話の振り返り

- ① やがてエリサベトに赤ちゃんが生まれました。神様の言葉どおりの男の子でした。



- ② 「おめでとう」「おめでとう」近所や親せきの人が集まってきました。「赤ちゃんの名前は何か」ザカリアは話ができないので、「この子の名前はヨハネ」と板に書いて答えました。天使が教えてくれた名前でした。



すると、ザカリアは突然、元のように話ができるようになって、「神様、ありがとうございます」と賛美を始めました。

ヨハネは大きくなってから、イエス様が救い主であることをみんなに知らせる人になりました。



神様はこうして救い主イエス様をおくるための用意をしてくださったのですね。

もうすぐクリスマスです。心からクリスマスをお祝いする準備をしながら、楽しみに待ちましょう。

2. 紙皿のクリスマスリースを作るう

(準備するもの)

紙皿、赤いリボン、シール状のラインストーン、クリスマス柄のシール、ひも、セロハンテープ、木工用ボンド、絵の具(緑)、パレット(小皿)、筆、カッターナイフ、はさみ、千枚通し

(作り方)

- ・紙皿の真ん中をカッターナイフで切りぬき、リースの形にする。
- ・緑色の絵の具をリースにぬり、かわかす。(ここまでを先生がやっておくと早くできる)
- ・赤いリボンをらせん状に巻きつける。巻き終わったら裏側でとめる。ラインストーンを貼る。クリスマスのシールや絵を貼る。
- ・表の真ん中に赤いリボンを結んでつけ、その上に千枚通しで穴をあけて、ひもを通す。



〈ねらい〉

「ヨハネ」と名づけたザカリアの信仰とヨハネの役目を知り、備えて救い主イエス・キリストを待ち望む。

〈展開例〉

1. 今日は名前に関するお話でした。みんなの名前はだれが付けてくれましたか。お父さんやお母さん、もしかしたらおじいちゃんやおばあちゃんかもしれないですね。きっと一生懸命考えて「どんな名前がいいかなあ」と悩んで名前を付けたんだと思います。それぐらい名前というのは大切なものですね。

2. 先週、お話にでてきたザカリアとエリサベト。その二人にどうとう赤ちゃんが生まれました。元気な男の子です。近所の人たちや親戚の人たちも一緒になって喜んでくれました。そして、赤ちゃんに名前を付ける話がありました。

この時代のユダヤでは、おじいちゃんやおばあちゃん、お父さんやお母さん、そのような、親戚の中のだれの名前をとって付けていました。それは、同じように健康に生きてほしい、立派な跡継ぎになってほしいと願って、同じ名前をつけていたんです。そして、それが当たり前でした。

ところが、お母さんであるエリサベトは、いいえ「ヨハネ」という名前にする、といました。みんなびっくりします。「何を言っているんですか。親類にはヨハネなんて名前の人はいませんよ」。そう言いながら、今度は父親のザカリアに聞きます。「どんな名前をつけようと思っているんですか。」

この時、ザカリアは口が利けませんでした。それは、ザカリアが神様の言葉である「あなたたちに男の子が生まれますよ」という言葉を疑ってしまったためです。ザカリアは口が利けないので、板に字を書いてみんなに伝えまし

た。「この子の名はヨハネ。」

エリサベトさんと同じ「ヨハネ」という名前を付けるというザカリアの答えに、周りの人たちはびっくりします。そして、さらにびっくりすることに、ザカリアが「この子の名はヨハネ」と書いた途端ザカリアの口が利けるようになって、神様を賛美しました。

3. どうしてザカリアとエリサベトは「ヨハネ」という名前にしたのでしょうか。それは、神様が「ヨハネ」という名前にしなさい、と命じたからですね。

ザカリアは簡単にそうした訳ではなかったと思います。口の聞けない間、いろんなことを考えました。神様はこの子に何をさせようとしているのか、この子はどんな役目があるのか。ですから、周りの人から何を言われても「ヨハネ」という名前をつけたザカリアには、「神様に従うぞ!」という決意が感じられます。

では、ヨハネの役目とは何だったのでしょうか。この「ヨハネ」が生まれたすぐ後に「イエス様」が生まれることになります。ヨハネの役目とは、イエス様が歩いていく道を前もって整えていく役目です。とてもとても大切な役目です。イエス様の救い主の働きが、よりたくさんの人にいきわたるように、ヨハネさんが道を整え、いろいろな準備をするのです。

4. 来週、クリスマスです。神様はイエス様が生まれる前に、その為のたくさんの準備をされました。ヨハネさんを遣わしたのもその一つです。私たちもイエス様をお迎えする準備をしてクリスマスを迎えたいと思います。

〈祈り〉

神様、どうかわたしたちが神様の心をしっかり受けとめて、救い主イエス様を誕生を祝わせてください。

〈ねらい〉

救い主が生まれるまでの出来事を味わいつつ、準備する大切さを知る。

〈展開例〉

○ルカ福音書1章57～66節を読みましょう。

質問（アイスブレイク）

試験、試合、発表会のことを思い出して下さい。よく準備をしたときと、あまり準備しなかったとき、結果と気持ちはどうでしたか？

今日は、神様の準備について考えてみます。

質問① エリサベトに男の子が生まれました。

人々は何と名付けようと思いましたか？

質問② エリサベトは男の子の名をどうするべき

だと言いましたか？

質問③ なぜ、エリサベトはヨハネとしなければ

ならないと言ったのでしょうか？

質問④ エリサベトの言葉を聞いて、人々はどうしましたか？

質問⑤ ザカリアは子どもの名前について何と言いましたか？

質問⑥ なぜ、ザカリアはそう言ったのでしょうか？

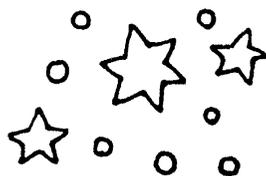
質問⑦ ザカリアは話すことができませんでした。が、どうなりましたか？

質問⑧ 人々はこれを見てどう感じましたか？

質問⑨ あなたはこの出来事を読んで、神様についてどう思いますか？

質問⑩ 今週まで洗礼者ヨハネの誕生について学んできました。ヨハネの仕事（役割）は何ですか？

質問⑪ クリスマスのために私たちができる準備は何でしょうか？



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「周りからどんなに言われても『ヨハネです』と言ったのは、自分たちの『こういう子になってほしい』という気持ちよりも、神さまが『この子はこうなる』と考えておられることのほうが大切なのだと分かっていたからです。」

(説教展開例より)

バプテスマのヨハネは、神さまの御用をするために、神さまによってこの世に遣わされた人でした。名前までちゃんと決められて生まれてきたのです(ルカ1:13)。だから、祭司ザカリアの跡継ぎとして、お父さんと同じザカリアという名前にするわけにはいかない。そのことを、ザカリアもエリサベトもよく分かっていたから、名前はヨハネだと言い張ったのです。周りのみんなは、「こうなってほしい」という自分たちの願いを中心にしようとしたけど、それはいけない、神さまの思いを中心にしなければいけないという考えが与えられたのです。

そして、ヨハネのなすべき仕事とは、みんなが正しく救い主をお迎えすることができるように、悔い改めを迫って、デコボコの心をまっさらに整えることだったと教えてもらいました。

みんなの心のデコボコを見つめてみよう。

デコボコのある心とは、「神様のお考えなんかどうでもいいです。」「私はこういう救い主が欲しい。」「私の願いをかなえてほしい。」「こんな気持ちでいっぱい的心だと言われます。

わたしが、わたしがと、わたしのお願いを中心にする、心は小さく冷えて、醜く固まります。

例えば、考えてみてください。あるテストで、どうしても勝ちたいライバルがいます。しかし、彼がテスト範囲を間違えていたことに気づきました。でも、どうしても勝ちたいから、それを教えてあげませんでした。結果は、確かにライバルには勝利しました。……これは私の中学生の時の話です。みなさんはどう思うでしょうか。

私は、やったーと思いながら、やっぱり後ろめたい思いがしました。だから、自分は悪くないと、自分の中で正当化しました。どうしても勝ちたかったんだ。間違えた相手のほうが悪い……。でも違う時に、今度は私がテスト範囲を間違えました。しかし、教えてもらったので助かりました。教えてくれたのは、そのライバルでした。私は、自分がとても惨めに思えてなりませんでした。

イエス様を心にお迎えするためには、デコボコの心をまっさらにする必要があります。そのためにバプテスマのヨハネは悔い改めを呼び掛けたと学びました。でも、大事なことを忘れてはいけない。デコボコの心をまっさらにすることなど、本当は人間には不可能なのです。

イエス様だけが、それをすることができる方です。自分の願いばかりで、小さく冷えて、醜く固まってしまったデコボコの心を、美しく整えるために、救い主イエス様が生まれてきてくださいます。そして死んでくださいます。

だから、自分のデコボコの心を逃げずにまっすぐに見つめて、そこに救い主が来てくださるのを待ちましょう。



テキスト ルカによる福音書 2章1～7節

〈背景と文脈〉

洗礼者ヨハネが誕生した六ヶ月後、イエス・キリストが誕生された。ルカはその驚くべき事実を淡々と告げている。

永遠の神、目に見えない霊であられる神、天地を創造され、万物を保持し、支配しておられる全能者、そのように偉大で無限の神が、制限のある人間の歴史のなかに介入してこられた出来事がクリスマスである。しかも、マリアとヨセフに全面的に依存しなければならぬ無力な赤子として誕生されるという、驚くような方法で、人間の世界に入ってこられた。聖書の中には不思議な出来事がたくさん記されているが、クリスマスの出来事は最も不思議で驚くべき出来事である。

〈ベツレヘムへの旅 (2:1-5)〉

ルカ福音書だけが、キリスト誕生の時期に関して、歴史的な背景を記している。それは、皇帝アウグストゥスが勅令を出し、最初の住民登録をした時のことであった。その住民登録は、キリニウスがシリア州の総督だった時に行われた最初のものだった、と記されている。キリニウスは紀元前6～4年まで総督の地位にあった。ちなみに、キリストの誕生は紀元前4年前後と考えられる。

皇帝アウグストゥスの統治のもと、ローマ帝国には平和な時代が訪れていた。皇帝からローマ帝国の全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出たとき、ユダヤの国はローマ帝国の支配下にあった。ヘロデ王 (マタイ2:1) は、この皇帝の下でユダヤの国を治めていた。この住民登録は徴税のために行われ、各自が出身の町へ行って登録することが求められた。ヨセフはダビデ王の子孫だったので、ダビデの町、ベツレヘムへ、いいなずけのマリアと一緒に旅立った。一見偶然と思える出来事を通して、神の預言が着々と成就していくのを見る。神はすでに、預言者ミカを通して民に次のように語っておられた。「エフラタのベツレヘムよ、

お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る」(ミカ5:1)。ちなみに、東方からメシアを訪ねて旅して来た占星術の学者たちが、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と聞いたとき、ヘロデに召集された祭司長や律法学者がこの個所を引用し、メシアはベツレヘムに生まれる、と告げた (マタイ2:1-6)。

ナザレからベツレヘムへの旅には約三日を要した、と言われているが、臨月のマリアを連れての旅は、私たちの想像以上に困難を伴ったことだろう。神の子の誕生は、そのようにして実現したのである。

〈キリストの誕生 (2:6,7)〉

「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」(6)と、ルカは淡々と記している。そして、その理由として、宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである、と付け加えている。この時ベツレヘムには、住民登録のために他地域から来た者が多くいただろう。旅人たちが宿泊するための宿屋は満杯であり、彼らのための場所はなかった。臨月のマリアのために、誰もその場所を譲ろうとはしなかった。結果的に、家畜小屋で生まれたキリストは飼い葉桶の中に寝かせられた。

偉大で栄光に満ちておられる神の子が、ご自身を低くされて、しもべとして人間の世界のなかに入ってきた。私たちを救うためである。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」(マタイ8:20)と言われた地上での主イエスの生涯を象徴している出来事である。人類の歴史の中で最も栄光ある出来事は、最も低く卑しい場所で、しかも、だれの注目を集めることもなく起こったのである。(後藤公子)

(単元のねらい)

救い主を遣わす神の御計画は歴史の中で準備され、クリスマスの夜、ついにその時が訪れる。脚本、背景、音楽、衣装と準備が整った舞台の幕がいよいよ開かれる。そのとき、この世のどのような力と企てが働こうとも神の御計画が妨げられることは決してない。人となりたもうた神の御子をこの世におくりこむことに、神の心遣いと愛があふれている。クリスマスとはどんな日なのか。なぜ喜びの日なのかを明らかにしたい。(説教は小学生を対象として展開した。)

うれしい うれしい クリスマス

今年もイエス様がお生まれになったことを感謝し、お祝いするクリスマスがやってきました。

私たちはアドベントが始まってから一日一日、クリスマスの訪れを楽しみに待ってきました。

世界で一番はじめのクリスマスの時、マリアもヨセフも、もうすぐ赤ちゃんが生まれてくるのを楽しみに待っていたことと思います。だんだんマリアのお腹が大きくなって、赤ちゃんが生まれる月になりました。二人は、生まれてくる赤ちゃんのために、寝る場所やお布団などを準備して、その日が来るのを待っていたことでしょう。

ところがある日、二人が住んでいる町にローマの国の王アウグストゥスから住民登録をせよという命令が届きました。その頃、ユダヤの国は、ローマの国の支配のもとにありました。すべてのユダヤ人は、自分の生まれた町に帰って、住民登録をしなければならなくなりました。住民登録とは、自分の国の人口がどれくらいで、どれだけの税金を取り立てることができるか、戦争で戦える男がどれくらいいるか等を調べるために届出をさせることです。王様のこの命令によって、ヨセフとマリアは、遠い町まで旅をしなければならなくなりました。

ヨセフの生まれた町はベツレヘムでした。ナザレからベツレヘムまでは、男の人の足でも、歩いて三日以上、お腹の大きいマリアと一緒にならもっとかかります。

旅の途中でマリアの具合が悪くならないか、途

中で赤ちゃんが生まれてしまったらどうしようかと心配したことでしょう。しかし、二人は神様の守りを信じてベツレヘムに向かって出発しました。

実はこの出来事の中に、神様の深い御計画があったのです。旧約聖書のミカ書には、救い主はベツレヘムでお生まれになるという預言があります。ダビデの生まれた町ベツレヘムの中からイスラエルを治める者が出るという預言です。

自分たちの国を支配している王様の命令には誰も逆らえません。しかし、神の御計画は、世界で一番力のあるローマ皇帝の命令であっても、妨げられることはありません。むしろ神様の約束が指し示していた場所、ダビデの町であるベツレヘムへイエス様をお連れするために、皇帝の命令が用いられたのです。

ここに、人の力と企てをも御心のままに動かしてご支配なさる神様の知恵と力があらわれています。このようにクリスマスは、神様の力ある御業があらわされた日なのです。

「マリアは……初めての子を産み、布にくるんで……寝かせた」(2:6,7)とあります。この布という言葉は産着と訳せる言葉です。産着とは、生まれてきた赤ちゃんの体を包むものです。もうすぐ生まれてくる赤ちゃんのためにマリアが細やかな心遣いをもって準備をしていたのです。(ソロモンの知恵の書7:4参照)。

神様もまた、私たちのところに、その独り子をお送りくださるとき、深い知恵に基づく心遣いをしてくださいました。

私たちは大切な人に贈り物をするとき、相手の人のことを思いながら、その日に向けて準備をします。

神様は何千年も前からこの日に向けて計画し、準備してこられました。神様の約束の 때가近づくと、マリアとヨセフに天使を遣わして、まもなく起こる神様の御計画を知らせました。そしてついに、ずっと昔から約束されていたとおりのことが、ベツレヘムで、この夜、実現したのです。クリスマスは神様の救いの御計画がこの歴史の中で形となってあらわされた喜びの日なのです。

今日の聖書の箇所には、「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた」とあります。

そこはきれいな場所ではありませんでした。ふかふかの布団もありませんでした。動物の糞のにおいがしみついた場所でした。神の御子にはふさわしくない場所のように思われました。

しかし、そこに満ちていたのは暗さではありません。イエス様を見つめるマリアとヨセフは喜びに包まれていました。そこが家畜小屋であろうとどこであろうと、神様の御子がおられるところに、神の愛は輝きあふれるからです。

飼葉桶の中には、神様からの贈りものであるイエス様が眠っていました。神様の御子であられ

る方が、人間と同じ姿で生まれてくださったのです。それは、罪を犯した私たちに代わって罰を受けてくださるためでした。私たちを罪と死から救い出すためでした。

この日、クリスマスの祝福にあずかったのは、マリアとヨセフ、羊飼いたちだけではありませんでした。この家畜小屋にいた牛やロバたちもイエス様の誕生を飛び跳ねて喜んだことでしょう。クリスマスの喜びは、人間だけではなく、人間の罪によって深く傷つきうめいている動物にも及んでいくのです（ローマ8:21,22）。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」（ヨハネの手紙一4:9,10）

イエス様こそ、神様の愛がぎっしり詰まった神様からのプレゼントなのです。クリスマスは、この世界に届けられた神様の愛と恵みを共に分かち合う時なのです。

造られたものすべてが、御子イエス・キリストと御子を遣わされた父なる神様をほめたたえ、この愛を人々に伝える時なのです。

さあ、あなたも神様から勇気をいただいて、この喜ばしい知らせを携えて、町に出ていこうではありませんか。（漆崎英之）

[今週の暗唱聖句]

ヨハネの手紙一 4章9節前半

神は、独り子を世にお遣わしになりました。

この方によって、わたしたちが生きるようになるためです。



〈ねらい〉

クリスマスの喜びを共に味わい、お祝いしよう。

〈展開例〉

1. お話の振り返りと工作

別紙を参考にして、マリアとヨセフ、赤ちゃんイエス様の人形を作る。(先生が作っておく)

人形を動かしながら、今日のお話を振り返る。(分級の中で、子どもたちと一緒に人形を作ってから、お話を振り返ってもよい)

一度、先生が人形を動かしながら演じる。それから、子どもたちにマリアやヨセフになってもらって、せりふを言ってもらう。

ヨセフ：マリア、僕たちはベツレヘムに行かなければならないんだ。

マリア：もうすぐ赤ちゃんがうまれるのに、だいじょうぶかしら。

ヨセフ：きっと、神様が守ってくださるよ。

(歩く二人)

マリア：ヨセフ、お腹が痛くなってきたの。赤ちゃんが生まれそうだわ。

ヨセフ：それは大変だ。どこか泊るところをさがさないと……。

ヨセフ：すみません。もうすぐ赤ちゃんが生まれそうなんです。部屋はあいていませんか。

宿屋の主人：部屋はもうどこもいっぱいなんだ。馬小屋でよかったらあいてるよ。

ヨセフ：ありがとうございます。

(二人は馬小屋に入る)

イエス：オギャー、オギャー。

マリア：まあ、なんてかわいい男の子なんですよ。

ヨセフ：天使が教えてくれたとおりにだね。神様、

救い主をおおくりくださって、ありがとうございます。

ロバ：ヒーホー。

牛：モ〜。

マリア：まあ、ロバや牛さんたちも喜んでるわ。

ヨセフ：今日は本当にうれしい日だね。

(みんなで「うれしいうれしいクリスマス」を歌う)

2. ビスケットでミニケーキを作るう

(子どもが工作をしない場合)

(用意するもの)

ビスケット三枚(一人分)、市販のホイップクリーム(砂糖入り)、イチゴ

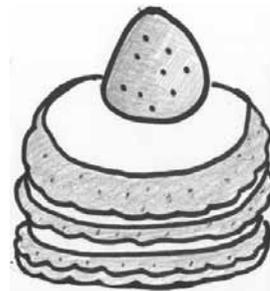
(作り方)

ビスケットにホイップクリームをぬり、その上にビスケットを重ねてまたホイップクリームをぬる。(三枚のビスケットの間にホイップクリームがぬってあるようになる)

一番上のビスケットの上にもホイップクリームをぬり、その上にイチゴをのせる。

冷たく冷やしてもおいしいです。

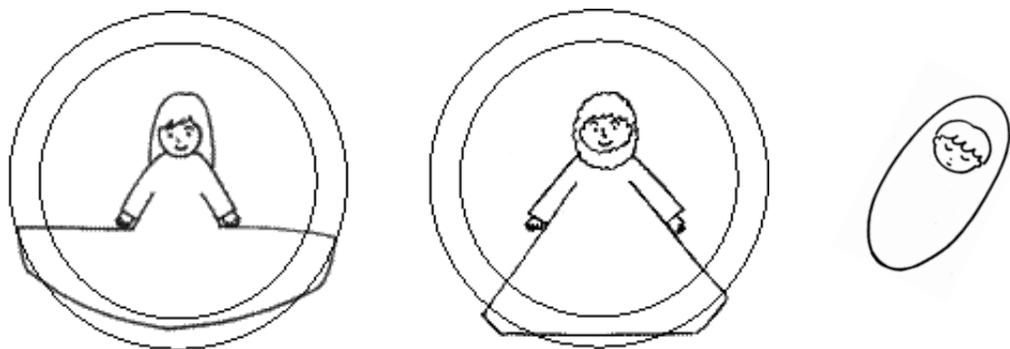
お茶と一緒にいただきますよ。



クリスマスの工作

(用意するもの)

紙皿2枚(直径16cm)、ホッチキス、マジック、はさみ、柔らかい布またはカラーペーパーナプキン、ティッシュペーパー、セロハンテープ、厚紙、モール

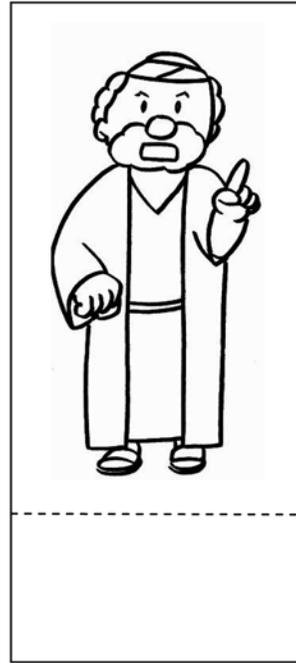
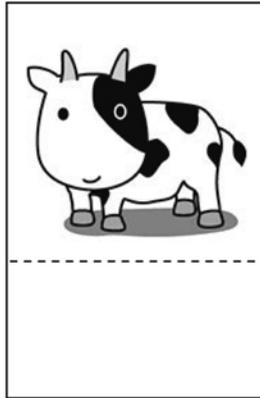
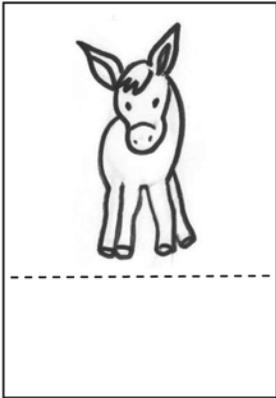


紙皿に絵をかき、色をぬる。切り抜いて服のすそを丸めて後ろでホッチキスで止める。うまく立つようにすそをハサミで切って調整する。

頭の後ろ側にティッシュペーパーを丸めたものを貼り、立体的にする。頭に布またはカラーのペーパーナプキンをかぶらせる。(セロハンテープを丸めて内側で布を止める) ヨセフの頭だけにモールを巻く。

厚紙に赤ちゃんイエス様の絵をかき、ティッシュペーパーでぐるぐる包む。それを折り紙で折った舟の中に入れる。





2倍にコピーして切り抜き、厚紙に貼って点線で折って立てる。(宿屋の主人を途中で登場させる)



2倍にコピーして切り抜き、絵の倍ぐらいの幅の厚紙に貼って両端を折り、立てる

〈ねらい〉

イエス様の誕生の次第、そして飼い葉桶で生まれたことの意味を学ぶ。それらがすべて救いのためであることを学ぶ。

〈展開例〉

1. 子どもたちと語り合います。

問① ヨセフとマリアは最初どこにいて、どこへ移動することになりましたか。地図を見てください。その距離はどれくらいでしょうか。

答① 4節、聖書巻末の地図

問② ヨセフとマリアがベツレヘムへ行かなければいけなかった理由は何のためですか。

答② 1～4節

問③ いろいろなどころから住民登録のために人が集まってきます。ヨセフとマリアが宿屋についた時に泊まる場所がありましたか。そして、イエス様はどこで生まれましたか。

答③ 7節

問④ イエス様は神の子だから、他の人が泊まる場所を譲ってくれてもいいはずですが、もっと素晴らしい場所で生まれることができたのではないのでしょうか。

答④ もちろん、神様だからできます。けれども、そうありませんでした。

考えてみよう①

人が泊まる場所ではなくて家畜小屋に泊まって、マリアさんやヨセフさんはどんな気持ちだったでしょう。きっと嫌だったし、つらかったはずですが。救い主の誕生なのに、どうしてこうなるのだらうと思ったりしたのではないのでしょうか。

問⑤ 飼い葉桶という汚い場所で生まれたのはなぜですか。

答⑤ 人間の貧しさや苦しみを理解するため。

問⑥ イエス様が人となって生まれたのは、何のためですか。

答⑥ 十字架で死なれることで、私たちの罪を代わりに負ってくださり、また律法を完全に果たして私たちを救うためです。(ヨハネー4:9前半)

考えてみよう②

罪によって私たちはどんなことをしてしまうだろうか。でも、イエス様が私たちの罪を代わりに負ってくださいました。罪を犯さないで神と共に生きる生き方を教えてくれました。イエス様のおかげで私たちの生活はどういう風に新しくなるだろう。(例：ガラテヤ5:22)

〈祈り〉

イエス様が赤ちゃんの時から、私たちを救うための人生を歩んでいたことを知りました。私たちを罪から救い出すためにイエス様がお生まれになったことを心から感謝します。



〈ねらい〉

神様のご計画は世界で一番力のある皇帝でさえも逆らうことはできず、むしろその力を用いてご計画を実行されたことを学ぶ。また、そのご計画は永遠の昔からのものであり、私たちへの愛に満ち溢れていることもふれたい。

〈展開例〉

○ルカ福音書2章1～7節を読みましょう。

質問（アイスブレイク）

計画したことが予定通り実行できた経験、また、予定通り実行できなかった経験について話し合う。

今日は、神様の計画と実行について考えてみます。

質問① 皇帝アウグストゥスから全領土の住民に何をしなさいという命令が出ましたか？

質問② 人々はみな登録をするためにどこへ旅立ったのですか？

A. 自分の出身地

質問③ ヨセフはどこからどこへ旅立ったのです

か？

質問④ ヨセフはなぜ旅立ったのでしょうか？

A. 皇帝の命令だから仕方なく（神様のご計画だから）

質問⑤ ヨセフはなぜ、ユダヤのベツレヘムへ旅立ったのですか？

A. ダビデの血筋であり、ベツレヘムがダビデの町（故郷）であったから

○ミカ書5章1節を読みましょう。

質問⑥ 皇帝の命令と神様の計画はどちらが先にあったのでしょうか？

質問⑦ 神様のご計画で実行されないことはあるのでしょうか？

質問⑧ 神様のご計画を阻むことができるものはあるのでしょうか？

質問⑨ 神様は今どのような計画を持っていると思いますか？

（あなたに対して、世界に対して）

質問⑩ あなたはこの出来事を読んで、神様についてどう思いますか？



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「イエス様こそ、神さまの愛がぎっしり詰まった神さまからのプレゼントなのです。クリスマスは、この世界に届けられた神さまの愛と恵みを共に分かち合う時なのです。」(説教展開例より)

次の聖句をとにかく暗記して心に刻もう。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ福音書3:16)

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

(ヨハネの手紙一4:9,10)

どんな苦しみが襲い掛かっても、決して忘れることのないように。たとえ今日死ぬことになって

も、その死の間際に、体の中から言葉が出てきて思い出すことができるように、神さまの言葉をしっかりと骨に刻み込もう。

イエス様こそ、最高のプレゼント。イエス様を与えてくださった神が、私を愛していないわけなどないと、この聖書の言葉から何度でも確認しよう。

人が生きていくのに必要なことなんて多くはないのです。神は、私にイエス様という最高のプレゼントを与えてくださった。それほどに私は神に愛されている。それだけ知っていれば、あとはなんとでもなるのです。

金がなくても、家がなくても、どんなにつらい日々でも、生きていけるのです。

「いい加減なこと言うな、そんなに単純じゃない」いいえ、違います。こんなに単純なことで生きていけるから、人間というのは不思議な生き物なんです。

イエス様こそ、神の愛がぎっしり詰まったプレゼント。今日の分級は、これだけで十分!!



テキスト ヨハネの黙示録 21章1～4節

21章はヨハネの黙示録全体の中でクライマックスとも言える箇所である。ここでヨハネは、「新しい天と新しい地」を見る。更に天から降ってくる新しいエルサレムの幻を見る。そして、そこで神の語りかけを聞く。段落としては1節～8節が一つのまとまりとなっている。

ヨハネ黙示録の中で、このようにして直接、神御自身の声が聞こえるのはここが最初であることに注意したい。

「わたしは新しい天と地を見た」(1節)。ここに聖書の福音書が凝縮して語られていると言った人がある。聖書は、「初めに神は天と地を創造された」(創世記1章1節)という言葉で始まった。この最初の天と地が新しく創造されたと語るのが黙示録である。人間の罪によって汚れた天地が、神によって新しくされると黙示録は語る。この新しい天と地の望みは、イザヤ書にも語られていた。「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する」(イザヤ65章17, 18節)。この望みが今や実現する。このようにして聖書のすべての使信がここに集約しており、この箇所は聖書全体の終着点である(6節でも「アルファであり、オメガである。初めであり、終わりである」と終わりと共に初めについても語られていることに注意したい)。

「もはや海もなくなった」(1節)とあるが、海は、黙示録では竜の住み処であり、悪の象徴である(イザヤ57章20節)。聖書全体では海は死や不安を表すことも多い。それが、この時にもうなくなる。

また、ここには「涙」「死」「悲しみ」「労苦」(4節)についても語られている。これらのことは私たちの現実であると共に、人間の墮罪とも関わる

ものである(創世記3章16, 17, 19節参照)。それらのものがここでなくなる。

すべてのものがアダムが罪を犯す前の状態に回復されるというよりも、すべてのものが完成する。ここには終わりの日に与えられる、より積極的な恵みが語られる。

ヨハネはまた「聖なる都、新しいエルサレム」(2節)を見る。新しい天と地にふさわしい新しいエルサレムである。すべてが新しくされるので、この都もまた新しくされる。この都は、「夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて」、「天から下って」くる(2節)。この新しいエルサレムは、キリストのからだなる教会を表す。キリストの教会が、神によって全く清くされる。ここでは終末が、結婚式に譬えられている。終末は、完成の時であり、喜びの時なのである。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり……」(3節)。

ここでの幕屋はもう一時的な住まいではなく、永遠の住まいである。もう神の民は神から離れてしまうことはない。

「神は自ら人と共にいて」(3節)とあるが、この言葉は「自ら人と共にいてくださる神」とも訳される。クリスマスに誕生された主イエスのもう一つの名とされるインマヌエル(マタイ1章参照)である。神は涙し、死に、悲しみ、労苦する人と自ら共にいる道を開いてくださった。私たちは今、ここですでにこの恵みにあずかっており、それが福音なのであるが、なお不完全である。けれども、この時には全く完成する。

私たちはこのような終わりの日、再臨の日を待ち望んでいる。この日は、私たちにとって喜びの日であり希望の日である。(橋谷英徳)



テキスト ヨハネの黙示録 21章1～5節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問35, 36, 80

(単元のねらい)

一年の終わりに主に感謝し、主に信頼して新しい歩みを始めるように招く。

安心して行きなさい

今日は、何の日でしょうか？ 先週は、クリスマスでしたね。でも、今日はクリスマスではありません。まだお正月でもありません。

そうです。今日は一年の最後の教会学校の礼拝の日です。みんなは一年間に普通は何回、日曜日があるか、知ってますか？ 答えは52回です。ところが、今年は少し違っていています。今年は53回日曜日があるのです。その53回目の日曜日が今日になるわけです。そして、ですから、今年最後の日曜日です。今日はそういう特別な日です。

今日は、先生から、みんなに一つだけお願いがあります。少しの間だけ目を閉じてみてください。そして、この一年にあったことを、思い出してみてください。しばらくの間、心を静かにして、「いいですよ」と先生が言うまで、じっと黙って、思い出してみてください。

—— 一分間ぐらいの間 ——

どうですか？ どんなことを思い出しましたか？ きっとみんな、それぞれに色々なことを思い出したのではないのでしょうか？

楽しいこと、うれしいことを思い出した人もいます。遠足、キャンプに行ったときのこと。おいしいごはん、アイスクリーム、おいしいケーキを食べたこと。お友だちと一緒にゲラゲラ笑ったこと、遊んだこと。テストで100点とか（これはないかな？）。サッカーでゴールを決めたとか。いろんなことがあったね。

でも、楽しいことばかりじゃなくて、きっと悲

しいことやつらいことを思い出した人もいると思う。どんなことかな。お友だちと喧嘩したり、もしかしたら意地悪された人もあるかもしれません。学校の先生から叱られた。テストでよい点がとれなかったとか。病気をしたお友だちもいるかもしれません。つらくて悲しくて、泣いたこともきっとあったでしょう。

あともう一つ、こういうこともあるかもしれません。もしかしたら、こんなことを思い出した人もいるかもしれません。あんなことをするんじゃないかった—ということ。お父さんやお母さんに嘘をついたり、お友だちにひどいことを言ってしまったたり、弟や妹にひどいことしちゃったとか。きっとあんなことを言うんじゃないかった、こんなことするんじゃないかったということも思い出すことがあるかもしれません。

うれしいこと、楽しいこと、それは全部、神さまが私たちにくださったことです。ですから、神さまに心から、感謝しましょう。でも、もしかすると、みんなは、神さまじゃない、ぼくが頑張ったからだよ—と思うかもしれません。

その気持ち、よ～くわかります。確かにそのとおりだと思います。でも、実は私たちが頑張ることができたのも神さまのおかげです。神さまが力を与えて、頑張ることができるようになってくださったのです。テレビを観ている時々、サッカーの選手でシュートを決めた後にお祈りをしている選手がいます。「ぼくがシュート決めたんだぞーすごいぞー」というのではなく、「神さま、ぼくがシュート決められたのは神さま、あなたのお

かけです」と神さまに感謝をしています。だから、私たちも感謝しましょう。

では悲しいこと、苦しいことはどうでしょうか？正直に言います。そういうことが、なぜあるのか、実はよくはわからないのです。説明できることもあります、できないことも多くあります。「神さま、どうして?」「神さま、なぜ?」と思うこともたくさんあります。ただ、神さまは悲しいことや苦しいことが、神さまに愛されている人たちの毎日の中にあるということを語っていただきます。

主イエスさまも弟子たちに、こう言われました。「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ16章33節)。ですから、苦しいことや悲しいことがあるからと言って、神さまはおられるのかなあとかっかしてはいけません。疑わないで、神さまを信じ続けてください。

そして、今日、みんなに伝えたい一番、大切なことは、苦しいことや悲しいことがあってもそれはいつまでも続くのではないということです。必ず終わりが来るということです。

今日は一年の最後の日曜日、明日は12月31日で、一年最後の日です。悲しいことや苦しいことにも必ず終わりが来ます。神さまはそう約束してくださっています。

実は先生は、子供の頃から、よく歯が痛くなりました。歯が痛いのは辛いですね。それはみんなも分かるかもしれませんが。痛くて夜も眠れない。そういう時間はものすごく長く感じます。辛くて苦しい時は、長くいつまでも続くように思えるかもしれませんが。でも絶対に、いつまでも続かないのです。必ず終わりがきます。

「明けない夜はない」という言葉があります。いつまでも夜は続きませんね。暗い夜が来ると、必ず朝がきます。だから、どんなにつらいことや苦しいことがあっても、それがどんなに長く続くように思っても必ず、終わる日が来るのです。そ

のことは、絶対に大人になっても忘れないでください。苦しい時は、「イエスさま、助けてください」と祈ってください。

辛いことや悲しいことはこの世の中に、たくさんあります。でも神さまは必ず、終わりをもたらして、結着をつけてくださいます。今日、読んだ聖書の箇所にはそう書いてあります。悲しみが終わって、喜びの日が来ると約束されています。「だから大丈夫です、心配しないでいいですよー」と神さまは私たちに言っていただきます。

神さまは、私たちがした悪いことも、友だちの悪口を言ったりしたことも主イエスさまによって赦してくださいます。

一番悪いこと、神さまが悲しまれることは、私たちの心が神さまから離れてしまうことなのです。それはうれしい時も悲しい時にも起こります。

イエスさまは、私たちが赦してくださいとお祈りするときに、その私たちの罪を赦してくださいと約束してくださっています。だから、今日、赦してくださいとお祈りしましょう。「イエスさま、お赦してください」と。そして、神さまは、お祈りを聞いて、私たちを神さまのもとに戻してくださいます。

ここにおられる先生たちも、みんな日曜日になると、ここでイエスさまにごめんなさいをしています。そして、とても不思議なことなのですが、イエスさまにごめんなさいを言うと、安心が与えられます。この一年の終わりの今日の日曜日にもみんなでイエスさまにお祈りしたいのです。

「イエスさま、お赦してください」と。

どうでしょうか。みんなこれで、新しい一年を安心して迎えることができるのではないのでしょうか。主イエスさまを信じて、主イエスさまに従って、主イエスさまに助けていただいて、新しい一年も歩んで行きましょう。心配しないで安心して歩んでゆきましょう。(橋谷英徳)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 16章33節後半

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。

わたしは既に世に勝っている。」

〈ねらい〉

一年を振り返って、神様の恵みに感謝する。

〈展開例〉**1. 思い出そう ーどんなことがあったかなー**

(1年間の教会学校の写真などを用意しておく)
この一年間、どんなことがあったかな。思い出してみよう。

1月、2月、3月と順番に写真などを見ながら、幼稚園や教会学校、お家での出来事などについて話し合う。

教会では、イースター、ペンテコステ、花の日、母の日、父の日、夏のキャンプ、クリスマスなど、いろいろな楽しいことがありましたね。

また、一年の中にはいろいろな季節があります。春になると雪がとけて、芽が出て、きれいな花がたくさん咲きますね。

夏になるとセミが鳴きだしたり、ひまわりが咲いたりします。

秋になると、涼しくなって葉っぱが黄色や赤に変わります。おいしい実がたくさんなりますね。

冬になると、寒くなって雪が降ってきます。

神様は私たちが楽しく過ごせるように、こんなふうに美しく変わっていく季節をくださいました。

2. 神様の恵みに感謝！

一年じゅうで、楽しいこと、うれしいことがたくさんありました。でも、けがをしたり病気になったり、友達とけんかをしたり、悲しいこともありましたね。

でも、どんなときでも神様がみんなを守ってくださったので、安心して過ごすことができました。

神様、ありがとうございますと心から感謝をささげましょう。新しい一年も、イエス様に従って行くことができるようにお祈りしましょう。

3. 季節の移り変わりを本で味わおう

図書館などで、四季の移り変わりがわかる図鑑や絵本などを借りてきて、一緒に見る。

「楽しく遊ぶ学ぶ きせつの図鑑」(小学館の子ども図鑑プレ NEO)

「木のうた」(ほるぷ出版)

「りんごのき」(福音館書店)

「おおきなきがほしい」(偕成社)

「日本 めぐるきせつかわるけしき」(福音館書店)

4. 新聞紙で遊ぼう！**○新聞折りたたみゲーム**

(新聞紙を一人に一枚ずつ配る)

二人が一組になって向かい合う。

それぞれ持っている新聞を広げてその上に立つ。(靴をぬいだ方がやりやすい)二人でじゃんけんをして、負けた人が自分の敷いている新聞紙を半分に折って、その上に立つ。これを繰り返して行って小さくなって立てなくなった人の負け。(二人一組でなく、一人の先生対生徒全員でもよい)

○目隠し風船わりゲーム

スイカ割りのスイカの代わりに風船を置く。

目隠しをして、新聞紙を丸めた棒で風船を割る。

棒の先に画鋲をつけておいてもよい(危ないの取り扱いに気をつけてください)

○新聞破りゲーム

大人が新聞紙の両端を持つ。子供が走って行って新聞紙を破く。空手のように、真っ二つに破いたりしても楽しいです。

○新聞玉投げゲーム

新聞紙のボールをたくさん作り、ダンボールの箱の中に入れるゲーム。チーム対抗で。



〈ねらい〉

イエス様は必ず再臨すること、その日には全ての悲しみも苦しみもなくなり、神の平和の中に完全に入れられるという、大きな希望を学ぶ。

〈展開例〉

1. 先週は、イエス様の誕生をお祝いして、そのことを学びました。今年も神様がイエス様を通して、いろいろな恵みをくださいました。祈りが聞かれたこともあったり、つらいことがあっても神様が大切なことを教えてくれたりしたことがあると思います。

2. イエス様のことについて振り返りましょう。

問① イエス様はマリアから生まれました。そして大人になられてから十字架で死なれました。その後、イエス様はどうなったでしょうか。

答① 三日目に復活した。弟子たちに現れた。天に昇っていかれた。聖霊を送ってくださった。

問② 天に昇られたイエス様は再び戻って来ると言われています。本当に戻ってくるのでしょうか。使徒言行録1章11節を開いてみましょう。

答② 「……またおいでになる」

またおいでになることを、再臨と言います。その日はいつか、それは分かりませんが、必ずおいでになります。クリスマスの到来をみんなが待ち望んで、本当に来られたように、イエス様も必ず再臨なさってくださいます。

3. その時に主を信じている私たちはどうなるのでしょうか。テサロニケー4章15～17節を開いてみましょう。イエス様を救い主と信じて、先に亡くなってしまった方々は復活すると言われています。ローマ6章4節にも書かれています。開いてみましょう。神様は私たちの体を復活させ、その時には全く罪のない体としてください

ます。

問③ 罪から生じるものは何でしょうか。

答③ ローマ6章24節。

(参考 ガラテヤ5章19～21節)

問④ イエス様が再臨するとき、罪のない栄光の体に復活させられて、どのような喜びがありますか。

答④ 黙示録21章4節。

4. 今の時代はサタンが働いています。そのために、悲しいことや悲惨なことが起こりますし、サタンが私たちに罪を犯させたりします。しかし、イエス様の再臨の日にはサタンの働きが完全に滅ぼされます。サタンが滅びるので、神様に反対する者がいなくなります。完全な神の平和が実現し、みんなが神様に喜んで従うようになり、悲しみも苦しみもなくなります。

問⑤ 黙示録の文章では海は、悪を行なわせる竜のすみかとして書かれています。「海もなくなった」と黙示録21章1節にあります。どうことでしょうか。

答⑤ 神様に反対するものがなくなったということ。そこに完全な平和があります。世界のすべてが平和な世界になります。

5. 考えてみよう。

神様に自分が背いたことで悲しい事があったことはありませんか。あるいは、周りにいる人で、神様に背いて悪いことをするために自分が悲しい思いをしていませんか。神様は、必ず神様にサタンを滅ぼし、悪を滅ぼしてくださいます。時期は明らかにされていませんが、黙示録22章20節を開いてみましょう。「わたしはすぐに来る」とあります。だから、イエス様を喜んで信じて新しい年を迎えましょう。

※永井春子『青少年のためのキリスト教教理』(日本基督教教育委員会)を参照して執筆しました。

〈ねらい〉

- ・一年をふり返り、主に感謝する。
- ・新しい年への希望を語り合う。

〈展開例〉アイスブレイク

○この一年間、どんなことがありましたか？

嬉しかったこと、つらかったこと、いろいろあったでしょう。

今日、こうして分級を共にすることができているのは、神様のお守りがあったからですね。一年間をふり返りつつ、神様への感謝を新たにしましょう。

○クリスマスを終え、ひといきついていることでしょう。

一年最後の分級はどのように過ごしましょうか。いつもよりたくさん賛美の歌を歌うのもいいですね。行事の写真などがあれば、用意しておくといいでしょう。

○新しい年、神様に何を期待しますか？

中学生になる子どもたちは、期待と不安が入り交じっているかもしれません。

また、中学生になると部活や塾が礼拝やCS出席を阻むケースが多くあります。親に連れられて来ていた子どもたちが、そのことに反発を覚えることもでてくるでしょう。小学科上級の先生にとって、祈りや自らの信仰姿勢が試される時期です。

○黙示録21：1～4を読み、味わいましょう。

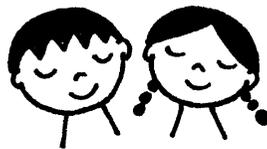
〈コラム〉

坂戸教会CSの進級

みなさんのCSでは、進級を何月にしますか？坂戸教会では、一月初めの主の日が進級式にあたります。6年生の子どもは小学校卒業前に中学科へ進むというわけです。

中学科でがんばっているCS生徒がいれば、6年生のよいモデルになります。教師以上に身近なお兄さんお姉さんがよい影響を与えます。来る一月から三月の時期を大切に過ごしたいものです。

感謝します



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

今年ももうすぐ終わりですね。来年は2013年だ。でも来年は本当に来るのかな？ぼくらは毎日、明日が来るのが当たり前だと思って生きてるし、来年が来るのが当たり前だと思って年末を過ごす。でも、それは当たり前じゃないってことに、今日は心をとめよう。

時間はいつまでも永遠に続くわけじゃない。世界のはじまりを与えられた神様が、終わりを与えられる時に、時間はとまる。今、神様が終わりをもたらされるなら、2013年は来ない。

神様が終わりをもたらされる時、それを終末という。終末には何があるのだろうか。それは恐ろしい時だろうか。

いいや、それはキリストを信じる者にとって、慰めの時、救いの完成の時。その時、イエス様は再び来てくださって、罪のない世界、新しい天地を完成させてくださる。

私たちは、いつも泣いている。

神様の愛の教えに背いて、互いに傷つけあい、心がかみあわないで泣いている……。

あなたが大切だと神様は言うのに、自分では自分を大切にできないで、ダメな自分だといじめては独りで泣いている……。

どうしても別れたくない人が死んでしまう……自分もまたいつか死なねばならない……アダム の 墮落から始まったこの悲しい運命に、不安をおびえて泣いている……。

思うようにいかないことばかり。生きていくのは苦しいことばかり。病気がある、アンラッキーなアクシデントがある。貧困がある、戦争もある、日本も近いうちに戦争を起こしてしまうかもしれない。温暖化は進み、放射能は広がる……。これはすべて、罪人である私たちの歴史の結果だ。私たちは、そういう罪の悲惨にあえいで泣いている

……。

しかし、終わりの時、キリストは再び来てくださり、信じる私たちの目から「涙をことごとくぬぐい取ってくださる」と約束されているんだ。「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(黙示録21:4)と書かれているんだ。神様が終わりをもたらされる時は、そんな慰めの時、救いの完成の時。

そんな終わりの時がいつ来るのだろうか？ イエス様はいつ来てくださるのだろうか？ 今年はまだ来ないかな？ 来年はどうか？

2000年前から、クリスチャンはずっとその時を待ってきた。その時はすぐに来るってイエス様は言ったはずなのに……って思いながら。でも「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」(ニペトロ3:8,9)

大事なものは、その終わりの時の希望に支えられて、今という時を、イエス様に心を向けてしっかり生きることだ。

神様は、私たちにとって、この世界にとって、大きな意味をもつ一年として、この2012年も与えてくださった。私たちは、そんなに大切な一年として、この一年を過ごしたのだろうか？

2013年を与えられるとすれば、それもまた神様が、私たちのために用意して下さる特別な一年に違いない。大事に生きよう。来年が来るのは、当たり前なことじゃないんだ。



2013年1～3月カリキュラム（第48号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
1月6日 新年	キリストとの結合	問30	ウ小教理29-32、ハイデ86
		ヨハネ15:1-5	ヨハネ15:5
聖霊によりキリストと結び合わせられている。キリストとの絆のうちに歩もう			
13日	罪の赦しと義認	問31	ウ小教理33、ハイデ56
		ルカ18:9-14	イザヤ1:18b
神によって義とせられ、罪赦される喜び、打ち砕かれることの祝福に生きよう			
20日	神の子とされる幸い	問31	ウ小教理34、ハイデ56
		ローマ8:12-17	ローマ8:17
神の子とする霊を受けている者として、神を「父よ」と呼ぶ幸いに生きよう			
27日	聖化の恵み	問32, 33	ウ小教理35, 36
		ルカ19:1-10	エフェソ4:24b
キリストがわたしたちのうちに生きておられ、聖とされていることを喜ぼう			
2月3日	愛の歩み	問32, 33	ウ小教理35, 36、ハイデ60, 61
		エフェソ5:1, 2	エフェソ5:1
神の完全な愛に覆われている。わたしたちも喜びをもって愛に生きていこう			
10日 (信教の自由)	良心の自由と尊厳	—	子どもカテキズム43, 44
		ヨハネ16:33	ヨハネ16:33
勝利者である主イエスと共に、信仰の戦いに生きていこう			
17日 レント	主イエスと共に歩む	問34	ウ大教理64-66
		マタイ28:18-20	マタイ28:20
信仰者の歩みは孤独ではない。主イエスと共に歩み、神の民と共に歩もう			
24日 レント	再臨の約束	問35	ウ小28、ウ大56、ハイデ52
		使徒1:6-11	使徒1:11b
神の右に座しておられる主イエスが再び来られる。約束の実現を待ち望もう			
3月3日 レント	再臨に備える	問35	ウ小36、ウ大56、ハイデ52
		テトス1:11-15	テトス2:13b
主の再臨を待ち望み、地上の生を光の子として大切に生きることに励もう			
10日 レント	死のときの祝福	問36	ウ小教理37, 38、ウ大教理84-90
		ヨハネ14:1-3	ヨハネ14:3
主イエスに結ばれて死ぬことの幸いを知り、恐れから解き放たれて歩もう			
17日 レント	苦難のキリスト	—	子どもカテキズム24
		ルカ23:13-25	イザヤ53:8
ピラトによって裁かれ、苦しみを負ってくださった主イエスを見つめよう			
24日 受難週	十字架のキリスト	—	子どもカテキズム24
		ルカ23:32-43	ルカ23:43
十字架上で「楽園」を約束してくださった贖い主キリストを見つめよう			
31日 復活祭	復活のキリスト	—	子どもカテキズム24
		ルカ24:36-49	—コリント15:20
共に食事をして体の復活を指し示し、平和を与えてくださった主イエスを喜ぼう			

2012年度 年間カリキュラム（第45～48号）

（2012年4月～2013年3月）

二年サイクル カテキズム カリキュラム 第一年（子どもカテキズム問1～20）

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2012年 第45号	4月1日	進級式・受難週	十字架のキリスト	—
	4月8日	復活祭	復活されたキリスト	—
	4月15日		人生の目的 一神を知る一	問1
	4月22日		神の栄光をあらわす	問1
	4月29日		救われた喜び	問2
	5月6日		神の子とされた喜び	問2
	5月13日	母の日	礼拝こそいのちの源	問3
	5月20日		いのちのパンで生きる	問3
	5月27日	聖霊降臨祭	神と人を愛する（一）	問4
	6月3日		神と人を愛する（二）	問4
	6月10日	花の日	キリスト証言	問5
	6月17日	父の日	神の御言葉	問6
	6月24日		霊なる神	問7
	第46号	7月1日		唯一の神
7月8日			生ける神	問9
7月15日			三位一体の神	問10
7月22日			主権者なる神	問11
7月29日			天地創造	問12
8月5日		（平和）	平和を創り出す	—
8月12日			摂理の神（一）	問13
8月19日			摂理の神（二）	問14
8月26日			人間の創造	問15
9月2日			人の罪	問16
9月9日			罪と墮落	問17
9月16日		（敬老の日）	罪の悲惨	問18
9月23日			神の怒り	問19, 20
9月30日			贖い主の必要性	問21

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第47号	10月7日		二性一人格	問22
	10月14日		罪からの救い主	問23
	10月21日		謙卑のキリスト	問24
	10月28日	宗教改革記念	高挙のキリスト	問24
	11月4日		預言者イエス	問25
	11月11日		大祭司イエス	問26
	11月21日		真の王イエス	問27
	11月25日		恵みのみ	問28
	12月2日	アドベント	選びと有効召命	問29
	12月9日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月16日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月23日	降誕祭	主イエスの降誕	—
	12月30日	年末	一年の恵みの感謝	—
2013年	1月6日	新年	キリストとの結合	問30
第48号	1月13日		罪の赦しと義認	問31
	1月20日		神の子とされる幸い	問31
	1月27日		聖化の恵み	問32, 33
	2月3日		愛の歩み	問32, 33
	2月10日	(11信教の自由) (13-レント)	良心の自由と尊厳	—
	2月17日	レント	主イエスと共に歩む	問34
	2月24日	レント	再臨の約束	問35
	3月3日	レント	再臨に備える	問35
	3月10日	レント	死のときの祝福	問36
	3月17日	レント	苦難のキリスト	—
	3月24日	受難週	十字架のキリスト	—
	3月31日	復活祭	復活のキリスト	—

〈執筆よりひとこと〉

●子どもの目線で語り、交わり、楽しく学べる分級ができればと思います。(漆崎春美)

●展開例執筆のために祈り支えてくださった皆さんに感謝します。(酒井啓介)

●仕事の後に毎晩書いて熱を出したというエピソードも生まれました。

(坂戸教会教会学校教師会)

●難しい教えを楽しく、深い真理を分かりやすく……。うーん、難しい。よい訓練の機会をいただいています。(坂井孝宏)

●今年も猛暑の夏でした。まもなく過ぎやすい秋を迎えます。いろいろな行事をとおして、地域の子どもたちと向かい合って、彼らに届く言葉の獲得に励みたいものです。(長谷川潤)

●発行のためにお祈りくださり、ありがとうございます。それぞれの現場での取り組みに主の祝福をお祈りしています。(望月 信)

〈あとがき〉

●第47号をお届けいたします。今号も、多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●子どもたちの信仰の証を募集しています。子ども自身の言葉でも、教師(もしくは親)の言葉でもかまいません。皆さまは、主の日の朝、誰よりも早く教会の玄関をくぐり、祈りつつ、子どもたちを迎えておられることと思います。皆さまの奉仕の労苦を主の豊かにねぎらってくださいますように。そして、子どもたちの信仰告白と受洗の実り以上のねぎらいはないでしょう。喜びをぜひ互いに分ち合いましょ。

●教師の皆さまの声を募集しています。奉仕の悩みや苦しみも分かち合いましょ。長く教師として奉仕を重ねておられる先輩方には、若い教師への失敗談や幸いな体験をお分かちください。新米教師、教師の補助者の若い兄弟姉妹からの素朴な

質問をお待ちしています。今さら、聞けない……という恥ずかしがり屋の中堅教師の質問も大歓迎です。(誌面での匿名も可です。)その他、礼拝賛美やダンス、さまざまな取り組みをご紹介ください。誌面の活性化に、ぜひご協力ください!

●礼拝部分を「教理説教のための聖書黙想」と「説教展開例」の二本立てで構成する試みをしています。いかがでしょうか。皆様のご意見をお寄せいただけますと嬉しいです。

●日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。

●Soli Deo Gloria!

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひ購読ください。また、品切れになっていた『子どもカテキズム』を再刷しました。現在のカリキュラムは、『子どもカテキズム』に基づいて編まれています。ぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第40号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼ひ』(800円)のお買い求めも下記までお願い致します。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihito.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	橋谷英徳 (関キリスト教会牧師)
袴田康裕 (園田教会牧師)	説教展開例
巻頭説教	草野 誠 (恵那教会牧師)
宮武輝彦 (芸陽教会牧師)	高内義宣 (津島教会牧師)
日曜学校・教会学校訪問	漆崎英之 (金沢伝道所宣教教師)
井原忠郷 (聖愛幼稚園園長、忠海教会長老)	橋谷英徳 (関キリスト教会牧師)
聖書黙想・説教展開例	分級展開例
小野静雄 (多治見教会牧師)	幼稚科
大西良嗣 (滋賀摂理教会牧師)	漆崎春美 (金沢伝道所教会学校教師)
望月 信 (高蔵寺教会牧師)	小学科下級
長谷川潤 (四日市教会牧師)	酒井啓介 (宿毛伝道所宣教教師)
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	小学科上級
木下裕也 (名古屋教会牧師)	坂戸教会教会学校
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	中学科
相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)	坂井孝宏 (勝田台教会牧師)
二宮 創 (太田伝道所宣教教師)	イラスト作画
聖書研究	表紙 片岡契一 (高島平キリスト教会長老)
後藤公子 (神戸改革派神学校講師)	本文 岡野美佳 (青葉台教会会員)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2012年10・11・12月号 (季刊)
第47号
2012年9月2日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
